

靈界物語 第四一卷 舍身活躍 辰の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四一卷』愛善世界社

2002(平成14)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 天空地平 てんくうちへい

第一章 入那の野邊 いるなののべ〔一〇五〕

第二章 入那城 いるなじやう〔一〇六〕

第三章 偽戀にせこひ 一〇七

第四章 右守館うもりやかた 一〇八

第五章 急告きふこく 一〇九

第六章 誤解ごかい 一一〇

第七章 忍術使にんじゆつし 一一一

第二篇 神機赫灼しんきかくしやく

第八章 無理往生むりわうじやう 一二二

第九章 蓮はぢすの川邊かはべ 一二三

第一〇章 狼おほかみの岩窟いはや 一二四

第十一章 麓ふもとの邂逅かいこう 一二五

第一二章 都入みやこい 一二六

第三篇 北光神助きたてるしんぢよ

第一三章 夜の駒よるこま 〔一一一七〕

第一四章 慈訓じくん 〔一一一八〕

第一五章 難問題なんもんだい 〔一一一九〕

第一六章 三番叟さんばそう 〔一一二〇〕

第四篇 神出鬼没しんしゆつきぼつ

第一七章 宵企みよひたく 〔一一二一〕

第一八章 替へ玉かだま 〔一一二二〕

第一九章 當て飲みあの 〔一一二三〕

第二〇章 誘惑いっわく 〔一一二四〕

第二一章 長舌ちやうぜつ 〔一一二五〕

序文
じよぶん

抑も我國に傳はる古典は、凡て豊葦原瑞穂國（地球全體の國土を謂ふ）の有史以前の傳説や考量を以て編纂されたものもあり、有史以後の事實を古文書や古傳説なぞを綴り合せて作られたものもあつて、我國に傳はる古事記、日本書紀、舊事紀、古語拾遺、風土記、姓氏録、神社縁起等の如きは、その確不確を判定するに苦しむ點も澤山にあります。彼と此と矛盾することもあれば、又甚だしきは同じ書籍の中に撞着して居る箇所も決して尠くはないのであります。殊に歴史としての連絡を缺いて折り、一として其正確を保證する光明線を見出すことが出来ないのであります。故に古往今來、賢哲の説に幾多の相違があり、矛盾があり、撞着があつて終始一貫以て採るべきものは見出すことが出来ないのあります。然し此等の矛盾や撞着の中にも亦おのづから一條の脈絡があつて、只之を見る人の

位置と研究の方法若しくは信念の厚薄等に依つて大に其趣を異にして居ります。本居宣長、平田篤胤の如きは其の立場から信仰的神祕的解釋を下し、歴史的哲學的の解釋は殆ど副物として居る。又佛敎家や儒者の如きは各その立場に應じて、或は哲學的に、或は歴史的に、或は世評的に見解を加へて居る。彼の新井白石を始め近時の歴史家の如きは、我古典を純然たる歴史として解釋を試みむとして居るのであります。我國に傳はる古典を解釋せむとし、歴史的、神話的、哲學的、宗教的等の見解及び是等の二者又は三者を合操して解釋せむとする數種があつて、而して又其一種の中にも幾多の解釋法や異説があり頗る混雜して居る様であります。すが、熟慮すれば何れの解釋にても條理は整然として存し、以て建國の根底と民族の特質とに及ぼす點は略同一に歸すものとも言ひ得べく、換言すれば建國の根本義と民族の特性とは神代書の解釋如何に關せず、確固不動、牢として抜くべからざるものありと斷言し得べきも、餘り古典の解釋をして小部分的なる極東の一孤島にのみ局限して居るのは、貴重なる我國傳來の古典をして愧かしむるものと謂ふべきであります。地球上の各國家の建設は、古來に於ける或優秀なる人種の

首長たるものが、高天原即ち天教山や地教山、アーメニヤ、埃及、メソポタミヤ、エルサレム、オノコ口島若くは其の首都等に於て、その子孫竝に從屬者の中より特に俊逸なるものを選抜して完全なる遠征的の冒險隊を組織し、以てその國土萬物を開發經營したもものなることは、神示の『靈界物語』に由つて見るも明白なる事實であります。古典に所謂國津神なる民族にも、北種もあり南種もあつて其數六七種に及んで居ります。

結局高天原人種即ち天津神族に全く吸收せられ血化せられて高加索民族なるものが現はれたり、又大和民族なる君民同祖の一血族一家的の團體に成つたのもあります。併し乍ら、眞の太古の神人族その他の關係を知悉するには、到底三種や五種の古傳記にては九牛の一毛だも判然するものではない。この物語も亦其の通りであつて、何程現代の著書より見れば浩瀚なものだと謂つても、その大要さへ表示することは困難であります。天地混沌陰陽未分際より現代に至るまでの宇宙の現幽神三界の出來事や神の御經綸を大體に於て明かにするには、本書三十六卷（四百頁一卷）をその一輯として四十八輯を口述せなくては、詳細に説示するこ

とは出来ないのであります。四十八輯全部完成する時は冊數一千七百二十八となり、瑞月が今後身を終るまで口述を續けても到底不可能的の事業であります。故にその大要のみを摘み、細微の點は略して成るべく小數の冊子に於て可能的明瞭に述ぶる覺悟であります。讀者は何卒氣長く子孫に傳へて研究あらむことを希望致します。斯く述ぶる時は、この物語全部を讀了せなくては安心立命の域に到達せないならば、始めより讀まない方が氣が利いて居ると思はる方もありませうが、決してそんなものではありません。只一卷の物語の中にも宇宙の眞理や神の大意志や修身齊家の活きた教訓もあり、過去に於ける歴史もあり、種々雑多の警句もあり、金言玉辭もありますから、一冊でも心讀せられむことを希望いたします。要するにこの『靈界物語』は東西兩洋に於ける古典や神話に漏れたる點のみを補ふべく神様の命のまにまに口述編纂したものであります。

大正十一年十一月七日

總説そうせつ

神かみの道みちにては高天原たかあまはらの天國てんこくなれども、佛ぶつの道みちにては清淨國土せうじやうこくど又は略りやくして淨土じやうどといふ。又神道またしんだうにては唯一ゆゑいつの主宰者しゆさいしやを天之御中主大神あめのみなかぬしのおほかみと稱しょうし、無始無終むしむしうの靈力體三れいりよくたいさん大だいの原靈神げんれいしんと云いひ、佛敎ぶつけうにては無量壽佛むりやうじゆぶつ又は阿彌陀佛あみだぶつと唱となへて居ゐる。無量壽佛むりやうじゆぶつに種々いろいろの別名べつめいがあります。即ちすなはち、

無量光佛むりやうくわうぶつ

無邊光佛むへんくわうぶつ

無礙光佛むげくわうぶつ

無對光佛むたいくわうぶつ

炎王光佛えんわうくわうぶつ

清淨光佛せいじやうくわうぶつ

歡喜光佛くわんきくわうぶつ

智慧光佛
ちゑくわうぶつ

不斷光佛
ふだんくわうぶつ

難思光佛
なんしくわうぶつ

無稱光佛
むしやうくわうぶつ

超日月光佛
てうにちげくわうぶつ

と號ごうされて居ゐる。一切いっさいの衆生しゆじやうあつて斯この光ひかりに遇あはむものは、三垢さんく消滅せうめつし身意しんい柔軟にうなんに歡喜くわんき踊躍ゆうやくして善心ぜんしん生しやうずべし。若もし三塗さんづ勤苦ごんくの處ところにあつて此この光明くわうみやうを見みたてまつらば、皆みな休息ぐそくを得えてまた苦惱くなうなく壽終じゆしゆうの後のちみな解脱げだつを蒙かうらむ。無量むりやう壽佛じゆぶつの光明くわうみやう顯赫かくにして十方じつぱうを照耀せうえうす云々うんぬんとあるのは、神道しんだうに謂いふ獨一どくいっ眞神しんの御洪德ごこうとくを説といたものであります。

又また淨土じやうどの有様ありさまを左さの如ごとく説といて居ゐる。今いま私わたくしは佛典ぶつてんに依よつて淨土じやうど即すなはち高天原たかあまはらの眞しん相さうを示しめすのも、餘あまり讀者どくしやに對たいして徒勞とらうでもないと思おもひまして、本卷ほんくわんの總説そうせつ欄らんに附ふ記きすることと致いたしました。曰いはく、

その國土には七寶の諸樹世界に周滿せり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、瑪瑙樹、【しやこ】樹あり。(以下何れもその莊嚴優美の比喻辭也)

或は二寶乃至三寶乃至七寶うたた共に合成せるあり。

或は金樹の銀葉華果なるあり。

或は銀樹の金葉華果なるあり。

或は瑠璃樹あり玻璃を葉とす華果また然なり。

或は水精樹あり瑠璃を葉とす華果また然なり。

或は珊瑚樹あり瑪瑙を葉とす華果また然なり。

或は瑪瑙樹あり瑠璃を葉とす華果また然なり。

或は【しやこ】樹あり衆寶を葉とす華果また然なり。

或は寶樹あり、紫金を本とし白銀を莖とし瑠璃を枝とし水精を條とし珊瑚を葉と

し瑪瑙を華とし【しやこ】を實とす。

或は寶樹あり、白銀を本とし瑠璃を莖とし水精を枝とし珊瑚を條とし瑪瑙を葉と

し【しやこ】を華とし紫金を實とす。

或は寶樹あり、瑠璃を本とし水精を莖とし珊瑚を枝とし瑪瑙を條とし【しやこ】
を葉とし紫金を華とし白銀を實とす。

或は寶樹あり、水精を本とし珊瑚を莖とし瑪瑙を枝とし【しやこ】を條とし紫金
を葉とし白銀を華とし瑠璃を實とす。

或は寶樹あり、珊瑚を本とし瑪瑙を莖とし【しやこ】を枝とし紫金を條とし白銀
を葉とし瑠璃を華とし水精を實とす。

或は寶樹あり、瑪瑙を本とし【しやこ】を莖とし紫金を枝とし白銀を條とし瑠璃
を葉とし水精を華とし珊瑚を實とす。

或は寶樹あり、【しやこ】を本とし紫金を莖とし白銀を枝とし瑠璃を條とし水精
を葉とし珊瑚を華とし瑪瑙を實とす。

此の諸々の寶樹行々あひ値ひ、莖々あひ望み、枝々あひ準へ、葉々あひ向ひ、華々
あひ順ひ、實々あひ當り、榮色光耀として視るにたふべからず。清風時に發りて

五音の聲を出す。微妙の宮商自然に相和せり』
と示してある。是ぞ全く瑞の御魂豊國主神の分靈なる和魂の神大八洲彦命が一旦

つきてゐるこのかみ
月照彦神と現じ再生して釋迦となり、天極紫微宮より降り來りて天國淨土のその
いちぶの眞相を抽象的比喩的に説示されたものであります。讀者は右の佛説に由り
て神道に謂ふ高天原又はキリストの天國、佛教の兜率天、清淨國土は皆同一にし
て、且つ至微至清莊嚴の神境靈域たることを覺らるる事と思ひます。
瑞月は印度地方の太古の物語を説くに當り、天國の眞相を佛の教を藉りて示す
ことの近道なるを思ひ、『舍身活躍』（辰の巻）の總説に代へ茲に引用した次第
であります。

かむながらたまちはへませ
惟神靈幸倍坐世

大正十一年十一月七日

王仁識

第一篇 天空地平

第一章 入那の野邊（一一〇五）

木枯すさぶ秋の空 野邊の木草も黄金姫の

神の命の神司 四方に清照姫命

レーブヤカルを従へて 天津日の神西山に

入那の國の小都會 ヨルの都へ進み行く

暗の張はおろされて 森の小鳥がやがやと

鳴く音も寂しき田圃路 脚下みたり四人が

こころいそいそ進み行く 忽ち森の木蔭より

現はれ出でし黒い影 母娘二人を引抱へ

暗やみに紛まぎれて何處どことなく 足音あしおと忍しのばせ矢やの如ごとく

忽たちまち姿すがたを隠かくしけり レーブとカルりやうにんの兩人りやうにんは

母娘おやこの姿すがたの消きえしより 打驚うちおどろきて忍しのび足あし

聲こゑもひそかに彼方あち此方こちと 宵暗よひやみの空そらすかしつつ

力ちから泣なく泣なく探さがしゆく。

レーブ「オイ、カル、困こまつたなア、こんな處ところでお二人様ふたりさまを見失みうしなひ、どうしてハル

ナの都みやこの鬼熊おにくま別様わけさまに申譯まをしわけが立たつものか。われわれ兩人りやうにんは草くさを分わけてもお後あとを慕したひ、

その御在處おんありかを尋たづねて、御主人様ごしゆじんさまにお渡わたし申上まをしあげねばならぬぢやないか」

カル「そりや貴様きさまの言いふ通とほりだ。吾々われわれも斯かうして依然じつとして手てを束つかね惟神かむながらに任まかす

と云いふ譯わけには行ゆかないなア。神界旅行しんがいりよかうの際さいにも生魂いくむすび姫命ひめのみこと様さまから惟神かむながら中毒ちゆうどくをしては

ならないといふことを大變たいへんに戒いましめられたのだからなア」

「オイ、カルよ、熟々つらつらんが考かんがへて見みると黄金わうごん姫様ひめさま、清照きよてる姫様ひめさまは吾々われわれから見みれば幾十段いくじふだん

とも知しれない神格者しんかくしやでもあり、神様かみさまの直接ちよくせつの御神力ごしんりきを戴いただだ居をられるのだから、

餘り心配は要るまいと思ふよ。併し乍ら此の儘放任して置く譯には行かないから、吾々としてのベストを竭して見ようぢやないか。あの黒い影は、どうやら狼か獅子の群のやうだつたが、それならば吾々は、決して心配は要らない。御兩人様には狼が守護して居るのだから大丈夫だよ。〔狼、獅子は皆比喻なり。蔭武者又は強者の意〕

何は兔もあれ、神様に祝詞を奏上して、御兩人様の御無事を祈ることに致さうぢやないか

ア、それが善からう
と茲に兩人は森蔭の暗に跪坐して天地の神明に祈願を凝らし、夜の明くるを待つこととせり。何處ともなく空中に聲あり、
「レーブ、カルの兩人、必ず心配致すに及ばぬ。黄金姫、清照姫は神の都合に依つて二三日の間神界から御用に使うて居るから、汝は明朝未明にここを出立いたして入那の都へ一足先へ参れ。母娘兩人は後より追付くべければ、兩人に心配なく今夜は此處で夜を明かしたが宜からうぞよ」

と雷の如き聲聞え來る。兩人はこの聲こそは全く天聲なり、神の御示しなりと、喜び勇み森の大木の根に腰打ちかけて、四方山の話に夜を更かし、取留もなき雑談の花を咲かしつつありけるが、レーブはそろそろカルに向ひ擲掬ひ始めたり。

「オイ、カル、貴様は大切な女房に肱鐵の亂射を浴せかけられた擧句の果は、近所のセムの背蟲男に横奪りされたといふ評判を薄々聞かぬでもないが、其後どうしたのだい。あの儘に泣き寝入りらしいが、それではカルの男振も駄目ぢやないか。何故貞操蹂躪の訴訟を提起せないのか」

「ソナ事が何ぼ何でも男として出来るものかい。貞操蹂躪の訴訟は女からするものぢやないか」

「女に限つて貞操蹂躪の訴へを起すことを得た時代は、今後三十餘萬年後の廿世紀の體主靈従の時代の事だ。今日は最早廿世紀より三十餘萬年の過去の神代だ。男子だつて貞操蹂躪の訴訟が提起出来ない道理があるかい。貴様は未來の法律のみに迷従して、現代の法律を忘れて居るのか、アーン」

「それでも婆羅門教では女子の貞操といふことはあるが、男子の貞操といふ事は

聞かないからのう」

「婆羅門教では教主の大黒主さまから一夫多妻主義ぢやから、婦人は丸切り機械扱ひにされて居るやうなものだよ。婦人の立場として貞操蹂躪の訴へでもする権利がなくては堪らないからだよ。然し一夫一婦の道を奉ずる三五教では妻の方から貴様の女房のやうに夫を捨て他の男と情を通じたり、夫を盲目にしよつた時は、男だつて矢張貞操を蹂躪された事になるのだ。男の方からその不貞腐れの女房に對して、貞操蹂躪の訴訟を提起するのは當然だ。女ばかりに貞操蹂躪の訴訟権があるのは未來の廿世紀といふ世の中に行はれる制度だ。併し婆羅門教は文明的進歩的宗教だと見えて、三十五萬年も凡ての規則や行り方が進歩して居るわい。

アハ、ハ、ハ、ハ、

「さうすると、鬼雲姫様は永らく夫の大黒主様と苦勞艱難して、彼處までバラモンの基礎を築き上げ、ヤレもう樂ぢやといふ閒際になつて、大黒主さまから追出され、其後へ立派な若い石生能姫さまを女房に入れられて、自分は年を老つてから、アンナ殘酷な目に合されて居ながら、何故貞操蹂躪の訴訟を提起なさらない

のだらうかなア」

「そこが強食弱肉の世の中だよ。大黒主さまより上のお役もなし、之を制御する法律もないのだから、是計りは致し方がない。司法、行政、立法の三大權力を握つて居るのが大黒主だから、これを制御し懲戒する權利ある者は大自在天様より外にはないのだ。思へば下の者はつまらぬものだよ。鬼雲姫様は随分お道の爲には沐雨櫛風、東奔西走して、漸くあれだけの土臺を築き上げ、今一息といふ所では放逐とは餘り残酷ぢやないか。それだから婆羅門教は無道の教團だといふのだ。是が 教であつたら大變ぢやないか。部下の宣傳使や信徒が承知せないからなア」

「それでも三五教の神柱神素盞鳴尊様は一夫多妻ぢやないか。八人同じやうな年配の女の子があつたぢやないか」

「神素盞鳴尊様は月の大神様ぢや。元より女房はない。八人乙女の出來たのは肉體の御子ではない。靈魂の美はしき乙女を八人も方々から拾ひ集めて、その乙女の靈魂に對し自ら嚴の御息を吹きかけて我子と爲したまうたのだ。吾々のやうに

暗がりくらで夫婦ふうふうが拵こしらへたのとは違ちがふのだ□

□それならあの八人乙女やたりをとめを生うんだ肉體にくたいの親おやはあるだらうな□

□ソリアあるとも、併しかし乍ながら八人乙女やたりをとめとも皆捨兒みなすてこを拾ひろつて自分じぶんの子こに遊あそばしたの

だから、兩親りやうしんは尊みこと様さまには御分おわかりになつて居ゐても、八人乙女やたりをとめの方ほうでは矢張やつぱり眞しんの父上ちちうへ

と思おもつて居をられるやうだ。肝腎かんじん要かなめの御精靈ごせいれいを分與ぶんよされて居ゐるのだから、假令たとへ肉體にくたい

の兒こでなくとも肉體にくたい以上いじやうの近ちかい親したしい御兒みこになるのだ。おれ達たちも矢張やつぱり神素蓋かむすきの鳴尊のみこと

様の孫位まじくらゐなものだ。今迄いままでは大黒主おほくろぬしの孫まこだつたが俺おれも今度こんどいよいよ尊みこと様の孫まこになつ

たのだ。貴様きさまも昨日きのふあたりから尊みこと様の曾孫位ひまごくらゐになつて居ゐるかも知しれないよ□

□さうか、有難ありがたいなア、ア、惟かむながら神靈かみながら幸倍坐ちはへませ世惟かむながら神靈かみながら幸倍坐ちはへませ世せ

レーブ、カルりやうにんの兩人りやうにんは森林しんりんに嘯さへつり始はじめた諸鳥もとりの聲こゑに目めを覺さまし、あたりの明あかく

なつたのに打驚うちおどろいて、

□オ、カル、もう夜明よあけだ。よく草臥くたびれてグツと一寢入ひとねいりやつてしまつた。サ

ア是これから兩人りやうにんが力ちからを合あはして奥様等おくさまたちの所在ありかの搜索そうさくしようぢやないか□

□さう慌あわてるには及およばぬぢやないか。たつた今主人いましゆじんになつた所ところだ。言いはば二日ふつか月づきさ

まのやうなものだよ……。現はれて間もなく隠るる二日月……。そんな水臭い主人を捜した所で仕方がないぢやないか。来るものは拒まず、去る者は追はず式で此世を渡つて行かねば、何程石に根つきをするやうな案じ方をしたつて、會ふ時が來な會はれるものぢやないワ。マアマア氣を落付けて惟神に……。オツトドツコイ、此奴は言はれぬワイ……。お目にかかる時を待つことにしようかい」

「貴様最早變心しかけよつたな。怪しからぬ奴だ。さういふ冷やかな根性で居ると、又今度は八萬地獄へ眞逆様に落ちるぞ」

「冷やかなといふが、晩秋初冬の境目だ。冷やかなのは當然だ。人は天地に習ふのが惟神ぢやないか。男心と秋の空、曇るかと思へば直に照る、照るかと思へば曇る、天地を以て教となし、日月を以て經とするのだから、貴様のやうな偽善者とは此カルさまはチツと違ふのだ」

「貴様は森で轉寢をして居る間に、又もや大黒主の眷族共に憑依されたのだな。何程秋の空だと云つても、餘りキツイ變り様ぢやないか」

「代と云ふ字は「かはる」と書くから、刻々に變るのが世の中だ。道端の岩のや

うに常磐に堅磐に動かなくては、世界の進歩も天地の經綸も出来るものぢやない。世の中は三日見ぬ間に櫻哉……と云ふだらう。それが天地の眞理だ」

「さうするとカル、貴様は大黒主の孫に逆轉したのだな」

「別に逆轉したのでも何でもありませんよ。鞘を抜き出した刀がキチンと元の鞘へ納まつただけのものだ。矢張俺はかうなつて來ると大黒主の方が偉いやうな氣がするワ
イ」

「ハハア、さうすると貴様は黄金姫様、清照姫様が側にゐられる間だけは、野良犬のやうに尾を振つて居よつて、表面歸順を装ひ、お二人が何者かに攫はれて見えなくなつたので、又もやそんなズルイ考へを起しよつたのだなア」

「面從腹背、長いものにまかれるのが當世だよ。ウツフ、フ、フ」

「ハハ、此奴ア、ヤツパリ大黒主の眷族が憑依しよつたと見えるワイ。どうやら俺も大黒主氣分になつて來よつたぞ。吾ながら吾の心がテンと善か悪か分らなくなつて來たワイ。それなら俺もこれから大黒主様に服従し、黄金姫母娘の所在を注進して、入那の國のセーラン王様の御前に手柄を立てようかなア」

と兩人は目と目を見合はしながらワザと大聲に唝鳴つてゐる。道端の草の中からムクムクと近よつて來た七八人の男、其中の頭と覺しき目のクルツと光つた、どこともなしに威嚴のある男は、セーラン王の左守の司と仕へてゐるクーリンスの家來で、チームスといふ男である。

「今ここに於て様子を聞けば、其方等兩人はバラモン教の大黒主様の御家來と見えるが、黄金姫、清照姫の所在を知つてゐるさうだが、吾々に言つてくれまいかなア。左守の司クーリンス様の命令に依つて、吾々は數多の家來を引連れ、黄金姫母娘がここを通過するとの或者の注進に依つて、土中の關所に待つてゐたのだレ。ハイ、實の處は其黄金姫母娘に甘く取入り、入那の森まで何とか彼とか云つて連れて參り、セーラン王様に御手渡しして、王様の御手柄にしたいと存じ、イヤ王様の力を借り、共々に手柄をさして頂かうと思ひました處、狼の群が澤山やつて來て、二人を喰へてどつかへ參りました。併しながらこれには深い秘密があります。只今此處で申上げる譯には行きませぬ。クーリンス様の御前に於てハツキリと申上げますから、どうぞ案内して下さい」

「秘密とあらば強つて聞かうとは申さぬ。それなら入那の都まで案内するから従いて来て下さい」

「オイ、レーブ、甘くやつたなア」と言ひかけて、俄に自分の口を押へ、

「イヤ、レーブ、甘いことになつて来たなア。吾々兩人の手柄の現はれ時、ア、勇ましし勇ましし、寶の山は眼前に横はつて来た様なものだ。モシ、チームスさま、吾々兩人を大切にせなくちや、黄金姫母娘の所在は口を噤んで申しませぬぞや。吾々の口を開くか開かぬかに依つて、お前さま達や左守の司様の成功不成功が分るるのだから、御機嫌を損ねない様に特別待遇を願ひますよ」

「よくマア恩にきせる男だなア。エ、仕方がない、餘り威張られてもチツとは迷惑だけれど、クーリンス様の命令には代へられない」

レーブ「今は兔も角、何とでも云つて此奴等兩人をたらかし、館へつれて歸るが最後、四方八方から槍襖の垣を造り、兩人を否應なしに白状さしてやるといふお前さまの下心だらうがな。アハ、ハ、ハ、」

「何と悪氣のまはる男だなア。マアどうでも良い。来る所まで来てみなくては分らぬぢやないか」

カル「何せよ、騙し合ひの狸ばかりの世の中だから、このレーブだつてカルだつて、何を吐してるか分りませぬぞや。ウツフ、本當のこと言へば、レーブ、カルの兩人は、お前さま等の爲にドテライ目に會はされるのが怖さに、三五教で居ながら俄にワザと聞えよがしに、お前さまが岩窟にあるのを前知して喋つたのだから當にはなりませぬぞや。イツヒ、」

「チームスは聲を尖らし、

「コリヤ コリヤ兩人、今からそんなことを申しても駄目だぞ。偽りを申すな、三五教だと云へば此チームスが驚くかと思つて、左様なことを申すのだろ。そんなことに一杯喰はされるやうな此方ぢやないワイ。自分の心の秘密を吾々に喋る奴があらう道理がない。貴様はヤツパリ、バラモン教の生粹だ。左様なことを申して此チームスやクーリンスに揚壺を喰はせ、直接セーラン王様の前に出て、自分等二人の手柄にしようと思ふのだろ。其手は喰はぬぞ」

と目を剥き出し呶鳴りつける。

「ハ、ハ、ハ、何が何だか、レーブもサツパリ混線してしまつた。それならマア黄金姫母娘の行方を知つてゐることにしておかうかい」

「ナマクラなことを申すな、正直に申上げるのだぞ。クーリンス様の前で今の様な譯の分らぬことを申すと、お赦しはないぞ」

「お赦しが必要ではなくていいワ。肝腎要の三五教の秘密や黄金姫の所在を申し上げぬまでのことだ。アハ、ハ、ハ、それよりも俺達が直接に大黒主様へ注進致したら、すぐに一國の王位にはして貰へるのだからなア、イツヒ、ハ、ハ、ボロイボロイ、甘い物は小人数で食へだから、こんな所で博愛慈善主義を振りまいて居つても、あまり引き合ないワ、のう、カル公」

「オイ、レーブ、いい加減に意茶つかしておかぬか、チーム様は吾々とは違つて左守の司様の秘書役だから、御機嫌をとつておきさへすれば、どんな出世をさして下さるかも知れないぞ。【ねえ】チームスさま、さうでげせう」

「カルの申す通り、魚心あれば水心あり、水心あれば魚心ありだ。決して悪くは

取計とりはからはないから、安心あんしんして来てきくれ」

「それなら一つ、どつと安心あんしんして、来て呉くれてやらうかな。イヤ、チームスさま、何分宜なにぶんよろしく御頼おたのみ致いたしやす」

「それなら、左守さもりの司様かみさまも大變たいへんにお急せきだから、サア急いそいで都みやこへ歸かへらう」

かく話はなししてゐる所ところへ、テク、アルマ、テムの三人さんにん捻鉢卷ねぢはちまきをしめ、足腰あしこしの痛いたみも直なほつたと見みえ、大變たいへんな勢いきほひで、

「エーサツサ エーサツサ エーサツサ エーサツサ」

と掛聲かけこゑしながら通り過すぎようとする。チームスは之これを見みて、

「オイオイ、三人さんにんの奴共やつども、暫しばしく待まてえ」

此聲このこゑに驚おどろいて三人さんにんは立たち止どまり、

テク「あゝチームス様さまでムいましたか。餘あまり急いそいだので、ここのお關所せきしょも氣きがつかず通とほり越こさうと致いたしました。あゝ餘あまり走はしつたので息苦いきぐるしい、目めがまはるのか天地ちが廻轉くわいてんするのか知しらないが、貴方あなたのお聲こゑを聞きくにつけ、ガタリと氣きが弛ゆるんで参まゐりました。どうぞ一ひとつ背中せなかを打うつて下くださいな。ハア ハア ハア」

と三人はグタリとなつて深傷を負うた軍人のやうに道の上にベタリと平太つてしまつた。

チームス「大聲で唝鳴りつけ、叱りつけてやらねば氣が弛んでは駄目だ。ヤア家來の者共、三人の氣をつけてやれ」

七八人の捕手はバラバラと三人の側に寄り、背中を打つやら、頭から水をぶつかけるやら、大變な大騒動をやつてゐる。漸くにして次々に正氣づき、テクは息も苦しげに物語る。

「チームス様の仰せにより、吾々三人は猛獸荒ぶ荒野原を入那の森まで進み行く折しも、祠の中に怪しの物音、ハテ不思議と立寄り、様子を窺ひ見れば、當の目的物たる恐ろしき武勇の聞えある黄金姫、清照姫、それに従ふレーブ、カルの兩人、吾等一行に打向ひ言靈戦を開始し、吾々三人は息ふさがり、足はなえ、腰を抜かして大地にドツと倒れ伏す、進退維れ谷まり居る折しも、雲押分けて現はれ來る大空の月の影、大自在天大國彦命、天馬に跨がり、悠悠として入那の森近く下り給へば、流石の黄金姫、清照姫は其神徳に辟易し、雲を霞と南方指して逃げ

ゆく可笑しさ。レーブ、カルの兩人は、吾々三人が神徳に怖ぢ恐れ、ウンと一聲、其場に倒れ、敢なき最後を遂げにけり。かかる小童武者には目もかけず、黄金姫、清照姫の後を追ひかけ、ここまで来り候。母娘二人は既に既に此一筋道を通りしならむ、チームス様、キツと掴まへ遊ばしたでムいませうなア。それさへ承はらば吾々三人は假令此場で相果つるとも、決して恨とは存じませぬ」と息もせきせき述べ立つる。

レーブ「オイ、テク、随分駄法螺を吹きよるなア。レーブさまもカルさまも貴様より一足お先に此處へ来て居るのだ。チームス様と萬事交渉を遂げ、目出度く締

盟の濟んだ所だ、確かに致さぬか。其方は驚きの餘り狂氣致したなア」

「ヤア、貴様はレーブ、カルの兩人か。何時の間に生返りよつたのだ」

カル「オイ、テク、何を言つてるのだ。ソリヤ俺の方から言ふべきことだよ。貴様こそ何時の間に生返つたのだ」

「あゝカルか、さうすると貴様はヤツパリ此方の味方だつたのかなア」

レーブ「見方に依つては味方でもあり、敵でもあるワイ。敵の中に味方あり、味

方たの中なかに敵てきのある世よの中なかだ。自分じぶんの心こころの中なかでさへも敵味方てきみかたの衝突しょうとつが絶たえず起おこつてゐるのだからなア。アハ、ハ、ハ、

チームスは立ち上あがり、

何なには兔ともあれ、左守さもりの司かみ様の館やかたまで急いそぐことに致いたさう

茲ここに一行いっかう十三人じふさんにん膝栗毛ひざくりげに鞭むちうちながら入那いるなの都みやこを指さして進すすみ行く。

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 松村眞澄録)

第二章 入那城いるなじやう（一一〇六）

入那いるなの國くにのセーラン王わうの館やかたは東西南とうざいなんに廣ひろき沼ぬまを圍めぐらし、北きたの一方いっぱうのみ原野げんやにつづいて居ゐる。此國このくにでは最もつとも風景ふうけい好よく且かつ要害えうがいよき地ち點てんを選えらみ王わうの館やかたが築きづかれてある。セーラン王わうは早朝さうてうより梵自在ぼんじざいてんの祀まつりたる神しん殿でんに昇のぼりて祈願きぐわんを凝こらし、終をはつて吾わが居間ゐまに歸かへり、ドツカと坐ざして雙手もろてを組くみ思案しあんにくれながら獨言ひとりごと、

「あゝ世の中は思ふ様に行かないものだ。忠誠無比の左守の司ケーリンスの娘ヤスタラ姫を幼少の頃から父王の命に依り許嫁と定つて居たものを、大黒主の神様に媚び諂ふ右守の司カールチンの勢力日に月に増大し、殆ど吾をなきもの如くに扱ひ、ヤスタラ姫をテルマン國の毘舍シヤールの女房に追ひやり、わが最も嫌ふ所の右守の司が娘サマリー姫を後に致したとは、實に下、上を犯すとは言ひながら無暴の極まりだ。あゝヤスタラ姫は今頃は如何してゐるだらう。一度姫に會つて幼少からの吾心の底を打明かし、ユツクリと物語つて見たいものだが、吾は刹帝利の王族、ヤスタラ姫は最早毘舍の女房と迄なり下つた以上は到底此世では面會も叶ふまい。一國の王者の身でありながら、一生の大事たる許嫁の最愛の妻に生き別れ、斯様な苦しき月日を送らねばならぬとは如何なる宿世の因縁か、あゝヤスタラ姫よ、餘が心を汲み取つてくれ」

と追戀の情に堪へかねて思はず知らず落涙に咽んで居る。かかる所へ襖をサラリと引き開け、少しく顔色を變へて絹ずれの音サラサラと入り來りしはサマリー姫なりき。

「王様、貴方の此頃の御機嫌の悪いこと、一通りや二通りではムいませぬ。妾も日夜貴方様の不機嫌なお顔を拜みましては到底やりきれませぬから、本日限りお暇を賜りたう存じます」

と意味ありげに聲を震はせて詰る様に云ふ。王は驚いてサマリー姫の顔をツクツクと見守りながら、

「合點の行かぬ其方の言葉、何かお氣に障つたかなア」

「いえいえ、決して決して氣に障る様な事はムりませぬ。何と申しても誠忠無比の左守の司様のお娘、許嫁のおありなすつたヤスダラ姫様を惡逆無道の吾父力ールチンが放逐して、貴方のお氣に入らない妾を後に納れられたのですから、貴方の日夜の御不快は無理もムりませぬ。最早今日となつては妾もやりきれませぬ。

互に愛のない、諒解のない夫婦位不幸なものはムりませぬから、妾は何と仰有いまして、今日限りお暇を頂き父の館へ下ります」

「これサマリー姫、今更左様な事を云つてくれては困るぢやないか。少しは私の身にもなつて呉れたら如何だ」

「はい、貴方のお嫌ひな妾がお側に仕へて居ましては、却て貴方のお氣を揉ませ苦しめます道理、妾の如き卑しき身分の者がヤスダラ姫様の地位を奪ひ、斯様な地位に置かれるのは實に心苦しうムります。提燈に釣鐘、月に鼈の配偶も同様、互に苦情の出ない間に別れさして下さいましたならば、妾は何程幸福だか知れませぬ。今貴方の獨言を聞くとはなくに承はれば、誠忠無比の左守の司の娘ヤスダラ姫を吾父のカールチンが放逐し、氣に入らぬサマリー姫を後に納れたのは残念だと仰有つたではムいませぬか。何と云つてもお隠しなされても、もう駄目でムります。妾はこれから父の家に歸り、父より大黒主様へ伺ひを立て、其上で妾の身の振り方を定めて頂きますから、何卒これまでの縁と思つて下さいませ」

と早立上らうとするを王は狼狽てて姫の袖を引掴み、

「さう短氣を起すものではない。其方は私を困らさうと致すのだな」

「いえいえ、お困らし申す所か、貴方がお氣樂におなり遊ばす様にと氣をもんで居るのでムります。左様なら、御免下さいませ」

と王の手を振り放し、怒りの血相物凄く父の館へ指して一目散に歸り行く。

セーラン王は姫の狂氣の如く駆け出した後に只一人黙然として頭を傾け、吾身の運命は如何になり行くかと、トツ、オイツ思案に暮れ居たる。其處へシツシツと入り来るは左守の司のクーリンスなりける。クーリンスはセーラン王の父バダラ王の弟であつて、言はば王の叔父に當る刹帝利族である。

「王様、今日はお早うムいます。只今登城の際、館の者の噂を聞けば、サマリー姫様は何か王様と争ひでもなさつたと見え、血相變へて數多の家來共の御引留申すのも聞かず、蹴倒し薙拂ひ一目散にカールチンの館へ歸られたさうでムいます。兔も角七八人の家來をカールチンの館へ差向け、姫を迎へ歸るべく取扱つておきました。一體如何な事を仰有つたのでムりますか。右守の司カールチンは大黒主様の大變なお氣に入り、王様も左守の司も殆ど眼中にないと云ふ旭日昇天の勢で御座りますれば、今サマリー姫の機嫌を損じ、カールチンの立腹を招かうものなら、忽ち貴方の御身邊も危うムりませう。誠に困つた事が出来ました」

「何事も天命と諦めるより仕方がない。吾は決して顯要の地位を望まない。假令首陀でも何でも構はぬ。夫婦が意氣投合して此世を渡ることが出来たならば、此

上ない餘としての喜びはないのだ」

「王様、何とした、つまらぬ事を仰有るのですか。貴方が左様なお心で如何して此入那の國が治まりませうぞ。少しは氣を強くもつて下さらないと吾々左守の司の働きの出来ないぢやありませんか。王様あつての左守の司ではムりませぬか」

「もう斯うなる以上は何と云つても仕方がない。サマリ姫が歸つた以上は、屹度カールチンは日頃の陰謀を遂ぐるは今此時と、大黒主の力を借つて遂には吾地位を奪ひ、入那の國を掌握する事になるだろう。如何なりゆくも運命だと餘は諦めて居る」

「右守の司のカールチンが此頃の傍若無人の振舞は怪しからぬ、とは云ひながら、もとを糺せば王様が鬼雲姫様の御退隱の件に就いて御意見を遊ばしたのが原因となり、王様は鬼熊別の腹心の者と睨まれ給うたのが起りでムいます。悪人の覇張る世の中、阿諛諂佞の徒は日に月に勢力を張り天下に横行闊歩し、至誠忠直の士は壓迫される世の中ですから、少しは王様も其間の消息をお考へ遊ばし、社交的の頭脳になつて頂かねばなりませんまい。クーリンスは心に染まぬ事とは知りなが

ら、お家の爲めを思ひ剛直一途の貴方様に對し涙を呑んで御忠告を申上げます」
假令大黒主に睨まれ、國は奪らるるとも王位を剥がるとも、假令吾生命は奪はるるとも、吾は斷じて邪惡に與する事は出來ぬ。放埒不羈にして惡逆無道の限りを盡す大黒主の頤使に甘んずるよりも、鬼熊別様の趣旨に贊し、亡ぼさるるが本望だ。あゝもう此上そんな事は云つて呉れるな」

「だと申して此儘に打ちやり置けば大變な事になります」

「餘は昨夜の夢に、北光彦の神と云ふ白髮異様の神人顯はれ來り諭し給ふやう

「汝の一身を始め入那の國家は實に危急存亡の秋に瀕せり、之を救ふに一つの道

がある。それは外でもない、鬼熊別の神司の妻子なる黄金姫、清照姫は、今や三

五教の神力無雙の宣傳使となつて居る。彼はハルナの都へ言靈戦を開始すべく出

陣の途中、此入那の國を通過すべければ、彼をカールチンの部下の捕へぬ間に汝

が部下に搜索せしめ、密に此館に誘ひ歸りなば、カールチンやサマリー姫の勢力

如何に強くとも、到底敵すべからず。今や大黒主は鬼春別、大足別の兩將をして

大部隊の軍卒を引率せしめ出陣したる後なれば、今日の大黒主の勢力は前日の如

くならず、早く部下の忠誠なる人物を選び、母娘兩人の行手を擁し、此王城にお立寄りを願ふべし」との事であつた。クーリンス、夢であつたか現であつたか、餘には判然と分らないが、屹度これは眞實であらうと思ふ。其方は如何思はるか

「王様も其夢を御覽になりましたか、へー、何と妙な事があるものですな。私も昨夜その夢を歴然と見ましたので、實は夢の由を申上げむと參つたのでムります。こりや屹度正しき神様のお告げでムりませう。左様ならば時を移さず忠實なる部下を選んで表面は母娘を生捕ると稱し、迎へて參る事に致しませう」

「然らばクーリンス殿、一時も早く其用意を頼む」

「はい」

と答へてクーリンスは恭しく暇を告げ一目散に吾家を指して歸り行く。

王は又獨り默然として兩手を組み、少しく光明にふれたやうな氣分にもなつて居た。

「昨夜の夢が實現したならば自分も亦此苦が逃れられるであらう。うまく行けば

再びヤスタラ姫と添ふことが出来るかも知れない」

などと、頼りない事を思ひ浮かべながら色々と考へ込んで居る。そこへ足音高くカールチンの一家來と聞えたるユーフテスは、虎の威をかる狐の勢、王者も殆ど眼中になき有様に、案内もなく襖をサラリと引き開け、

「王様、只今カールチン様のお使で参りましたが、貴方様はサマリー姫様を虐待遊ばし、王者の身としてあるまじき亂暴をお働きなさつたさうでムりますな。吾

主人カールチン様は表向き貴方様の御家來なり、又サマリー姫様の父親なれば、王様にとつてはお父様も同然でムりませう。親として子の不埒を、何程王者なりとて戒められずには居れないと云つて、ハルナの都の大黒主様の御許に早馬使をお立てになりました。何分のお沙汰あるまで別館に行つて御謹慎をなさりませ」と横柄面に打ちつけるやうに云ふ。その無禮さ加減、言語に絶した振舞である。

王はカツと怒り、

「汝、臣下の分際として餘に向つて無禮千萬な、左様な事は聞く耳もたぬ。ユーフテス、汝が主人カールチンに對して餘は今日限りサマリー姫と共に暇を遣はず、

一時も早く右守の司の館を立出で、何處へなりと勝手に行けと申傳へよ」
と聲荒らげてグツと睨めつけ叱りつくれば、ユーフテスは案に相違の王の権幕に縮み上り、頭をガシガシ掻きつつ、狼に出會うた瘦犬の様に尾を垂れ、影まで薄くなつてシヨビシヨビとして歸つて行く。

「アハ、ハ、ハ、ハ、右守の司の悪人に仕ふるユーフテス奴、餘が一喝に遇うて悄氣返り、初めの勢何處へやら、スゴスゴ歸り行く其有様、ほんに悪といふものはマサカの時になれば弱いものだな、アハ、ハ、ハ、ハ、」

と思はず知らず高笑ひして居る。そこへスタスタと足早に這入つて来たのはヤスダラ姫の妹セーリス姫なり。

「王様、今日は御壯健なお顔を拜し、セーリス姫誠に恐悦に存じます。就きましては早速ながら、父クーリンスの命により女の身をも顧みず罷り出でました。カールチンは年來の野心を成就するは今此時と、ハルナの都へ早馬使を立て王様の廢立を圖つて居ります。就いては吾父クーリンスはそれに對する準備も致さねばなりません、家老のチームスに命じ黄金姫母娘の所在を探すべく準備の最中なれ

ば、父が参る暇がムりませぬので不束なる女の妾が参つたのでムります。又父が幾度も登城致しますれば右守の身内の奴等に益々疑はれ事面倒となりますれば、向後を慮り妾を代理として参らせたのでムります』

「あゝさうか。事さへ分れば女でも結構だ。時にセーリス姫、其方はユーフテスに今會はなかつたか』

「ハイ、只今お廊下で會ひました。大變な悄氣方で歸つて参りました。あの男は實に好かない人物でムります。毎日日々妾の許へ艶書を送り、それはそれは嫌らしい事を云つて参ります。本當に困つた事でムります』

「ホー、そりや都合のいい事だ。これセーリス姫、近う近う』

と手招きすれば、セーリス姫は「はい」と答へて王の側近くににじり寄る。王は姫の耳に口寄せ何事か囁けば、セーリス姫はニツコと笑つて打額き此場を立つて歸り行く。

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 北村隆光録)

第三章 偽戀（一一〇七）

セーラン王の一喝にあひ、悄然として早々城内を逃げ歸り、自宅の奥の間に手を組んで思案に暮れて居るのは、當時城内にては飛ぶ鳥も落すやうな勢力盛なる右守の司カールチンの家老職ユーフテスである。そこへ番頭のコールが、慌しく馳せ來り、

「もしもし旦那様、門前に素敵滅法界な美人が現はれまして、此手紙を旦那様に渡して呉れと申しました。さうして直様御返事が頂きたいとの事でございます。随分旦那様も固くるしいお方のやうでムいますが、の道は又格別と見えますなア。本當に油斷がなりませぬわい」

とニヤリと笑ひ、一通の手紙をユーフテスに渡す。ユーフテスは、
「コール、何と云ふ失禮な事を申すか、ちと心得たがよからうぞよ」

「ハイ、承知致しました。「コール」からキット心得ます、イヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒと小さく笑ひながら、踞つて控へて居る。ユーフテスは手早く其信書を押し展き

あらた
検め見れば、

わたしは貴方様に幾度も御親切なお手紙を頂きました。セーリス姫でムります。早速お返事を申上げたいのは山々でムいましたが、何を云うても人目の關に隔てられ、燃ゆる思ひを押し隠し、今日迄耐へ忍んで参りましたが、もはや戀の炎に身を焼かれ立つても居てもゐられなくなつて來ました。それ故女の身をもつて御迷惑とは存じながら人目を忍びお慕ひ申して参つたのでムいます。何卒御迷惑でムいませうが、一目逢はして下さいませぬか。妾はお返事のある迄表門にお待ち申して居ります。一時も早く色よきお返事をお待ち申します。穴賢

セーリスより

ユーフテス様へ

と記しあるを見るより、ユーフテスは俄に苦り切つた顔の紐を無雑作に緩め、牡丹餅を砂原に打ちつけたやうな崩れた相好で、右手の甲で流れ落つる口邊の唾涎

の始末をつけながら、目迄細くして猫撫聲となり、

「オー、コール、よう使に來て呉れた。旦那様が、御多用中なれども萬障繰合せ、暫くの間面會すると仰有るから早くお出でなさいと案内をして來るのだぞ」

コールは少し耳が遠いので、右の手で耳を拘へながら、ユーフテスの言葉を聞き噛り怪訝な顔して、

「エ、何と仰有います。多忙中だから面會が出来ない、又出直して來て下さいと申上げるのですか。折角あんな天女が天降つて來たのに素氣なう追ひ歸すと云ふ事がありますかい。三五教ぢやないが、些と見直し聞直し宣り直しをなさつて、一目逢つておやりなさつたらどうでせう」

「エ、聾と云ふ奴は仕方のないものだなア。又聞き損ひをして折角來た戀人を追ひ出してしまはれては大變だ。手紙を書いてやるが一番間違ひがなくて宜からうとユーフテスは、文箱より料紙を取り出し筆に墨を滲ませ、筆の穂を一寸かんでプツプと黒い唾を二つ三つ吐きながら、すらすらと何事か書き流し嚴封した上、
「オイ、コール、貴様は耳が遠いから間違ひがあつては困るによつて、其女に此

手紙を渡すのだ。サア早くこれをもつて往けや」

と聲を高め耳のはた近く寄つて云ひつける。コールは忽ち呑み込み顔、

「ハイ承知致しました」

と肩を怒らし一足々々四股踏みながら表門さして走り出で、

「コレ、ナイス、お前も餘り氣が利かねえぢやないか。こんな白晝に、そんな白

首がのそのそとやつて來るものだから、旦那様が大變な嫌な顔をなさつて御迷惑

をして居なさる。サア早く歸つたがよからうぞ。多忙で萬障繰り合つて居るから、

斷り状をお書き遊ばしたから之を讀んで諦めて歸つたがよからう。本當に氣が利

かねえ女だなア。そんな不味いやり方で、ユーフテス様を擒にしようと思つたつ

て、手管に乗せようと思つたつて駄目だぞ、アハ、ハ、ハ、」

「何、ユーフテス様が歸つてくれと仰有つたのかい。そんな筈はありませんまいが」

「さてさて強太い女だなア。何よりも其斷り状が證據だ。早く封押し切つて讀ん

で見なさい。さうしたら「こなさん」の仰有る事が嘘でないと言ふ事が一目瞭然

となるであらう。あゝ惜しいものだなア。旦那様も逢ひたい事であらうが、矢張

俺達に晝だと思つて氣兼をしてゐらつしやると見える。ヤイ女、今晚裏口からやつて来い。此コールが氣を利かしてソツと逢はしてやるから、イヒ、ゝゝ、セーリス姫は慌しく封じ目を切り、ソツと讀み下せば美事な筆跡で艶めかしい文字が列ねてある。姫はニツコリと打ち笑ひながら靜々と門の闕を跨げて奥に入らうとする。コールは頻りに首を傾け、

「何とまア、押尻の強い女だなア。それだから今時の女は奴轉婆と云ふのだよ。百鬼晝行とは此事だ。こんな嚴肅なお館へ晝の日中に白首が往來するやうになつては、最早世も末だ」

と云ひながら、セーリス姫の袖をグツと握り、
「これこれ、何處のナイスか知らぬが厚顔しい、斷り言はれた家へ入ると云ふ事があるか。早く歸つたり早く歸つたり」

とグツと力にまかして引き戻さうとするのをセーリス姫は、

「エ、面倒」

と一つ肱を振つた途端に、コールは二三間ばかり跳飛ばされドスンと大地に尻餅

をつき、アイタ、と面を擧めて姫の姿を見送つて居る。姫はコールに頓着なく、
奥庭さして進み入る。

ユーフテスは、セーリス姫の入り来るを今や遅しと待つ間の長き鶴の首、石龜
のやうに手足を急しく動かしながら、座敷中を願望成就の時節到来とステテコ踊
りをやつて居る、そこへサラサラと衣摺れの音聞えて入り来る人の跽音は、どう
やらセーリス姫らしいので、俄に眉毛を撫でたり目脂が溜つて居ないかといぢつ
てみたり、鼻糞を掃除したり唾涎を拭つたり襟を直したり、態とに躍る胸を撫で
ながら控へて居る。どことはなしに顔はパツと紅葉を散らし心落ちつかぬ様子で
ある。其處へ襖をソツと押し開けて一瞥、城を覆へすやうな絶世の美人、イルナ
城の花と謳はれたセーリス姫が立居もいと淑やかに満面に笑を湛へ入り来る姿は、
牡丹か芍薬か百合の花か、又も違うたら白蓮華、桔梗の花の雨露に霑ふ優姿、淑
やかに白き細き柔かき鼈甲のやうな皮膚の細かい手をつきながら、態とに聲を震
はせ恥かし氣に、

「ユーフテス様、お懐かしうムいます」

と云つたきり疊たたみに首くびを打ちつけて態わざとに肩かたで息いきをして見みせる。ユーフテスはニコニコしながら嬉うれしさうな顔かほをして、女をんなに馬鹿ばかにしられてはならぬ、此處ここが一つ男をとこの賣うり所ところだと云いはむばかりに儼然げんぜんとして、

「セーリス姫殿ひめどの、此白晝このはくちうに女をんなの身みとして人目ひとめも繁しげきに拘かはらず、お訪ね下くださるとは些ちつと不注意ふちういではムらぬか。左様さやうな氣きの利きかない貴女あなたとは思おもはなかつた。今迄いままで吾々われわれも姫ひめの容色ようしよくに迷まよひ、幾度いくたびとなく艶書えんしよを差上さしあげたなれど、決して自じ分の本心ほんしんではムらぬ事ことはない。何用なにようあつて今頃いまごろ吾宅わがたくをお訪ねなさつたか、女をんなの分際ぶんざいとして些ちと不ふ届とどきではムらぬかナ」
と空威張からあはりして見みせて居ゐる。

「ホ、ホ、ホ、お情ないそのお言葉ことば、それ程ほど妾わたしがお氣きに入りませぬなら只今ただいま限りお暇いとまを致いたします。不束ふつかな女をんなが参まゐりましてお腹はらを立てさせまして誠まことに申譯まをしわけがムいませぬ。妾わたしも女をんなのはしくれ、今迄いままで貴方あなたに操あやつられて居ゐたかと思おもへば腹はらが立ちます」
と立ち上たり、クルリと後うしろを向むけ歸かへらうとするのをユーフテスはあわてて引き止とめ、
「マ、マお待ちなさいませ。短氣たんきは損氣そんき、姫様ひめさまのやうにさう早取はやとりをしられて

は困ります。貴女は貴い刹帝利の家筋、私は卑しい首陀の成り上りもの、到底階級が違ひますから、貴女のお傍へも寄れない身分でムいりますが、戀には上下の隔てなしとか、つい失禮な事を申上げました。どうぞ許して下さいませ」

「ホ、ホ、そりや何を仰有いますか。若き血潮の湧き満ちた佳人と佳人、誰に遠慮がムいませう。現界の階級は階級と致しましても、戀愛と云ふ神聖な道には上下の區別はムいますまい。妾は左様な階級的制度は氣に入りますせぬ。何とかして時代に目醒めたる婦人を集め戀愛神聖論を天下に高調したいと内々活動中でムいますよ、ホ、ホ、」

「思ひの外開けた姫様だナア。それだから此ユーフテスが好きで耐らないと申しまするのだ。いやもうズツと氣に入りました。斯うして姫様の御心中を承はつた以上は何も彼も打ち明けて、一つ天下の爲めに大活動を致さうぢやありませんか」

「左様でムいます。戀愛は戀愛として置きまして、一つ此世に生れて來た以上は、貴方と妾と夫婦となり、息を合して纏まつた大事業を起したらどうでせうかなア」

「ホー、そいつは面白い。それだからどうしてもお前さまの事が思ひ切れないと

云ふのだ。エへ、へ、へ、」

「オホ、へ、へ、貴方も仲々隅に置けない悪人ですなア」

「そりやさうでせうかい、右守さまのお氣に入りになつて居る位だから。エ、併し姫様は左守さまの御息女、表面は左守右守として日々お勤めになつて親密さうにしてゐるが、心の中は犬と猿、丁度仇同士のやうなものでゐいますなア。こいつを何とかして都合よく纏めたいものです。さうでなければ、私と貴女との戀はいつ迄も完全に維持することは出来ません」

「何と不思議の事を承はります。左守、右守の兩役はセーラン王様の兩腕、鳥で云はば左右の翼、どうしてそんな暗闘がゐいませうぞ。それは何かのお考へ違ひではゐいますまいかなア」

ユーフテスは首を左右に振り、

「イエイエどうしてどうして、大變な暗闘でゐいますよ。暗闘の中はまだ宜しいが、今日の所は既に表向の戦ひになりかけて居りますよ」

セーリス姫は態と驚いたやうな顔付きで、一寸口を尖らし目を丸くし、ユーフ

テスの顔を打ち眺めながら、

「それは大變な事を承はりました。果してそんな事があつたら妾はどう致しませうか。貴方との戀も従つて駄目になりませう。それが残念でムいます」と空涙を零して俯向く。

「譯を申さねば分りますまいが、貴女のお姉様のヤスダラ姫様が、セーラン王様の御許婚であつた事は御存じの通りです。さうした處が、セーラン王様は餘り剛直一方のお方で、世上の交際がまづいたため、當時勢竝ぶものなき大黒主様に御意見を申上げたり、又鬼熊別様に同情をしたり遊ばすものだから、大棟梁様の御氣勘に觸り、既にイルナの國王を召し上げらるる所であつたのを、右守のカールチン様が種々と辨解を遊ばし、一時は無事に治まつたのでムいます。其代りにヤスダラ姫様をテルマン國のシャールといふ毘舎の家に降し、カールチン様のお息女サマリー姫様を妃に入れて漸う其場のゴミを濁し、イルナの國を今日迄維持してお出でになつたのは、隠れたる忠臣カールチン様でムいます。貴女の父上クーリンス様は左守の職にありながら、社交術が不味いためにイルナの國を既に棒に振

らうとなさいました。此間の消息を知つて居るものは、此ユーフテスしかありません。せぬよ。定めてセーラン王様もカールチンは不忠な奴、自分の娘を妃となし、ヤスタラ姫を退け、遂にはイルナの國を占領しようとするものと早合點してゐらつしやるさうですが、如何に隠れたる忠臣たるカールチン様だとて、サマリー姫様を王様が虐待なされ、それがため御離縁になるやうな事があればそれこそ大變です。大黒主様に對してでも、カールチン様は反旗を翻し、涙を呑んでセーラン王を國家のために放逐せなければならぬやうになつて居ります」

何とマア右守様は、そのやうな立派なお方でムいますかなア。最前貴方は大悪人の右守の部下だからと仰有つたではムいませぬか」

「そりや悪人と云へば悪人でせう。一つ蟲の居所が悪くなつたら、どんな事をなさるか計り難い權幕ですから「君君たらずんば臣臣たるべからず」と常々仰有つて居ましたから、今度サマリー姫様が王様と争をしてお歸りになつたを機に、ハルナの都に早馬使を立てられましたから、キット王様の爲に好い事はありますまい。併しながらこのユーフテスは、カールチン様の秘密の鍵を握つた男、私の首

の振りやう一つで大抵の事は結末がつきますから、貴女と斯うなつた以上は、秘密さへ守つて下さるなら、何も彼も相談し合つて、貴女のお願ひとならばセーラ王様をお助けしないものでもありません。又クーリンス様をお助けするもしないも、皆此ユーフテスの手に握つて居る絶対権利でありますからなア」
と稍傲慢氣に述べ立てるを、セーリス姫は態と心配氣な顔をして、
「實を申せば、妾だつて王様に對しあまり深い恩顧を受けたと云ふでもなし、貴方とかうして氣樂に暮さるれば、これに越したる喜びはムいませぬワ」
「姫がさういふお心なら、私は何も彼も包まずに云ひませう。實は大黒主の大棟梁より、幾度も密使が參り、カールチン様に入那の國の國王となれとの御命令、それについては鬼熊別の妻子が三五教の宣傳使となり、バラモン教の根底を攪亂すべく齋苑館の本據を立ち出でて此方に来るとの事で、彼を一日も早く引き捕へよとの御嚴命、それさへ早く手に入れば、カールチン様は忽ちイルナの國王となり遊ばし、ユーフテスは直に左守に拔擢される事に極つて居ります。これは大の秘密ですから誰にも言つてはなりませんぞや」

「それは嬉しい事で、います。假令どうならうと貴方の御出世さへ出来れば、妾は貴方の女房、麻につれ添う蓬とやら、一緒に権力がのび行くのですから、どうぞ御成功を望みます」

「イヤ、それ聞いて私も安心を致しました。それならセーリス姫殿、キット私の妻ですなア。必ず變心して下さるなや」

「女の一心岩でも射貫く、妾は決して變りませぬ。貴方こそ左守とおなり遊ばし、たら妾をお捨てなさるのでせう。それが心配でなりませぬわ」

「決して決して、左様な心配はして下さいさるな。二世三世は愚か五百世まで誠の夫婦でゝる」

「それを承はつてヤツと安心を致しました。併しながら人目の關もムりますれば、今日はこれでお暇を致します。どうぞ女が度々参りましては目的の妨げになりま、すから、城内でお目にかかりませう」

「あゝ惜しい別れだが二人の將來の爲めだ。それならここで別れませう」
「明日御登城になりましたら、どうぞ妾の居間をお訪ね下さいませ。併し人目も

ありますから、態わざとに素氣すげなう致いたして居をりますから、必かならずお氣きに觸さへて下くださいま
すなや」

「口くちで惡わる云いうて心こころでほめて蔭かげの惚氣のろけが聞きかしたい……と云いふ筆法ひつぽうですな、ア
ハ、ハ、ハ、ハ」

「オホ、ハ、ハ、左様さやうならばお暇致いとまいたします」

と兩人りやうにんは立たち上あがり堅かたく手てを握にぎり合あひ、目めと目めを見合みあはし、殘のこり惜をしげに左さ右いうに袂たもと
を分わかてり。

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 加藤明子録)

第四章 右守館うもりやかた（一一一〇八）

右守うもりの司かみカールチンは妻つまのテーナと共に酒汲さけくみ交かはしながら、夜よの更ふくる迄まで、ホ
口醉よひきげん機嫌げんになつて、セーラン王追放わうつゐはうの奸策かんさくを謀はかつてゐる。

「旦那様、今度こそは大黒主様も御承知下さるでせうなア。セーラン王様は、大黒主様の最も御嫌な鬼熊別の一派だと云ふ事を、あれ丈何回も虚實交々取交せて内通しておいたのですから」

「今度こそは本望成就の時が来たのだ。いよいよ願望成就する上は、吾々夫婦は入那の刹帝利となるのだから、長生きはせにやならないものだ。今までサマリー姫を犠牲にして後に上げてゐたが、どうやら王は俺達の企みを悟つたらしく、サマリー姫に對して、大變にキツく當るので、姫は泣きもつて逃げて歸つて來よつた。グズグズしてゐると惡の企みの現はれ口だ。先んずれば人を制すと云ふから、姫が歸つたのをキツカケに早馬使をハルナの都へ遣はしたのだから、キツトこちらの使が、先に到着してゐるに違ひない。セーラン王が使をやつた所で、最早あとのまつり、何と俺のやり方は敏捷なものだらう。アハ、ハ、ハ、」

「旦那様は何時とても機をみるに敏なる方ですから、私も貴郎のやうな夫に添うたのは何程幸福だか知れませぬワ。時に可哀相なのはサマリー姫ぢやムいませぬか。娘にトツクリと言ひ含めて、セーラン王の後に上げたのだけれど、今ではど

うやら親の意思は忘却し、王様に戀着心を持つてゐるやうな鹽梅だ。實に罪な事をしたものですなア。あゝして歸つては來て居るものの、私が考へて居れば、寢言に迄王を慕うてゐるのだから困つたものです。さうだから如何に吾生んだ娘だと云つて、此計略を、今日となつては娘の前では云ふ譯には行かず、萬一娘が聞かうものなら、王に内通をするかも知れませぬからなア」

「そんな不心得な事を致し、親に反くやうな奴は、埒よく手討ちに致せばいいぢやないか。こんな大望を抱いてる吾々夫婦が、子の一人二人犠牲にするのは前以て覺悟して居なくてはならぬではないか」

「それは又、餘り胴欲ぢやムりませぬか。何程吾々夫婦が出世をしたとて、肝腎の後は繼ぐ子がなくては、何にもなりません。千年も萬年も生きられるものはなし、子が可愛いばかりに、こんな心配をして居るのぢやありませんか」

「さう云へばさうだが、諺にも言ふぢやないか、子を捨てる藪はあつても吾身を捨てる藪はないと。まさかになつたら子をすてて自分の命を全うするのが當世だ………イヤ人情だ。俺だつて立派に目的を達し、吾子に後を繼がしたいのは山々

だが、その子のために陰謀露顯して、吾々夫婦の命をとられるやうなことが出来
致したら、それこそ大變ぢやないか

「あなたは吾子に對し、左様な水臭い御考へですか。私は自分の命は如何ならう
とも、吾子さへ立派になつてくれれば、それで満足を致します」

「馬鹿だなア、それだから母親は甘いと云ふのだ。吾子だと云つても、體を分け
た以上は他人ぢやないか。其證據には吾子が何程大病で苦しんで居つても、親の
體にチツとも痛痒を感じないではないか」

「何とマアあなたはどこ迄も無慈悲な方ですなア。私は娘が大病になつた時、自
分の體が苦しくなつて寢られず、出来る事なら、娘に代つて患うてやりたいと迄
思ひましたよ」

「俺だつてチツとばかりは娘の苦しんでるのを見た時は體にこたへたが、併し娘
の苦痛に比ぶれば、二十分の一位な苦しきさだつた。ヤツパリ自分が苦しむのは辛
いから、如何しても祕密が「ばれ」るとあれば、娘を手討にしてでも、夫婦の命
を助からねばならない。親の云ふ事をきかぬ奴は不孝者だから、親が手討にする

のが、何それが悪い。アカの他人でさへも吾々の秘密をもらし、規則を破つたならば、大根を切るやうにツボリツボリと首を切り捨てるぢやないか。切られた奴だつて、ヤツパリ親も兄弟も子もあるのだから、苦しいのは同じ事だ。そんな事を言つてゐたら、到底此世に立派に暮して行くことは出来ない。自己を守るのが第一だよ」

「其筆法で参りますと、あなたは自分の命を助ける爲に、私の命を取らねばならぬ時が來たら、私を殺しますか」

「きまつた事だ。夫の爲に女房が代理となつて殺され、夫の命を救ふのは、名譽ぢやないか。後世迄貞女の鑑として謳はれるのだから、殺された女房の方が何程光榮だか知れないぞ」

「貴郎はハルナの都へお参りになつてから、大變に冷酷になられましたなア。大方八岐の大蛇が憑依してるのではありますまいか」

「上のなす所下之に倣ふと云ふ、川上の水はキツと川下へ流れて來るものだ。俺も大黒主様のお氣に入るやうになつた位だから、大功は細瑾を顧みず、チツとば

かりの犠牲位は春風が面を吹く位にも思つてゐないのだ」

「さうすると、貴郎は大黒主様が鬼雲姫様を追出し遊ばした様に、外に立派な女があつたら、追ひ出すのでせうなア」

「オイ、そこ迄追窮するな、水臭くなるからなア」

「ヘン、よう仰有いますワイ。親子は一世、夫婦は二世と云つて、切つても切れぬ親子をば、自己保全の爲には殺しても差支ないと云ふ主義の貴郎が、何時でも取替へこの出来る女房に對し、離縁する位は朝飯前のこととせう。本當にここ迄思想も悪化すれば申分はありますまい」

「コリヤ、人のことだと思ふと、吾事だぞ。貴様もセーラン王を廢する事に就いて、俺と始終相談をした悪人ぢやないか。其發頭人は貴様だらうがな。貴様が何時も右守となつてクーリンスの下役になつてゐるのは腑甲斐ない男だと、口癖のやうに悔んだものだから、元から善人でもない俺が、つい貴様に感染してこんな善くもない、自分としては悪くもない企みを始めたのぢやないか」

「オホ、よく、ようマアそんな白々しいことを仰有りますワイ、流石は大黒主様の

お氣に入り丈あつて、エライ事を仰有りますなア」

夫婦喧嘩はいい加減に切上げようぢやないか。サマリー姫の耳へ這入つたら大變だからのう」

「ナア二、這入つたつて構ひますものか。貴郎はマサカ違へば一人よりない娘を殺し、私を鬼雲姫様の二の舞にするといふ残酷な御精神だから、そんなこと思ふと阿呆らしくて、こんな危ない藝當は出来ませぬワ。サマリー姫だつて貴郎一人の子ではなし、私の腹を痛めて出来た娘、そんな水臭いことを仰有ると、私が承知しませぬぞや」

と話す所へサマリー姫は目を腫しながら、恐さうに現はれ來り、
「お父さま、お母アさま、モウお寢みになつたら如何でムいますか」

カールチンは打驚き、

「お前はサマリー姫、何故今頃にこんな所へ出て來るのだ。いい加減に寢間へ行つて寢まないか。大方二人の話を立聞したのでらう」

「ハイ、委細の様子残らず承はりました。どうぞ私を御存分に遊ばして下さいま

せ。鬼の親を持つたと思つて諦めますから……」

「コリヤ娘、何と云ふ事を申すか、鬼の親とは何だ」

「オホ、この此サマリー姫は王様と争論をしてカールチンの館へ歸つて來ては居るものの、實際を言へば王の後、サマリー姫だよ。親とは云ひながら、汝は臣下の身分だ。不届な事を申すと了簡は致さぬぞや。サア存分にして貰ひませう」と身をすりよせ、カールチンの前に投出す。

「ヨシ、最早陰謀露はれた上は、到底許しておくべき汝でない。主従もクソもあつたものかい。サア覺悟を致せ」

と立上り、刀を掴み引抜かむとするを、テーナはグツと其手を握り、

「コレ、カールチン殿、滅多な事をしてはなりませんぞや」

「今となつてはサマリー姫を殺し、陰謀の露顯を防ぐよりほかに途はない。サア覺悟を致せ」

と又もや柄に手をかけるを、テーナは後より力限りに抱き止め、聲を限りに、

「サマリー姫殿、早く逃げさせられよ」

と促すを、サマリー姫は平然としてビクとも動かず、

「ホツホ、カールチン殿も随分耄碌しましたねえ。妾一人の命を取つて、それで此陰謀が現はれないと思つてゐますか。最早王様のお耳に入つた以上は駄目ですよ。何程大黒主様の御威勢が強くて、數百里を隔てたハルナの都から、さう早速に御加勢は出来ません。又王様には忠誠無比の家來も澤山に從いて居りますれば、貴郎が何程あせつても駄目でせう。妾はこれよりカールチンの首を取り、王様にお土産となし、疑を晴し、元の如く可愛がつて頂きますから、夫婦共、其處に、姫の命令だ、お坐り召され。入那の國王の後サマリー姫、キツと申付け

る」
「テーナ」コレコレ姫様、そんな没義道なことがありますか。海山の恩を受けたる兩親を刃にかくるとは、人間にあるまじき仕業ではムらぬか」

「親の教育が祟つたのだから、仕方がありません。吾身の爲には子の命でも取ると、只今仰有つたでせう。骨肉相食む、無道の教をなさつた貴方、已むを得ません。サア覺悟をなされ」

カールチン「イヤ姫様、暫くお待ち下さいませ。つい酒の上で女房を擲擽つてゐたまででムいます。決して決して勿體ない。假令吾子といひながら、王の后となり遊ばした貴方に對し如何して不義の刃が當てられませうか」

「貴方は既に王様に對し、無形の刃を當てがつて居るではありませんか。大それた野心を起し、自分が王位に取つて代らうとは、人道にあるまじき惡業、大自在天様に畏れはムいませぬか。貴方は、妾を陰謀の犠牲になさつたのでせう。これ位殘酷なことはムいますまい。妾の朝夕の心遣ひと云ふものは一通り二通りではムいませぬぞ。王様に對し、お氣の毒でなりませぬから、何時とはなしに王様に同情をする様になり、今では戀ひしくなつて參りました。然るに王様は左守様のお娘ヤスタラ姫様に、寢ても起きても心を寄せ給ひ、妾に對しては極めて冷淡な御扱ひ、これといふのも兩親の心が善くないから、何とはなしに王様の心に叶はないのでせう。どうか一日も早く御改心を願ひます。さうでなければサマリー姫、改めて兩人を手討に致す、覺悟めされ」

と懷劍をスラリと引抜けば、カールチンは自棄糞になり、

「ナア二、猪口才千萬な、不孝娘」
と云ひながら、手早く懐劍を奪ひ取り、グツと後手に縛り上げ、地下室へ姫を閉ぢ込めて了つた。

姫は無念の齒を喰ひしぱり、聲を限りにカールチンの無道を罵りながら大自在天大國彦命守り給へ幸はひ給へ……と一生懸命に祈願を凝らして居る。

カールチンはヤツと胸を撫でおろし、

「あゝコレで一安心だ。世の中は思ふ様に行かぬものだなア。體は生みつけても、魂は生みつけられぬとは此處の事だ。オイ、テーナ、お前の腹から出た娘ながら、随分義の固い立派な者だなア。彼奴の言ふ事は眞に道理に叶つてゐる。併しながら今となつては如何する事も出来ない。可哀相ながら暫く牢獄に放り込んで置くより途はない。陰謀露顯の虞があるからのう……」

「今サマリー姫の言葉に依れば、吾々の陰謀は最早王様や其他の人々に分つてゐるやうですから、サマリー姫只一人位暗室へ放り込んだ所で、何の效もありますまい。吾耳を抑へて鈴を盗むやうな話ぢやありませんか」

「アハ、ハ、ハ、女童をんなわらへの分際ぶんざいとして英雄えいゆうの心事しんじや智謀ちぼうが分わかるものかい。女をんなは女をんならしく神妙しんめうに夫をつとの命令めいれいに服従ふくじゆうすれば良いのだ。四しの五ごの申まをすと、貴様きさまも姫ひめの如ごとくに牢いと獄やにブチ込こんで了しまふぞ」
と稍聲ややこゑを高たかめて睨ねめつけ叱しかり付つくる。

「オホ、ハ、ハ、怖い事こと怖い事こと、モウこれきり、何も申まをしますまい」

「女をんなは沈黙ちんもくが第一だいいちだ。牝鷄めんどじめかつき曉あけを告つげる家いえには凶事きようじ多おほしといふ。今こんご後は俺おれのする事ことに就ついて一口ひとくちでも容喙ようかいしようものなら、了簡れうけんは致いたさぬぞ。合點がつてん致いたしたか」

と駄目だめを押おしてゐる。テーナは顔色かほいろ青あをざめて稍怒ややいかりを帶おび、夫をつとの顔かほを恨うらめしげに眺ながめてゐる。そこへ慌あわただしくやつて來きたのは、カールチンが股肱ここうと頼たのむマンモスである。カールチン、テーナは素知そしらぬ風ふうを装よそほひ、

「イヤ、マンモス、何か急用きふようでも起おこつたのかな」

「ハイ、少すこしく申まをしあげ度たき事ことがムいました……」

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 松村眞澄録)

第五章 急告（一一〇九）

セーラン王の館の玄關口にて出會つたのは右守のカールチンが右の腕と頼むマ
ンモスとサモア姫である。

「オー、マンモス様、今日は大變にお早い御登城でムりますな。貴方の御出世の
妨げになると何時も仰有るユーフテスの事に就いて、私が一つ確な證據を握りま
したから、何卒ソツと一寸私の居間まで来て下さいませぬか。ここでは人目がは
げしうムりますから、聞かれちゃ大變ですワ」

マンモスは聲を潜めて、

「何、ユーフテスの何か缺點を見出だしたと云ふのか。よしよしそれなら行きま
せう」

「何卒足音を忍ばせて妾の室まで来て下さいませ」
と四五間離れて先に立つて行く。

マンモスは姫の後から何喰はぬ顔して従ひつつ後姿を眺めて、

「何と好い女だなア。何處ともなしに氣が利いてる奴だ。器量と云ひ、あの足の運び様と云ひ、何處に缺點のない女だ。俺も早く思惑を立ててサモア姫の歡心を買ひ、一日も早く結婚の式を擧げたいものだ。姫も姫で俺には特別の祕密を明して呉れるのだから占めたものだ。俺位幸福な者は此イルナの國には、も一人とあるまい。先方も俺にはチヨイ惚れなり俺の方からは大惚れと來て居るのだから堪らないわ、エへ、へ、へ、」

と獨り笑ひ獨り嘔き、サモア姫の室に忍び入る。サモア姫は長煙管で煙草をつぎ一服吸ひつけて、吸口を着物の袖で拭きながら柳の葉の様な細い目をして、

「さあマンモスさま、一服お上り」

と差出す。マンモスも亦團栗眼を無理に細くし、猫の様に喉をゴロゴロならせ、色男氣取りですまし込んで、サモア姫の差出す煙管をソツと受取り、體を斜に構へスパスパと煙を輪に吹いて居る。サモア姫は小聲になつて、

「これ、マンモスさま、大變な事が見付かりましたよ。屹度貴方の御出世の種ですわ」

マンモス亦また小聲こしゑになり、

「サモアさま、何なんですか、早くはや云いつて下くださいな」

サモア姫ひめはツと立上たちあがり戸口とぐちを少すこしく開ひらき、顔かほを外そとへつき出して四邊あたりをキヨロキヨロ見廻みまはし、幸さいはひ人無ひとなきにヤツと安心あんしんしたものの如ごとく、ピシヤリと戸とを締しめ、中なかから固かたく錠ぢやうを下おろし、マンモスの前まへに静しづかに坐ざし、マンモスの左ひだりの手てをグツと握にぎり、二ふたつ三みつ左右さいうに振ふり立たて、

「これマンモスさま、確しつかりなさいませ。ここが貴方あなたの登龍門とうりゅうもんだ。ユーフテスさまが内證ないしやうでクーリンスの娘むすめセーリス姫ひめのお居間ゐまへ忍しのび入り、カールチン様さまの凡すべての計略けいりやくを密々ひそひそと洩もらしてゐましたよ。屹度きつと二人ふたりは情約締結じやうやくていけつが私わたしと貴方あなたの様やうに濟すんでゐると見みえますワ。そしてセーラン王様わうさまに一切いっさいの祕密ひみつを打明うちあける考かんがへらしうムりましたよ」

「そりや本當ほんたうの事ことですか。本當ほんたうならば私わたしと貴女あなたにとつては大變たいへんな幸運かううんが向むいて來きたやうなものです」

「もしマンモスさま」

と耳みみに口くちをよせ何事なにごとが暫しばひくの閒囁あひだたやいて居ゐる。マンモスは幾度いくたびも打領うちうなづきながら、

「サモア姫殿ひめどの、随分ずぶん氣きをおつけなさい。私わたしはこれからカールチン様さまの館やかたに參まゐつて

注進ちゆうしんを致いたし、ユーフテスの反逆はんぎやくを逐ちく一いち申上まをしあげ、彼かれを制敗せいばい致いたして貰もらひませう。さう

すれば、吾々われわれはカールチン様さまの一いちの家來けらいとなり、お前まへさまと安樂あんらくに立派りつぱに樂たのしい

月日つきひが送おくれますからな。何程なにほどセーラン王様わうさまが御威勢ごゐせいが高たかいと云いつても、鬼熊おにくま別様わけさま

の御系統ごひつぱうだから決けつして恐おそるには足たりますまい。カールチン様さまは右守うもりでも大黒主おほくろぬし

様さまのお氣きに入りいりだから大たいしたものですよ。何なんと云いつても旗色はたいろのよい方ほうへつくが利りこ

口くちの人間にんげんのやり方かたですからな」

と惡あくに抜目ぬけめのないマンモスは一生懸命いっしやうけんめいに城内じやうないを立たち出いで、カールチンの館やかたへ慌あわただし

く驅かけ込こむ。マンモスはカールチンの館やかたの裏口うらぐちから忍しのび入いり、其儘そのま奥おくに進すすみ、カール

ルチン、テーナ姫婦ひめふうふの前まへに兩手りやうてをつき、

「旦那様だんなさま、奥様おくさま、大變たいへんな事ことが起おこりました。御用心ごようじんなされませ」

カールチンは此言葉このことばに驚おどろき立膝たてひざになつて、

「何なに、大變たいへんとは何事なにごとぞ。早はやく委細あさいを物語ものがたれ」

とせき立てる。マンモスは汗を拭ひ、

「はい、貴方の御信任遊ばすユーフテスの事でムります。貴方は彼を此上なき者と御信用遊ばして居られますが、彼はセーラン王の間者でムりますから用心なさいませ。人もあらうにクーリンスの娘セーリス姫と情を通じ、一切の祕密をセーラン王やクーリンスの許へ報告致して居ります。今の間に彼を御制敗遊ばされねば、貴方の御生命にも關はる一大事が何時起るかも知れませぬ。私はサモア姫に云ひ含めて様子を考へさして居りました所、確な證據を握りましたから、今にも彼を呼び出して御制敗なさせるのがお家のため、お身のためと恐れながら考へます」

「何、ユーフテスが左様な裏返り的な行動を採つて居るか。そりや怪しからぬ。此儘に捨ておく譯には行くまい」

「もし旦那様、ユーフテスは實に吾々に對し忠實な男でムりますから、よもや、そんな事は致しますまい。人の云ふ事は直に信じてはなりません。一應取調べた上でなくては是非の判断はつきましますまい。これマンモス、お前は大變慌てて居る

様子だが、トツクリ調べた上の事か。或は人の噂を聞いたのか」

「テーナ姫様、私も旦那様の御恩顧を受けて居る者で△ります。何しに證據なき事を申上げて御夫婦のお氣を揉ませませうか。正真正銘の生中の掛値もない證據が△ります。何卒時を移さずユーフテスを召捕り遊ばしてお家の禍根をお除き下さいませ。何程事務が執れると云つても、あの男のする位の事は私でも致します。時おくれでは一大事、さあ早く御決心を願ひます」

カールチンはマンモスの言葉を半信じ半疑つて居る。其理由はユーフテスは自分の最も信任する男であり、二人の中に地位の争ひが暗に起つてゐる事をよく承知して居たから、マンモスが斯んな事を捏造してユーフテスを陥れる考へではあるまいかとも思つてゐたのである。

「マンモス、其方の云ふ事は一分一厘間違ひはないか」

「決して決して嘘偽りは申しませぬ。愚圖々々して居ればお館の一大事ですから、取る物も取り敢へず城内を駆け出し内報に参りました」

カールチン、テーナの二人は雙手を組みマンモスの報告の虚實を判じかね、暫

し默然として考へこんで居る。そこへ何氣なうやつて来たのはユーフテスである。ユーフテスは此場の様子の畜ならざると、マンモスの其場に居るに少しく不審を起し、

「旦那様、奥様、御機嫌宜しうムりますか。ヤア其方はマンモス、吾々の許しもなく直接に旦那様に面會を願ふとは合點が參らぬ。何か急用な事でも起つたのか」と少しく聲に力を入れて詰る様に問ひつめる。マンモスは不意を打たれて俄の返答に困り、

「ハイ、いやもう貴方も御壯健で恐悅至極に存じます。旦那様もお達者で、まあ目出度い目出度い」と上下の言葉使ひを取違へ、マゴついてゐる。

「何とも合點の行かぬマンモスの舉動、何か拙者の行動について旦那様に内通をしに來たのだらう。汝等下役の來るべき所でない、お下り召され」

「何は免もあれ、ユーフテスに尋ね問ふべき仔細あれば、マンモス、其方は暫し居間へ下つて、此方の命令を待つがよからうぞ」

と厳しき鶴の一聲にマンモスは返す言葉もなく、手持無沙汰に後に心を残し、吾居間さして歸り行く。

カールチンは半信半疑の雲に包まれながら言葉嚴かに、

「ユーフテス、お前に一つ尋ねたい事があるが、セーリス姫の居間へ行つたのは何用あつてか、その理由を包まず隠さず吾前に陳述せよ」

と語氣を荒らげ問ひかけた。ユーフテスは平然として、

「實は其事に就いて旦那様に一伍一什を申上げむと、登城を濟ませ、急いで御前へ罷り出でました所でムリます。マンモスの奴、何か申上げたのではムリませぬ

か」

「うん」

「其方はセーリス姫と何か企んで居るのではありませぬか。セーリス姫は誰の娘だと思つて居ますか。お前さまの行動が怪しいと云ふので、今マンモスが注進に來た所だよ。旦那様の疑を晴らすために、何事も包まず隠さず云つたが宜かろうぞや」

「お尋ねまでもない一切萬事の様子を申上げむと參上致しましたのでムります。實はセーリス姫、私の男らしい處に屬根惚れ込み、幾度となく艶書を送り來る可
笑しさ。こいつはテツキリ、クーリンスの内命で自分の腹を探らして居るに違ひ
ないと存じ、固造と仇名をとつた此ユーフテスは幾度となく肱鐵をかまし、昨日
まで暮れて來ました所、女の一心と云ふものは偉いもので、セーリス姫が態々吾
家に訪ねて參り、埒もない事を申して、戀しいの何のと口説き立て、いやもう手
も足もつけやうなく、此上情なく致せば自害も致しかねまじき權幕、そこで私が
思ふやうには、こりや決して廻し者ではない。戀に上下の隔てはないと考へ、態
と軟かく出て見れば、姫は益々本性を現はし、ぞつこん私に惚きつて居ると云ふ
ことが明白になりました。さうなれば彼を利用してセーラン王の動靜を探り、且
先方に計略あらば其裏を搔くには持つて來いと存じまして、旦那様には内證なれ
ど、一寸此ユーフテスが氣を利かしたのでムります」
「あゝさうだつたか、お前の事だから如才はあるまいと思つてゐた。持つべきも
のは家來なりけりだ。そりや良いことをして呉れた。よい探偵の手蔓が出來たも

のだな。大自在天様も、まだ此カールチンを捨て給はぬと見えるわい。ア

八、八、八、いやテーナ、安心致せよ」

「それ聞いてチツとばかり安心致しましたが、まだ十分氣を許す所へは参りますまい。そしてユーフテス、何かよい事を探つて來たであらうな」

「ハイ、王様の信任を受けて居るセーリス姫の事ですから、何でもよく知つてゐます。女と云ふものは賢い様でも「あだ」といものですワ。一伍一什私の口車にのつて皆喋つて了ひました」

「どんなことを言つて居たのかな」

「私もまだ一度會つたきりで十分のことは聞きませなんだ。そして又あまり追究致しますと怪しく思はれてはならぬと存じ、少しばかり、それとはなしに探つて見ました所が、王様は非常にサマリー姫様をお慕ひ遊ばし、姫と添ふのならば王位を棄てて、姫の父親カールチン様に後を繼がせても宜いとお考へでムります。あまり御夫婦の仲がいいものですから意茶づき喧嘩を遊ばし、到頭サマリー姫様は吾家へお歸りになつたので王様の御心配、口で申す様のことではムりませぬ」

何、王様はサマリー姫をそれだけ愛して居られるのか、そらさうだらう。夫婦の情愛は又格別のものだからな」

と嬉しげにテーナはうなづく。

「姫様と舊の如く添はれるのならば、刹帝利の王位を棄てて右守の司様に後を繼いで貰つても差支ないと時々お洩らしぢやさうです。もはや王様に於て其お心ある上は、一日も早くサマリー姫を王様の御許に返し、大黒主様の應援を斷つて、圓滿解決の道を講じられる方が將來の爲め、大變結構でムリませう。國民に對しても信用上大變に都合が宜しいだらうと存じます」

「そりや果して眞實か、それが眞實とすれば此方も一つ考へねばなるまい。平地に波を起す必要もないかららう」

「そら、さうでムいますとも。吾々だつて旦那様が刹帝利の位におつき遊ばす以上は左守の司に任じて頂けるのですから、一生懸命に、ここ迄探つたのでムります。これ以上は又明日登城致しましてセーリス姫に篤と申し聞かせ、王の信任ある彼の口より、一日も早く王様の自決される様勧めませう」

と早くもユーフテスはセーリス姫の罾にかかり、カールチン夫婦をうまくチヨロ
まかして了つた。さうしてサマリー姫を獄舎より引き出し兩親にお詫をさせ、盛
装を整へ輿に打乗せて入那城へ送り届ける事となつた。マンモスはユーフテスの
計らひにて忽ち牢獄に投げ込まれて了つた。

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 北村隆光録)

第六章 誤解(一一一〇)

セーラン王の左守の司と仕へたるクーリンスの家老職チームスの奥座敷にはレ
ブ、カールの兩人と妻のベリス姫四人が車座となつて私々話を始めて居る。チーム
スはベリス姫を遠ざけ、いよいよ熟談に取りかかつた。注意深きチームスは最も
信用するわが女房でさへも秘密の他に洩れむ事を恐れて態とに遠ざけたのである。
ベリス姫は夫の言葉に是非もなく立つてわが居間に行く。後に三人は首を鳩め密々

話に耽り出した。

「實の所はセーラン王様のお館には悪人はびこり、右守の司のカールチンは大棟梁大黒主に甘く取り入り、吾々が主人左守の司なるクーリンス様を初め、王様迄も排斥せむと企んで居るのだ。さうなつちや大變だから、何とかしてこの難關を切り抜け、悪人を懲らしめてやらむと考へて見た處が、別に之と云ふ好い方法も考案も出て來ない。それからこれは到底吾々の考へでは往かない、神様にお願ひするより途はないとクーリンス様が三七日の間梵天王様の祠に立籠り御神勅を乞はれた處、豈計らむや「三五教の宣傳使黄金姫、清照姫がやがてイルナの都をお通りになるから、甘く兩人に頼み込んで此解決をつけて貰へよ」とのお諭し、左守の司も合點行かずと幾度もお伺ひになつたところ、依然として神様のお告は變らない。そこで左守の司様はこのチームスを私かに招き、お二人様のお出を途にお待ち受け申し城内に連れ歸り、この解決を付けて貰はうと七八人の部下をつれ關所迄立ち出で、土中の洞に身をひそめ窺ひ居れば、貴方等お二人の道々の話、時こそ來れと、洞穴を這ひ出し、お二人の様子を聞かむとした處、貴方等は、王

様の前で話すと云はれたが、さうしては却て敵に悟られてはならないから、どうぞ吾々に其所在を知らして頂く事は出来まいかなア」

カル「ハイ、實はイルナの森迄お供をして来たのだが、俄に狼の群がやつて来て、お二人様を何處かへ、くはへて往つて了つたのだから、ほんとの詳しい事は、吾々には分りませぬわい」

「そりや困りましたなア。そんな事なら態々こんな處迄来て貰ふのぢやなかつたに」

レーブ「いや御心配なさいますな。カルは新米で何も知らぬのです。私は一伍一什を知つて居ます。實の所はお二人は狼を眷族にお使ひになつて居ます。危急存亡の時には、いつも二人をお助けする事になつて居ますから、御兩人様が眷族に殺されるやうな事は決してありません。神様は貴方等が七八人の部下を連れて洞穴に待つて居られる事を前知せられ、狼を出して外の方面へお隠しなされたのです」

「さうすると、このチームスはお二人様の敵と見られたのでせうか。さうなると

假令お二人様の所在が分つても、容易に吾々の願ひはお聞き下さいませぬ。はて、困つた事ぢやな

「レーブ、イエイ工決して決して左様な道理はありません。貴方のお引き連れになつた八人の中には半分以上カールチンの部下が混つて居ますから、態にお外しなさつたのですよ。此レーブも其事を感付いたので、あのやうな不得要領な譯の分らぬ事を態と申し上げたのです。きつと一兩日の中には數多の狼を引きつれ悪人を調伏せむとお越しになるでせう。あの方は神通力を持つて居られますから、レーブ、カールの兩人が何處に居ると云ふ事を御存じですから、キツと見えます。此大事な臣を振りまいて勝手に往くと云ふやうな水臭い御主人ではムいませぬからなア」

カルは、

「さうかなア」

とやや首を傾けて不安の色を浮べてゐる。

表門には二人の門番、大缺伸をしながら睡た目を擦つて、下らぬ話に耽つて居

る。

「オイ、ピー州、もう何時だらうなア、イイ加減に就寝の振鈴が聞えさうなものぢやないか」

「さうだなア、もう二十三時、百十五分位なものだよ。もう五分間待て……さうすれば就寝の振鈴が鳴るだらう。監督が廻つて来ると面倒だから、もチツと目を擦つて辛抱するのだなア」

「モウいい加減に監督が廻つて来て呉れぬと俺達も睡たくなつて仕方がないわ。併し家の大將が妙な男を二人連れて歸つたぢやないか。あれは大方右守の司の謀者か知れやしなないがなア。家の大將は人が好いから又騙されやしなないかと思つてそれが心配で耐らないわ」

「こりやシャル、何をおつシャルのだ。門番位がピーピー云つたとて何になるかい。何事も御主人様の胸にあるのだから、俺達は神妙に門番さへして居ればよいのだ。こんな事を喋つて右守の司の親類にでも聞かれようものなら大變だぞ」

斯く話す所へ館の監督エムが足音高く現はれ來り、

「コリヤ コリヤ、ピー、シャールの兩人、今何を云つて居つたか」

ピー「ハイ此頃はよう日和の續くことだ。お月様は下弦になりなさつたけれど、

冬の初の月は又格別なものだとピーから切りまで賞めて居りました」

「貴様、家の中から月が拜めるか、馬鹿な事を申せ、エーム」

「今此武者窓から覗いて見た所でムいます、なあシャール、好い月だつたなア」

「馬鹿を申せ、まだ月は昇つてゐないぢやないか。貴様大方門番を怠り、夢でも

見て居たのだらう。何故振鈴の鳴る迄起きて居ないのか。貴様はいつもサボる癖

があるから駄目だ。明日限り御主人に申上げて暇を遣はずぞ」

「イ工昨日の月の話をして居たのでムいます。何卒今晚はお見逃し下さいませ」

「それなら今日は旦那様に報告をするのを止めてやらう。よく氣をつけよ。未だ

半時ばかり振鈴が鳴るには間があるから、それ迄はキット勤めるのだぞ。睡たけ

れば目を出せ。唐辛子の粉でも塗つてやらう」

「メ、滅相な、そんな事をしられて耐りますか。目が腫れ上つて了ひます」

「オイ、シャール、其方は唐辛子のお見舞はどうぢや。大分睡たさうな顔をして

居るぢやないか』

「イヤ別に睡たいことはありませぬ。私の目はピーのやうな柔かい目とは違ひます。かたいかたい目でムいます。只時々上瞼と下瞼とが集會をしたり、結婚をするだけのものでムいます」

「サア其集會が不可ぬのぢや、目【はぢき】でもかけて團栗眼をむいて居るよ。好いか、アーン」

「それでも、この間も目つけ役と目つけ役が集會をして居られましたぜ。どうぞ大目に見て下さいな。旦那様に何時もサボつて居るなどと報告をせられては、私のみか女房子までが【めい】惑を致しますから」

エムは「ウン」と横柄な返事をしながら棒干切を打ちふり打ちふり暗に姿をかくした。暫くすると東の空を分けて下弦の月、利鎌のやうな影を地上に投げて昇り始めた。門口に女の聲、

「モシモシ門番さまえ、餘り遅くて濟みませぬが、一寸様子あつてチームス殿にお目に懸りに参つたもの、どうぞ通して下さい」

「オイオイ シャール、今頃に女がやつて来たぞ。此奴は迂闊相手になれないぞ。狐か狸が化けて居やがるのだ。日の暮の十八時過ぎたら女は歩くものぢやない。それに今頃あんな優しい聲を出しやがつて、此門戸を叩くものはキット【ば】の字に【け】の字だ。知らぬ顔をして居るが一番よい」

門外から、

「もしもし門番さま、早く開けて下さい」とトントンと小さく叩く。

「オイオイ来たぞ来たぞ。あの門の叩きやうを見い。狐が化けやがつて尻尾で門の戸を叩いて居やがるのだよ、のうシャール」

「それでもありやきつと人間だぞ。どんな秘密の御用でどんな方がお出になつたのか知れやしないぞ。開けて見たらどうだ。もし怪しいものと見たら此棒で撲り付けて正體を現はしさへすりやよいぢやないか。もし狐でもあつて見い。その肉を剥焼にして酒の肴にすりや大變美味いぞ」

「それなら開けてやらうか。シャール、貴様も棍棒を放すな。俺も怪しいと見た

ら撲りつけてやるのだから」

と片手に棒を握り片手で門を開いた。女は待ち兼ねたやうに細く開いた所から轉けるが如く飛び込んだ。女の白い顔、美しき衣の色は、折から昇る月に輝いて恰も天女の如く見えて来た。二人は此奴テツキり化物と、雙方より棍棒をもつて打つてかかるを、女も「しれもの」引き外し、小股を掬つて大地にドツと二人を投げつけ、平然として後振り向き、

「ホ、、、、、危険い事」

と云ひながら、スタスタと奥を目蒐けて進み往く。二人は女の強力に投げつけられ膽を潰して聲を震はせ、

「オイ、シャールよ」

「オイ、ピー……………よ」

「薩張だなア、シャール」

「ウン薩張だ。これだから門番は氣に喰はぬと云ふのだ。キット明日は免職だよ。門番もかうなつては面色無しだから免職されても仕方がないわ。ア、大變に大腿

骨を打つたと見えて、チヨツくらチヨツとには動けないわ。ピー、貴様はどうだ
い」

「俺だつて矢張大地に投げ付けられたのだもの、大抵定つたものだよ」

斯く話す折しも四邊に響く振鈴の聲、

「ヤアヤア有難い、これから暫く俺の天下だ」

と二人は四這になつて門番部屋に這込み、足腰の痛さを耐へながら寝につくのであつた。

ベリス姫は夫に相談の場所から退去を命ぜられ、心の中で「水臭い夫だ、秘密が洩れると云つたつて一生連れ添ふ女房に云はれぬ秘密がどこにあるものか。キツト自分に隠して綺麗な女をどこかに圍つて居るのだらう。それでなくては女房が傍に居られぬ筈がない。レーブ、カルの兩人はきつとナイスを取りもち、終の果には此ベリスを追ひ出し大黒主様の二の舞をさするのかも知れない。エ、氣分の悪い。男と云ふものは油断のならぬものだ。斯うなつて來ると世の中が厭になつて來た」と呟きながら睡りもならず玄關口にヒヨロリヒヨロリとやつて來た。

玄關口には妙齡の美人が月に照らされて細き涼しき聲にて、

「もしもし、チームス様に至急の用事がムいますから、一寸取り次いで下さいませ」

と云つて居る。ベリス姫は「むつ」として、

「どこの魔性の女か知りませぬが、夜夜中に大それた男の名を呼んで【かい】出しに来るものが何處にあるかえ。チームスにはベリスと云ふ立派な家内がムりま
すぞや。お前達に夫の名を呼んで貰ふ必要はありません、【とつと】と歸つて下
さい」

「貴女が、ベリス姫様でムいましたか。御壯健でお目出度うムいます。チームス
様は御在宅でムいますか」

「ハイ、居るか居らぬか早速お答へは出来ませぬわい。貴女もチームスと永らく
の御關係、私の死ぬのを待つて居られましたらうが、憎まれ子世に覇張るとか…
…これこの通りピチピチと千年も万年も生きるやうな此體、あまり御壯健で貴女
の身にとつて餘りお目出度うはムいますまい」

「一寸急に申しあげ度い事がムいまして參つたのでムいますから、お疑ひ遊ばさずに、どうぞ奥へお取り次を願ひます」

「オホ、何とまあ家の旦那をチヨロまかすだけの腕前をもつて居られると見え、甘い事を仰有いますわい。此ベリス姫はそんな馬鹿ではありません。用があるなら晝来て下さい。今頃出て来るものにどうで碌なものはない。斷じて取次は致しませぬ。いつ迄なと其處に待つて居らつしやい。お氣の毒様、アバよ」と頤を二つ三つしやくつて奥深く姿をかくした。此女は左守の司クーリンスの娘セーリス姫である。ユーフテスの口より聞いた一切の秘密を今夜の中にチームスに知らせ、其準備に取りかからせむ爲に人目を忍んでソツとやつて來たのである。ベリス姫は面を膨らし疊觸り荒々しくチームスの部屋に驅け込み、レーブ、カルの兩人をカツと睨め付け、聲を震はせ地團駄を踏みながら、
「こりや、レーブ、カルの悪人共、ようまア旦那様を煽てあげ魔性の女を世話致したな。家を亂す大悪人、了簡致さぬぞや。これ旦那様、私を今迄よくお騙しなさいました。貴方のお腕前には此ベリスも感心致しました。何も男の御器量でな

さる事だもの、私に包み隠しをせず、何故公然と女を引き入れ大黒主様のやうに私を放逐なさらぬのか、餘り遣方が姑息ぢやありませんか。エ、残念や口惜しやなア」

と其邊にあつた小道具を狂氣の如く投げつけ狂ひ廻る。レーブ、カルの兩人は合點往かず、啞然としてベリス姫の亂暴を打ち見守つて居る。チームスは聲を尖らし、

「こりやベリス姫、其方は狂氣致したか。このチームスに女があるとは以ての外、何を證據に左様なことを申すか。證據なくして大切なお客様の前で左様な事を申すと、第一夫の名折れ、教の道に傷がつく。サア返答を致せ」

ベリス姫は恨めし氣に涙を拭ひながら、
「オホ、何とまあ白々しい事を仰有いますわい。證據がなくて何そんな事を申しませうぞ。貴方の名譽を思ひ、教を大切に思へばこそ私が氣を揉むのぢやムいませぬか。よう此處の所を聞分けて下さい。貴方の改心が出来ねば、私は此場で自殺致します。何卒それを見て御改心を願ひます」

と早くも懐劍抜き放ち喉に突き立てむとするを、レーブは慌てて其手を握り短刀を引つたくり、

「コレコレ奥様、誤解なさつては困りますよ。此方の旦那様に限つてそんな事をなさる氣遣ひはありません。そりや何かの間違ひでせう。キット私が保證致しますから御安心なさいませ」

ベリスは冷笑を浮かべながら、

「オホ、、措いて下さいませ。そんな巧妙な辭令を百萬遍お竝べなさつても、そんな事に胡麻化されるやうなベリスではありません。よい加減に人を馬鹿にしておきなさい。レーブとカルが、家のチームスと腹を合せたる同じ穴の貉でせう。どこを押へたら、そんな素々しい事がよく言はれるものですか。オホ、、」

「チームス、レーブ、カルの三人は一向合點往かず、兩手を組んで思案に暮れて居る。其處へ監督のエムが、セーリス姫を伴ひ現はれ來り恭しく兩手をついて、

「旦那様、只今、左守の司様の御息女、セーリス姫様が、至急の御用があつて、夜中にも拘らず何か御用が出来たと見えてお越しになりましたから、此處迄御案

内を致しました」

チームスはセーリス姫の來訪と聞き、ハツと驚き叮嚀に首を疊に擦り付けながら、

「これはこれはセーリス姫様、よくまア夜中にも拘らず此破家をお訪ね下さいました。何か變つた御用でムいますか」

「ハイ、今晚是非申し上げねばならぬ事が出来ましたので、夜中お驚かせ申しまして誠にすみませぬ」

ベリス姫は、セーリス姫と聞いて今更の如く打ち驚き、鯨鉾立になつて頭をペコペコ打ちつけながら、

「これはこれは尊き尊きセーリス姫様で御座いましたか。存ぜぬ事とて重々の御無禮、どうぞお赦し下さいませ」

セーリス姫は何氣なき體にて、

「オホ、、、、誠に夜中に参りまして強い誤解をさせました。定めしチームス様の情婦が出て來たと誤解をおさせしたと思つて居ました。あの時お名乗をすれば

よかつたのですが、天に口、壁に耳と言ふ事がありますから申上げませぬでした。どうぞチームス様に對して、怪しき關係を持つて居る女ぢやムいませぬから、御安心下さいませ」

ベリス姫は、

「ハイハイ」

と恐れ入り頭も得上げず、顔を眞紅にして畏縮してゐる。

チームス「ベリス姫、毎度云つてお前の氣を揉ますか知らぬが、一寸祕密の御用があるさうだから席を外して居て呉れ」

ベリスは、

「へー」

と長返事しながら、少しく不安心の面持にて、不承々に挨拶もせず次の間に立つて行く。チームスはセーリス姫に對して氣の毒でならず心を痛めながら、
「セーリス姫様、御存じの通りの困つた女房ですから、どうぞお氣に觸へられな
いやうに願ひます」

「そんなお心遣ひは御無用にして下さいませ。夫のある方に對し、若い女が尋ねて來るのが元來間違つて居ます。併しながら、そんなことを言つて居られないのでお訪ね致しました。時にこのお二人の方は此處に居られても差支へムいますまいかなア。何だか申上げ惡うて困ります」
「レーブ、イヤ、私も長らく座談に時を費やし尻も痛くなりましたから一寸外へ出て月でも賞めて來ませう。サア、カルさま、暫く屋外の空氣を吸うて來ようぢやありませんか」
と云ひながら早くも立つて外に出でて往く。カルも従つて屋外に姿を現はした。無心の月は、皎々として遺憾なく萬物を照臨してゐる。奥の一閒にはチームスとセーリス姫との間に重要な問答が交換された様子である。

(大正一一・一一・一〇 舊九・二二 加藤明子録)

たいしやみづのえいぬ とし
大正壬戌の年 月日の駒もスクスクと

じふいちねん ばんしゅう
十一年の晩秋の 十一月十一日に

く かみよ ものがたり
奇しき神代の物語 一千一百十一の

ふしおもしろ の た
節面白く述べ立つる 時刻も恰度十一時

をさ みよ まつむら きのふ かは ますみぞら
治まる神代を松村が 昨日に變る眞澄空

ももとせちとせ いしすゑ まんねんひつ
百年千年の礎と 萬年筆を走らせて

げんかうようし うちむか み
原稿用紙に打向ひ 身もたなしらに記しゆく

かむながらかむながら みたまさち
あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

あま ゆ ほし かげ きらめき わた あきたか
天つたひ行く星の影 きらめき渡り秋高く

うま いなな いさ みそら
馬の嘶き勇ましき 御空に澄める瑞月が

あんぜんいす よこ かみ をしへ よも くに
安全椅子に横たはり 神の教を四方の國

ももやそしま くて ひら しきしま
百八十島の果までも 隈なく開き敷島の

たばこ けむり ふ げんいしん さんかい
煙草の煙を吹かせつつ 現幽神の三界を

てうゑつ ものがたり をしへ みこ よ なか
超越したる物語 教の御子や世の中の

青人草の魂柱

太しく立てむと述べ立つる

此物語永久に

天地と共に極みなく

神の御苑の花となり

果實となりて五六七神

胎藏したる五種の

味はひうまく調合し

靈魂の餌とならしめよ。

盤古神王奉戴し

ウラルの道を開きたる

ウラルの彦やウラル姫

三五教の神人に

醜の砦をやはられて

千代の住家と構へたる

世にも名高きアーメニヤ

館をすてて常世國

ロツキー山や常世城

現はれ出でて自在天

大國彦を奉戴し

バラモン教を建設し

盤古神王はどこへやら 押込めおきてバラモンの

教を常世の國內に 開き居たりし折もあれ

又もや神の戒めに 常世の國を逃げ出し

埃及國に打渡り 豊葦原の中津國

メソポタミヤの自凝の 島に渡りて自在天

教を開く折もあれ ウラルの道に仕へたる

音彦、龜彦兩人が 三五教に歸順して

神の司となりすまし 大江の山や三嶽山

鬼ヶ城へとかけ向ひ 言靈戦を開始して

勢強く攻め來る 其神力に辟易し

大國別に仕へたる 鬼雲彦の大棟梁

鬼熊別と諸共に 空に塞がる黒雲に

隠れて逃げゆく月の國 ハルナの都に居を構へ

再びここにバラモンの 教を開きみたりしが

カルマタ國にウラル彦　ウラルの姫の初發に

盤古神王を奉戴し　道を開きしウラル教

ウラルの彦の系統と　名乗る常暗彦の司

ウラルの殘黨呼び集め　其勢は日に月に

盛りとなりてバラモンの　教の根底を覆へし

今は危くなりける　ウラルの彦やウラル姫

初めに開きしウラル教　常世の國に逃げ行きて

新たに開きしバラモン教　其源は一株の

教主の教も主齋神　盤古神王自在天

二つに分れし其結果　互に鎬を削りつつ

憎み争ふぞ是非もなき。

三三五 小亞細亞の神都エルサレムの都に近き黄金山下に埴安彦、埴安姫の神顯現して、
教を開き給ひしより、八岐の大蛇や醜狐の邪神は、正神界の經綸に極力對抗

せむと、常世彦、常世姫の子なるウラル彦、ウラル姫に憑依し、三五教の神柱國
治立命に對抗せむと盤古神王鹽長彦を擔ぎ上げ、茲にウラル教を開設し、天下を
攪亂しつつありしが、三五教の宣傳神の常住不斷の舍身的活動に敵し得ず、ウラ
ル山、コーカス山、アーメニヤを棄てて常世の國に渡り、ロツキー山、常世城等
にて今度は大自在天大國彦命及び大國別命を神柱とし、再びバラモン教を開設し
て、三五教を殲滅せむと計畫し、エチプトに渡り、イホの都に於て、バラモン教
の基礎を漸く固むる折しも、又もや三五教の宣傳使に追つ立てられ、メソポタミ
ヤに逃げ行きて、ここに再び基礎を確立し、勢漸く盛ならむとする時、神素盞鳴
尊の遣はし給ふ宣傳使太玉命に神退ひに退はれ、當時の大教主兼大棟梁たる鬼雲
彦は黒雲に乗じて自轉倒島の中心地大江山に本據を構へ、鬼熊別と共に大飛躍を
試みむとする時、又もや三五教の宣傳使の言靈に畏縮して、フサの國を越え、や
うやく月の國のハルナの都にバラモンの基礎を固め、鬼雲彦は大黒主と改名して
印度七千餘ヶ國の刹帝利を大部分味方につけ、その威勢は日月の如く輝き渡りつ
つあつた。然るにウラル彦、ウラル姫の初發に開きたる盤古神王を主齋神とする

ウラル教の教徒は、四方八方より何時となく集まり來りて、ウラル彦の落胤なる常暗彦を推戴し、デカタン高原の東北方にあたるカルマタ國に、ウラル教の本城を構へ、本家分家の説を主張し、ウラル教は常暗彦の父ウラル彦の最初に開き給ひし教であり、バラモン教は常世國に於て、第二回目に開かれし教なれば、教祖は同神である。只主齋神が違つてゐるのみだ。ウラル教は如何してもバラモン教を従へねば神慮に叶はない。先づバラモン教を歸順せしめ、一團となつて神力を四方に發揮し、次いで三五教を殲滅せむものと、ウラル教の幹部は息まきつつあつたのである。

茲にバラモン教の大黒主は此消息を耳にし、スワ一大事と鬼春別、大足別をして一方はウラル教へ、一方は三五教へ短兵急に攻め寄せしめ、バラモン教の障害を除き、天下を統一せむと計畫をめぐらし、既にウラル教の本城へは大足別の部隊を差向け、三五教の中心地と聞えるたる齋苑の館へは鬼春別をして、數多の勇卒を率ゐ、進撃せしめたるは、前卷既に述ぶる通りである。

秋の夜嵐吹き荒び、雨さへ交り、木の葉はバラバラと音して散り布く。左守の司クーリンスの高塀を越して忍び入る覆面頭巾の曲者があつた。これは右守の司に仕ふるマンモスといふ忍術の達人である。茲に忍術に就て一言述べておく必要があると思ふ。

忍術とは變幻出沒、肉身を自由自在に相手の前に煙の如く消滅し、巧に其踪跡をくぐらます魔術の様に考へてゐる人もある様だが、忍術なるものは決してそんな不可思議なものではない。忍術とは忍耐術の意味であつて、敵情を窺ふに際し、屋根裏に一週間でも十日でも飲まず食はずに、咳もせず、息を潜めて様子を考へたり、或は寒暑を問はず、目的の達するまで、假令十日でも二十日も水中に身を没し、鼻と目だけを水面に出して空気を吸ひ、顔の上に藻などを被つて、敵情を視察したり、或は廣き泉水などを渡るにも波を立てないやうに、水音のせない様に活動し得る迄には、餘程の習練を要するのである。又一夜の中に百里以上も高飛を徒歩でせなくてはならぬのである。其歩き方は左の肩を先にし、成るべく空気の當らない様にして道を突破し、蟹の如くに横に歩む時は、足音もせず、三

四倍の道が歩めるのである。甲地にて宵の口に或目的を達し、其夜の中に百里も離れた乙地へ到着して納まり返つてゐるのが忍術の目的である。又忍術を使ふ者は、黒白青赤其他いろの布巾を懐にかくしおき、白壁の前に立つ時は白布を出して其身を隠し、黒き物の側に立寄る時は黒の布を以て身を蔽ひ、青き布を出して身を蔽ひ、人の目を誤魔化す事を以て忍術の奥義としてゐるのである。つまりカメレオンがあたりの草木の色によつて變ずる如き活動をするのである。又上から下まで黒装束を着し、四五尺ばかりもある手拭を一筋持ち、之を頬被りにしたり、或は高い所から吊り降りる綱にも應用するのである。又一本の鎧透しといふ極めて丈夫な一尺ばかりの短刀を所持し、其短刀は無銘である。萬一過つて遺失した時に、其主の分らない様との注意から無銘の刀を用ひ、又一切印の入つた持物は身につけないのである。そして其短刀には三間も四間もある長い丈夫な下げ緒をくりつけ、塀などを越す時は、下げ緒の端に手頃の石又は分銅を括りつけ、庭木の枝などに、外からパツとふりかけ、綱を結びつけ、短刀を大地に立て、其上に片足をのせ、下げ緒を力として身を跳らし塀に飛上り、下げ

緒をたぐつて短刀を手に入れ、又スルスルとほどける様にして木の枝から吊りおり、座敷に忍び入るのである。そして皮袋に二三合ばかりの水を入れておき、ソツと敷居に流し、戸をあける時、音をさせぬ様にして暗夜に忍び込み、敵情を視察するのが忍術使の職務であつた。そして敵の寢所に忍び入つた時は、頭の方から進みよるのである。萬一足の方から進む際、敵が目をさまし、起上る途端に其姿を認めらるる事を恐るるからである。頭の方から進む時は、敵が驚いて起上るを、後から短刀にて切りつくるのに最も便宜なからである。又室内の様子をよく考へ、屏風の蔭とか、行燈の蔭とかに身を潜める事を努めるものである。そして其室に入る前に敵の熟睡せるや否やを瀨ぶみする爲に、平常から飼ひならしておいた二匹の鼠を懐にかくし置き、先づ一匹を室内に放つて見る。鼠は變つた家に行つた時は、うるたへて座敷中をガタガタと騒ぎまはるものである。其鼠の音で目をさますやうではまだ熟睡してゐないのである。寝まぐれにシートとシートと相手が鼠を叱り、其儘グツと寝て了ふ。ソツと障子の穴から忍術使が覗くと、鼠は其顔を見て再び懐へ歸つて来る。今度は又念の爲次の鼠を一間に投入れると、

又もや鼠はうるたへて騒いで、ガサガサとかけ廻る。それでも氣がつかずに眠つてみたならば、最早忍術使は安心して其目的を達するのである。

クーリンスはセーラン王に面會し、種々と右守の司のカールチンが陰謀に備ふべく、密議を凝らし、初夜頃漸く吾家に歸り、草疲れ果てて、グツと寢に就いてゐた。そこへ塀を乗り越え黒装束となつてやつて來たのがマンモスであつた。彼は型の如くクーリンスの寢室に忍び入り、鼠を放つて見た。第二回目に放つた鼠はうるたへて襖の破れ穴から隣の宿直役のウヰルスの間へ飛込んだ。ウヰルスはウツラ　ウツラ眠つてゐたが、飛込んだ鼠が自分の顔を走つたので、フツと目をさまし、起出でて見れば合點の行かぬ鼠の行動、こりやキット何者かが忍び入つたに相違ない……と、左守の司の寢室に耳をすまして窺つてゐた。そこへノツソリと黒装束で現はれた男、「ヤア」と一聲、左守の司を頭の方から切りつけむとする。この聲に驚き、矢庭に襖を押し開け、夜具を抱いた儘、曲者を挨拶せ、短刀を奪ひ取り、直に後手に縛り上げて了つた。

左守の司は此物音に起上り、

「ウヰルス、夜中にあわただしく何者であつたか」

と尋ねれば、ウヰルスは聲を震はせ息を喘ませながら、

「何物か、あなたの寢室に忍び入り、危害を加へむと致しました故、飛びかかつて短刀をもぎ取り、後手に縛り上げました。サア是からよく調べて見ませう」

「ヤア險呑な所だつた。よくマア助けてくれた」

と言ひながら、カンテラの火を掻き立て、曲者の顔をよくよくすかし見れば、右守の司の近侍を勤めるマンモスである。

ウヰルス「オ、其方はマンモスではないか、大方カールチンに頼まれたのだらう。之には深き企みのある事ならむ、様子を逐一白状致せ」

マンモスは恨めしげに齒を喰ひしぼり、丸き目をギョロリと剥いて、ウヰルスを睨みつけ、首を左右にふつて一言も答へない。ウヰルスは聲を勵まし、

「委細を白状すれば此儘助けてつかはす。さもなくば汝が命を取つて、イルナ城の災を除かねばならぬ。それでも返答いたさぬか、其方はカールチンに頼まれて、

左守の司様を暗殺に來たのだらう」

「決して決してカールチンに頼まれたのではない。つい妙な夢を見て知らず知らずここに飛込んで来たのだ。別に何等の考へもないのだから、御無禮したのは許してくれ」

「馬鹿を申すな、其方は斯の如く忍術の装束を着け、一切萬事の準備を致して來てゐる以上は、最早かくしても駄目だ。白状致さぬか」

といひながらマンモスの短刀を以て、胸のあたりを切りに擦つてみた。マンモスは可笑しさ痛さに笑ひ泣きしながら、

「アハ、、、イヒ、、、、痛い痛い言ひます言ひますキット言ひます、どうぞこらへて下さい」

「最早白状するに及ばぬ、證據は歴然たるものだ。それよりもチツと擦ばかりして、笑はしてやらうかい」

と又もや胸のあたりをクルリクルリとさいなむ。

「アハ、、、、イヒ、、、、痛い痛いどうぞこらへて下さいませ。實に所は右守の司カールチンさまから頼まれました。左守の司は吾大望の邪魔を致す目の上の瘤

だから、汝が得意の忍術にて甘く仕留め歸りなば、餘がイルナの國王となつた時、其方を右守の司にしてやらうと仰有いましたので、つい欲にかられて悪い事とは知りながら、出世の元だと思ひ、忍び込みました。モウ今度はキツと心得ますから、どうぞお赦しを願ひます」

「旦那様、如何取計らひませうか」

左守「ウン、俺に任せ」

と云ひながらマンモスの顔をグツと睨みつけ、

「許し難き悪人なれども、今日は見のがしてくれ。一時も早く右守の司の館へ立歸り、クーリンスはビチビチ致して居る。其方も早く改心なさらぬと御身の災、目のあたりに迫つてゐますぞ。今の中に御改心をなされと、よつく傳へよ」

といひながら縛めの繩を解き放ちやれば、マンモスは九死一生の難關を遁れ、喜び勇み、足早に暗に紛れて、館の裏口より一目散に逃げてゆく。

（大正一一・一一・一一 舊九・二三 松村眞澄録）

第二篇 神機赫灼

第八章 無理往生（一一一二）

中央印度のデカタン高原の南方に當るテルマン國と云ふ、住民殆ど十萬に近き、印度では相當な大國があつた。テルマンの都に富豪の聞え高き毘舍族にシャールと云ふ男があつた。其邸宅は都の東方最も風景佳き地を選び、邸の周圍一里四方にあまり、深き廣き濠を圍らし、其勢ひ王者を凌ぐばかりの豪華振りを發揮してゐる。富力に任せて數多の美人を買ひ求め來り之を妾となし、本妻のヤスダラ姫に對しては極めて冷酷な取扱をしてゐた。ヤスダラ姫は入那の國のセーラン王が従妹に當る刹帝利の生れで、セーラン王の許嫁であつた事は前節已に述べた通りである。ヤスダラ姫はシャールの廣き邸の中に可なり美はしき家宅を與へられ、二人の侍女と共に面白からぬ月日を送りつつあつた。ヤスダラ姫館の取締にリ

ダーと云ふ年若き綺麗な萬事拔目なく立廻る利口な男があつた。ヤスダラ姫は此
リーダーを此上なきものと愛し時々琴等を弾じさせ其日の鬱を慰めてゐた。或時
ヤスダラ姫は一閒に閉ぢ籠り、一絃琴を弾じながら述懐を歌うてゐる。

水の流れと人の行末 定めなき世と云ひながら

夢の浮世に生れ来て 妾は尊き刹帝利

セーラン王の従妹と生れ 年端も行かぬ幼き頃より

親と親との許嫁 吾行末はイルナの國

治統ぎ給ふセーラン王の 后と仕へまつる身の

今は果敢なきヤスダラ姫 遠き山野を隔てたる

テルマン國の毘舎と在す シャールの妻と下されて

朝な夕なに現世を はかなみ暮す悲しさよ

空ゆく雲を眺むれば 西へ西へと流れ行く

御空をかける鳥見れば 之また西へ進み行く

空行く雲や飛つ鳥の
人の哀れを知るならば

イルナの國に在れませる
セーラン王の御許へ

切なき妾が思ひねを
完全に詳細に訪れよ

朝な夕なに吾戀ふる
聖の王の身の上を

案じ過して夜も晝も
心痛むるヤスダラ姫

思ひ廻せば吾身ほど
因果なものが世にあらうか

月の國にて刹帝利の
尊き家に生れあひ

貴勝の地位にありながら
今は卑しき毘舍の妻

神も佛も世の中に
お在しまさずや、あゝ悲し

情なの娑婆に永らへて
胸の炎を焦しつつ

消す術もなき苦しきよ
シヤールの夫は朝夕に

富の力に任せつつ
毘舍の娘や首陀の子を

彼方此方と狩り集め
吾物顔に女子を

弄びつつ妹と背の
尊き道を打ち忘れ

妾に對して一度も 情をかけし事もなし

バラモン教を守ります 梵天帝釋自在天

大國彦の神様よ ヤスダラ姫の境遇を

憐れみ給ひて一時も 早く戀しきセーラン王に

一目なりとも會はせかし 假令吾身は朽つるとも

神より受けし吾魂は 王の御側に通ひつつ

朝夕御身を守るべし テルマン國は廣くとも

シヤールの家の瑞垣は 山より高く築くとも

邸を圍る濠水は 何程深く廣くとも

王を慕へる吾心 如何でか通はぬ事やあらむ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

御魂の清き人の來て 吾身を救ひ夜に紛れ

父のまします入那の國に 送らせ給へ自在天

尊き神の御前に 心も常に安からぬ

ヤスダラ姫が眞心を 籠めてぞ祈り奉る

あゝ惟神々々 此世を造り給ひたる

皇大神の御前に 慎み敬ひ願ぎ奉る

と淑かに歌つてゐる。かかる所へ邸の内外の掃除を済ませ身褌をなし、正服と着換へて姫の室を訪ねて来たのは忠僕のリリーダーである。姫は琴の手をやめて二ツコと笑ひ、

「あゝ其方はリリーダー殿、大變早いぢやありませんか。大層お掃除が……今日は又特別によく出来たやうですな」

「ハイ、今日は旦那様から御命令がムりましたので、早朝より室内の掃除を致し、門の隅々まで竹箒がバイタになる所まで掃きちぎつて置きました。大變美しくなつたでせう。破れ草鞋の様に隅から隅まで【はき】ちぎつて置きました。アハゝゝゝ」

「ホゝゝゝ、掃きちぎつて置いたのは結構だが、今日に限つて特別の御命令を

遊ばすとは、何かの【はき】違ひでも出来たのぢやありませんか

「ハイハイ何分僕のこととで姫様が御存じない位ですから、吾々には八キ八キと何御用か分りませぬ。兔も角履物の位置をキチンと揃へて置きました。これで旦那様がお見えになつても、家内しめて四名と云ふ事が分りますやうに、履物が玄關口にお迎へを致して居りますわ」

ヤスダラ姫は少しく頭を傾け、

「ハテナ、いつもお見えになつた事のない旦那様が御入りなのか知らぬ。どうせ碌なことではあるまい」

と獨語ちつつ心配さうに考へ込んでゐる。そこへ二三人の供人を従へ足音高くやつて来たのはシャルルである。ヤスダラ姫は一絃琴を手早くとつて床の間にキチンと直し、襟を直し満面に愛嬌を湛へながら、言葉優しく、

「あゝ貴方は旦那様、よくまあ入らして下さいました。今日は何か變つた御用向でも出来ましたか」

と慇懃に尋ねればシャルルは木訥な聲で、

「何、別にこれと云ふ用はないのだが、今日はお前に一つ聞き訊さねばならぬ事が出来たのだから、其積りで包まず隠さずハツキリと返答をしてもらはねばならぬよ」

と面膨らし不機嫌の體である。ヤスタラ姫は胸を轟かせながら、

「それは又變つた御用向、何か妾の一身上に就いて嫌疑がおありなさるのですか」

「あればこそ、忙しい中を一日の暇を割いてお前の館へ出て來たのだ。暫く待つて居る。入那の都からカールチンの奥様テーナ姫様がお前の身の上に着いてお越しになつたのだ。お前は夫の目を忍び、入那の國のセーラン王の御許へ艶書を送つたではないか」

ヤスタラ姫は打驚き顔色を變へて、

「な……何と仰せられます。まるで寢耳に水のやうなお話ぢやムりませぬか」

シヤールはあげ面をしながら嫌らしく笑ひ、

「エへへ、寢耳に水とは俺の事だ。お前は幼少より左守の司の娘として深窓に育てられ、純粋な淑女だと思つてゐたのに、夫の目を忍んで艶書を送るとは何と

云ふ不貞腐れ女だ、見下げ果てたる莫蓮者奴、今に面の皮をヒン剥いてやるから
楽しんで待つてゐるが宜からうぞ」

ヤスダラ姫は悲しさ身に迫り、聲を立ててワツと其の場に泣き伏した。シヤールは此體を見て冷やかに笑ひながら、

「アハ、何とまあ、劫を経た古狸だな。女の涙は城を傾け五尺の男子を手鞠の如くに翻弄すると聞く。併し乍ら此シヤールは幾百人とも知れぬ女性に接し居れば、女の慣用手段たる泣き聲や涙には決して驚かないぞ。此道にかけては天下無雙の勇士、シヤールに向つてはバベルの塔を蝶が襲撃する程にも感じないのだから、そんな古手な事は止めて貰はうかい。【あた】八釜しい」

「旦那様、貴方はどこ迄も妾をお疑ひ遊ばすのですか。此頃入那の國には悪人蔓り王様を廢立せむと企らむ一派と、これを助けむとする一派とが始終暗闘を續けてゐるさうですから、大方反對黨の方から何かの策略で妾を犠牲にすべく中傷讒誣の聲を放つたのでせう。何卒冷静に御熟考を願ひます」

「何處までも濫太い阿女奴、汝の辨解は聞く耳持たぬ。今テーナ姫を此處へお迎

へ申し黑白を分けて見せてやるから、赤恥をかかない様に致したが宜からう」
ヤスタラ姫はシャルルの暴言に呆れ果て、心弱くては叶はじと氣をとり直し、
眼を据ゑ坐り直して襟を正し、儼然として、
「妾はいやくも入那の國の刹帝利左守の司のクーリンスが娘、左様な穢はしき
事が如何して出来ようぞ。テーナ姫とやら、證據に立つと申すなら、一刻も早く
此處へお招きなさいませ。屹度妾が悪者共の謀計を暴露し懲しめてくれませう」
と形相物凄く稍聲を尖らせて言ひきつた。シャルルも名代の富豪、テルマン國の
有力者の中に數へらるる身なれども、生れは卑しき毘舍の種、ヤスタラ姫の此言
葉に何となく恐れを抱き、次第々に尻込みなして引下る。かかる所へ二三の供
に送られて肩で風を切りながら、絹ずれの音サヤサヤと上使氣取りでやつて來た
のは右守の司カールチンの妻のテーナ姫である。
テーナ姫は鷹揚に玄關口を上り、少しくフン反り返つて裾を長く引きずりなが
ら、身體一面に瑠璃、【しゃこ】、珊瑚、金、銀、瑪瑙等で飾り立て、棚機姫の
降臨か、松代姫の再來かと言ふやうな滿艦飾で奥の間に遠慮會釋もなく進み入り、

シヤールに打ち向ひ、

「シヤール殿、其方の第一夫人ヤスタラ姫は此方でゐるかな」

と鷹揚にヤスタラ姫を睨めつけながら故意とに問ひかける。シヤールは頭を下げ、

「ハイ、問題のヤスタラ姫はこれでゐります。何卒十分にお取調を願ひます。貴

女の御言葉の通りならば如何しても此儘にして置く譯には参りませぬ」

テナ姫は皺枯れた聲を出して、さも憎々しげに、

「此方が問題のヤスタラ姫でゐるかな。如何にも蟲も殺さぬやうな淑女面をさら

し、大それた事を致さるるものだな。外面如菩薩内心如夜叉、善の假面を被つて

シヤールの家庭を紊亂し、次いでイルナの國を攪亂致す金毛九尾の悪狐の再來、

一日も早く妾の申す通り堅牢なる座敷牢を造り、外間の交通を絶ち幽閉なさらね

ば、カールチンの右守様に對し申譯が立ちますまいぞ。此テルマン國はイルナの

國の屬邦なれば、當時大黒主の信任厚き右守の司の命令に背かむか、シヤールの

家は忽ち闕所の憂目に遇ひますぞ。早く決行なさるが宜からう」

と目に角を立て嚴かに宣示するを、シヤールは縮み上り「ハツ」と疊に頭をすり

つげながら、

「仰せに従ひ其準備に取りかかるでムいませう」

ヤスダラ姫は夫シヤールの不甲斐なき態度にグツと腹を立て、聲を震はせながらテーナ姫に向ひ、

「其方は右守の司の妻テーナ姫ではないか。汝が夫カールチンは卑しき首陀の生れ、吾父クーリンス殿より引き立てられ、今は右守の司の地位に迄進み、漸く世に認めらるる様になつたのは誰のお蔭だと思つて居るか。汝は吾幼少の時の子守役を勤めて居つた卑しき婢女、今は右守の司の妻となりたればとて、妾に對し無禮の雑言、最早聞棄てはなりませぬぞ」

と睨めつければテーナ姫は平然として打笑ひ、

「オホ、愈以てヤスダラ姫は狂氣致したと見ゆる。妾の夫はイルナの國にて其名も高き刹帝利の生れ、妾は又貴勝族の生れでムる。ヤスダラ姫が父クーリンスこそ卑しき首陀の生れ、吾夫カールチンの引立によりて今日の地位を得ながら、其大恩を忘れ、反對に妾の夫を卑しき首陀族と申すは何たる暴言、こりや屹

度正氣ではあるまい。早く牢獄に打ち込めよ。』
と勢に任して反對的の捏論をまくしたて、無理往生にヤスダラ姫を幽閉せしめむと焦慮つてゐる。カールチンがテーナ姫をシャールの館に、ヤスダラ姫に難癖をつけて幽閉せしむべく、使者に遣はしたのは深き考へがあつての事である。カールチンは大黒主の後援の下にセーラン王、クーリンスを放逐し其野心を達せむとする折、ヤスダラ姫のありては後日の大妨害となる事を慮り、難癖をつけて姫を幽閉し置かむとの策略である。又一つには娘のサマリー姫とセーラン王との交情あまり面白からざるは、ヤスダラ姫此世に生存して何時とはなしにセーラン王に思ひを通じるを以て、セーラン王の斯くも吾娘を冷遇するならむとの僻みより、犬糞的にシャールの館へ頭抑へにテーナ姫が夫の使者として遙々やつて來たのである。ヤスダラ姫は心汚きカールチン、テーナの計略によつて、シャールの邸内に堅牢なる牢獄を造り其中に不愆にも残酷にも幽閉さるる身となつて了つた。
風雷雨電の烈しき夜、ヤスダラ姫によく仕へたるリーダーは堅牢なる牢獄を打ち破り、ヤスダラ姫を救ひ出し暗に紛れてシャールの館を脱出し、夜を日につい

で入那の國、父の館をさして逃げ歸る準備にかかれり。

（大正一一・一一・一一 舊九・二三 北村隆光録）

第九章 蓮の川邊（一一・一三）

空照り渡る月の國

朝日も清くテルマンの

國の都に名も高き

毘舍族シヤールの富豪の

妻と降りし刹帝利

セーラン王の従妹なる

ヤスダラ姫は朝夕に

其身の不運をなげきつつ

悲しき月日を送る折

思ひもかけぬイルナ國

右守の司と仕へたる

醜の司のカールチンが

女房のテーナは遙々と

シヤールの館に立ち向ひ

右守うもりの司かみの使者ししやとなり

四邊あたりを拂はらひ堂だう々だうと

進すすみ來きたるぞ忌ゆ々ゆしけれ

シヤールは使者ししやと聞きくよりも

打うち驚おどろきて吾居わがゐ間に

茶菓さくわの響應きやうおう慇懃いんぎんに

テーナの姫ひめをあしらひつ

ヤスタラ姫ひめの館守やかたもり

リーダー其他そのたに命令めいれいし

館やかたの内外うちとを清きよめしめ

時分じぶんはよしとテナ姫ひめ

導みちびきながら入いり來きたり

ヤスタラ姫ひめに打うち向むかひ

無理無體むりむたいの暴言ばうげんを

吐はきかけながらテナ姫ひめの

心こころを損そこねちやならないと

諂てんねい佞阿諛いあゆのありたけを

盡つくして尾ををふる卑怯ひけふもの者

二世にせの妻つまなるヤスタラ姫ひめの

妻つまの命みことを哀あはれにも

堅牢無比けんらうむひの牢獄らうごくに

投なげ込こみ置おきて胸むねを撫なで

やつと急場きふばをのがれたる

姑息こそくの仕打しうちぞ憎にくらしき

ヤスタラ姫ひめに心こころより

至誠しせいを捧ささげて盡つくしたる

下僕しもべのリーダーは雨風あめかぜの

はげしき夜よるを幸さいはひに

鋭き鉞うちふるひ

獄屋を苦もなく打ち破り

姫をば背に負ひながら

警戒厳しき邸内を

闇に紛れてすたすたと

荒野を渡る夜の道

北へ北へと進みつつ

ヤスタラ姫の戀慕ふ

故國にイルナの國境

蓮の川の畔まで

逃げ歸り往く折もあれ

カールチン等が部下の者

幾十人とも限りなく

蓮の川の兩岸に

手具脛引いて兩人が

逃れ來るを待ち居たり

あゝ惟神々々

神の恵の幸はひて

一日も早く本國へ

二人の男女を恙なく

歸らせ給へと瑞月が

心の空にかけまくも

バラモン神の御前に

代りて謹み願ぎまつる

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

曲津の神は猛ぶとも

忠義一途の下僕等が 主人の君を守りつつ
往く手の道を隈もなく 開かせ給へ惟神
神の心になり代り 往く手の道を案じつつ
茲にそろそろ述べ立つる あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ。

ヤスダラ姫、リーダーの兩人は千辛萬苦の結果、やつと虎口を逃れ蓮川の袂迄
逃げ來る。頃しも秋の末つ頃、少し虧けたる清朗の月は、主従二人の頭を遺憾な
く照らし給ひ、二人の行路をあつく守らせ給ふ。二人は川邊に安着し、漸く西に
傾いた月影を眺めながら、ヤスダラ姫は、

天傳ふ月の光に照らされて

蓮の川邊に着きにけらしな

リーダー「月もよし御空も清き月の國」

ヤスダラ姫につき従ひし吾。

村肝の心もやうやく晴れ渡り

イルナの國の月はかがやく」

ヤスダラ「やすやすと下僕の神に守られて

故國にイルナの吾ぞ嬉しき。

セーラン王神の命は如何にして

今宵の月を眺めますらむ。

さゆる夜に君の面影偲ばれぬ

昔イルナに見し月を思へば。

附添ひしリーダーの身をば照らしつつ

吾等を守る月夜見尊し」

リーダー「仰ぎ見る御空の月は清けれど

テーナの住める館ぞ濁れる。

大空に輝き渡る月影も

醜の村雲覆ふぞ忌々しき。

この旅路いとやすやすと守れかし

大國彦の神の恵に」

ヤスダラ「テルマンの夫の館を忍び出て

やうやくここに月の影さゆ。

胸の闇一度に開くハチス川

渡る浮世にさやる鬼なし。

さりながら天に風雨の障あり

人に禍なしとも限らず。

心せよリーダーの下僕この川は
イルナの國の關所なりせば

リーダー「謹みて前や後に村肝の
心を注ぎ守り仕へむ」

ヤスダラ「朝夕に慕ひまつりし吾君と
父のまします國近づきぬ。
心のみ先に立ちつつ吾足の
進み兼ねたるもどかしさかな」

リーダー「大空の月照り渡る夜の道

如何でか曲の襲ひ來べきや。

惟神の心に任しつ

誠を力に進み往くべし。

今しばしヤスタラ姫の神司

忍ばせたまへ二日三日路

かく歌ひながら空を仰いで主従は息を休めて居る。忽ち川邊の草叢より、現はれ出でたる數十人の黒い影、見る間に兩人が前後左右を取り圍み、四五間の距離を保つて近よりもせず、人垣を造り睨めつけて居る。リーダーは聲を張り上げ、
「吾こそは左守の司、クーリンス様の御息女ヤスタラ姫様のお供を致す武術の達人リーダーなるぞ。何者の指揮か知らねども、吾々が往手にさやるは不都合千萬、一刻も早く、道を開き土下座をなして姫様に謝罪を致せ。猶豫に及ばば、目に見せて呉れる、サア早く、命の惜しい奴は此方の申す様に致すが好からうぞ」

大勢の中より、小頭らしき大の男、忽ちリーダーの前に立ち塞がり大口あけて高笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、ハ、只今の汝が廣言片腹痛し。吾こそはイルナの國にて武術の達者と聞えたる強力無雙のハルマンなるぞ。カールチン様の命令に依り、汝等兩人を生擒にせむため、この關所に人數を集め、今や遅しと待ち疲れて居た所だ。愚圖々々致さず、速に縛につけ」

「アハ、ハ、ハ、ハ、吐したりな、ハルマンの空つけ者め、このリーダーが、苦き目見せて呉れむ」

と云ふより早く鐵拳を打ち振りながら、ハルマンに向つて攻め寄つた。ハルマンは一步二歩後へすざり、キット身構へしながら、

「ヤアヤア家來の者共、吾はリーダー一人にかかつて居るから、其間にヤスダラ姫を捕縛致せよ」

と下知すれば、オーと答へて數十人は唯一人のヤスダラ姫に向ひ遮二無二飛びつき來る。ヤスダラ姫は忽ち下紐を解き、襷十文字に綾取り、後鉢巻リンと締めた

る女武者の勇ましき。寄り来る木端武者を片端からスツテンドウと或は草中へ或は川底へ投げ込み防ぎ戦へど、立ち代り入り代り寄せ来る敵に疲れ果て、ドウと其場に打ち倒れて仕舞つた。其機を逸せず數人の大男は、重なり合うて姫を力限りに押へつけ、腕を捻ぢ今や繩をかけむとする時しもあれ、後の方より四方を響かす宣傳歌聞え来る。

☞ 神が表に現はれて 正邪と理非を立て別ける

ウラルの神に仕へたる 吾は尊き宣傳使

セイロン島に打ち渡り バラモン教の神司

サガレン王を放逐し ケーリス姫を手に入れて

意氣揚々と神地城 神の司となりし折

三五教の宣傳使 天の目一つ神司

現はれ來りていと清き 尊き言靈打ち出し

神地の城は忽ちに 紅蓮の舌に舐められぬ

吾身に永く憑依せし

八岐の大蛇は驚きて

雲を霞と逃げ出せば

今迄迷ひし夢もさめ

誠の心に立ち歸り

勇み進みて三五の

貴の信徒となりにけり

三五教の司等が

仁慈無限のやり方に

心の底より感歎し

神地の都を後にして

月の國へと打ち渡り

七千餘國を隈もなく

三五教の宣傳歌

歌ひて進む吾なるぞ

バラモン教やウラル教

三五教といろいろに

教の區別はありとても

此世を造り固めたる

元つ御祖は一柱

吾等の父といます神

天が下なる人草は

一人も残らず皇神の

御息に現れし貴の御子

互に憎み争ひて

神慮を悩ませまつるなよ

人は神の子神の宮

尊き身魂と生れながら

虎狼に劣るべき

醜の行ひつづけつつ

自ら吾身の品格を

傷つけ破り根の國や

底の國なる苦しみを

決して受くる事なかれ

悪の身魂の善心に

立ち歸りたる龍雲が

四海同胞の好誼にて

茲に忠告仕る

バラモン教の人々よ

直日に見直せ聞き直せ

互に吾身の過ちを

顧みなして皇神の

心を安んじ奉り

黄金花咲く天國の

救ひの門を開くべし

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

此宣傳歌に打たれてや、ハルマンを初め數十人の人影は雲の風に散る如く、一目散に北へ北へと蓮川を横ぎり先を争ひ逃げて往く。ヤスダラ姫は宣傳歌の主に向ひ、いと叮嚀に會釋しながら、

「いづくの方が存じませぬが、劍呑千萬の所へお越し下さいまして、尊き宣傳歌をお歌ひ下され、吾々主従は其御神力に依つて救はれましてムります。あゝ私もかういふ場合に宣傳歌を歌ひ、寄せ来る敵を言向和せばよかつたのですが、あまり俄の敵の襲來に擧措其度を失し、恥しながら女の分際としてあられもない腕立を致しました。そして貴方は何處の何人でムいますか」

「ハイ、私は卑しき首陀の家に生れたものでムいます。お聞き及びでもムいませうが、セイロン島の神地の都に於て曲津神に誑惑され、大國別命様の御實子國別彦様が、サガレン王となつてバラモンの教を神地の城に於てお開き遊ばす處へ参り、姫様を「チヨロ」まかし、惡逆無道の振舞を致しました龍雲でムいます。只今歌で申し上げました通り三五教の宣傳使天の目一つの神の御訓誠やサガレン王様の御仁慈に依つて、曇りきつたる身魂を救はれ、今は果敢なき放浪の身となり、月の國七千餘の國々を廻り廻りて今此處へ参ります途中怪しき人聲に何事ならむと驅けつけ見れば、御兩人様が大勢に取圍まれ御困難の最中、それ故、及ばずながら三五の道の宣傳歌を歌ひ敵を追ひ散らしたのでムいます」

と、包まず隠さず己が素性を打ち明け、落涙しながら其事實を物語る殊勝さに、ヤスダラ姫は感に打たれ、

「貴方が音に名高き龍雲様でムいましたか。ようまあ其處迄御改心が出来ました。實に御立派な御人格とおなり遊ばしましたなア」

「お褒めに預かつては畏れ入ります。私も神様のお蔭によつていろいと苦勞を與へられ、身魂を研いで頂きました。これも全く三五教のお蔭でムいます」

「三五教はそれだけ感化力がムりますか、實に結構な教でムいますなア。私も一度其教が聞かして頂きたいものでムいます」

「貴女さへ聞きたいお心におなりなさつたならば、神様はキット聞かして下さいませう。先日も三五教の宣傳使、照國別様が數多の人の前で、結構な話を居られた。其教を聞いた人間は貴賤老幼の嫌ひなく残らず歸順して仕舞ひました。誠一つを立て抜く無抵抗主義の三五の教へは、其傳播力も強く、恰も燎原の火の如き勢でムいます」

ヤスダラ姫は、

「あゝ左様でムいますか」

と云つたきり、さし俯いて兩手を合せ「國治立の神、吾身の將來を守らせたまへ」と小聲になつて祈つて居る。リーダーは膝頭の負傷を撫で擦りながら漸くにして立ち上り、龍雲に向ひ叮嚀に頭を下げ、

「今承はれば貴方は有名な龍雲様でムいましたか、思はぬ所でお目に懸りました。これも何彼の因縁でムいませう。よくまあ姫様の御危難をお救ひ下さいました。私は下僕のリーダーでムいます。何分宜敷此後の御指導を願ひます」

龍雲も頭を下げ叮嚀な言葉つきで、

「ハイ、お言葉恐れ入ります。袖振り合はすも他生の縁とやら、罪深き龍雲、何卒お互様に助け合ひを願ひたいものでムいます。そして貴方等はどちらへお越し遊ばすのでムいますか」

「ハイ、テルマン國のシャルルの館からイルナの都、クーリンス様のお宅へ指して姫様がお歸り遊ばすので、私はお供に参つたのでムいます。然るに此川邊に於て、右守の司のカールチンが部下共、姫様を此處にて捕へむと致しましたについ

ては、何か都に大變事が起つて居るので、ムまいせうと實に心配でなりません。

左守、右守お二方の間に大變な暗闘が出来て居ると云ふ事は、此龍雲も薄々聞き及んで居ります。カールチンと云ふ男は實に奸佞邪智の癡者で、國人の受けの悪い神司、それに引きかへ左守の人氣のよい事、羨ましい位で、ムいます。そんな事から右守が嫉妬心を起し、悶着が起つて居るのでせう。これから及ばずながら龍雲が姫様をイルナの都迄お送り致しますから御安心なさいませ。

ハイ有難う、地獄で佛に會うたと申さうか、根底の國で救ひの神に會うたと申さうか、こんな嬉しい事は、ムりませぬ。何分かよわき女の旅、宜敷お願い致します。

「然らば私が後になり前になり御身邊を保護して参ります、サア往きませう」と云ふかと思れば、龍雲の姿は忽ち草の茂みに隠れて仕舞つた。主従二人は宣傳歌を歌ひながら蓮の川を横ぎり、何となく勇氣加はり、足許もいと輕げに北へ北へと進み行く。

(大正一一・一一・一一 舊九・二三 加藤明子録)

第一〇章 狼の岩窟（一一一—一四）

入那の都より四五里を隔てたる所に高照山といふ高山脈が横はつてゐる。イルナの都へ行くには如何しても此山を越さねばならぬ。昔大洪水のあつた時、高照姫命が天降り給ひて、國人を此高山の頂に救はれた因縁に依つて今尚高照山と稱へられてゐるのである。此峠を照山峠と稱へられてゐる。今より十萬年以前に世界的大地震があつて、今の印度は非常な高原地であつたのが、大に降下してつたものである。ハルナの都も今は孟買となつてゐるが、今の孟買は丁度其時代の大雲山の頂に當つてゐる。ハルナの都は海底深く沈没して了つた。故に今日の地理學、地質學より見れば、大變に此物語は相違する點の多々あるは言を俟たない次第である。

照山峠の二三里右手に當つて、狼の岩窟といふのがある。ここには實に恐ろしき狼の群が天地を我物顔に横行闊歩して、人間の一步も其地點に踏み入る事を許さない狼窟であつた。黄金姫、清照姫はイルナの森の少しく手前から狼の群に誘

はれて、此狼の岩窟に進み入る事となつた。(狼とは食人種の別稱)
噂に聞く恐ろしき狼の棲處とは言ふものの、母娘兩人が宣傳歌を歌ひながら、
狼につれられて山深く進み入ると、幾千萬とも限りなく、狼軍は細谷路の傍に列
を作り、ウーウーと歡呼の聲を放ち、二人の入り来るをば嬉しげに待ち迎へてゐ
る。母娘はあたりに心を配りながら、漸くにして狼王の棲息せる大岩窟に進み入
つた。

岩窟の中は大變に廣く且つ美しく、所々に金、銀、瑪瑙、【しゃこ】、瑠璃な
どが光つてゐる。其美はしさ、恰も天國の宮殿に進み入つた如き感じがした。母
娘は案に相違しながら狼に導かれて奥深く進み入ると、そこに白髪異様の老人が
美はしき姫神と共に端坐し、何事か狼に囁いてゐる。狼はよく人語を解するもの
の如くであつた。母娘は怪しみながら老人の側近く寄り見れば、豈圖らむや三五
教の宣傳使、天の目一つ神夫婦である。

黄金姫は打驚き、頓狂な聲を出して、

ヨウ、貴方は北光の神様ではゝいませぬか。珍しい所でお目にかかりました。

どうしてマア斯様な狼窟へ御夫婦とも御立籠になつてゐられますか」

「神素盞鳴尊より、汝は神變不思議の神力を得たれば、最早人間界を濟度するに及ばぬ。人間界は他の宣傳使にて事足れば、汝は之より猛獸の棲處に進み入り、彼等憐れなる獸類の靈を濟度し、向上せしめ、生を變へて人間と生れしむべく、惠の露を施せよとの御命令、謹んで承はり、とうとう今は鷹依姫、龍國別さまのやうに、猛獸の王となりましたよ。アハ、ハ、ハ、」

「何とマア大神様の御仁慈は、禽獸まで及ぼすとはこの事でムいますア。私等母娘、入那の森を越えて都へ進まむとする折しも、數十頭の狼現はれ來り、吾等母娘の袖を喰へ無理に引張りますので、何事か神様の思召ならむと、ここ迄狼にひかれて岩窟參りをやつて來ました。オホ、ハ、ハ、」

竹野「貴女は三五教にて御名の高き黄金姫の神司でムいましたか、お若いのは清照姫様でムいますか。世の爲道の爲、御苦勞さまでムいますなア」

「ハイ有難うムいます。貴女は黄泉比良坂に於て桃の實と仕へ給うた竹野姫様でムいましたか。御高名は承はり、一度拜顔を得たしと明暮れ祈つてゐましたが、

これは又思はぬ所で拜顔を得ました。何分身魂の曇つた吾々母娘、どうぞお叱りを願ひます」

「御鄭重な御挨拶、痛み入ります。どうぞ何分にも宜しく御交際を願ひます」

北光 「貴女は玉山峠に於て、狼に救はれたでせう」

黄金 「ハイ左様でムいます、貴方それを御存じでムいますか」

「狼共の注進により、貴女の危急を救ふべく、一小隊ばかり繰出しました、ア

ハ、ハ、ハ、ハ」

「それは御親切に能う救うて下さいました。吾々は未だ人間心がぬけませぬので、

猛獣迄もなづけることは出来ませぬ。又獣の言を解する事も出来ない困つた女で

ムいます。かやうな身魂を以て宣傳使とは實にお恥しうムいます」

「貴女をここへお招きしたのは外ではムいませぬ。實は貴女はハルナの都へお越

し遊ばす事になつて居りますれども、それ以前に一つ、不思議な働きをして頂か

ねばなりませんから、狼を遣はして、右の手續きを取つたので御座います。實は

イルナの國にバラモン教の神司兼刹帝利なるセーラン王の部下にカールチンとい

「ふ心汚き右守があつて、ハルナの都の大黒主と謀し合せ、セーラン王を打亡ぼし、自ら刹帝利の位地に進まむと致して居ります。就いてはハルナの都より數千騎を以て、近々にセーラン王の館へ攻めよせ來る筈なれば、貴女は之よりイルナ城に進み入り、セーラン王其他一族を誘ひ出し、此狼の岩窟へ迎へとり、徐に右守の陰謀を打破つて貰ひたい。其爲に貴女を御苦勞になつたのです」
と始めて狼の迎へに來た理由を物語る。

「委細承知致しました。左様ならば母娘兩人が之よりイルナ城へ進ませう。何卒御保護を願ひます」

「眷族共を數多従へさせますれば御安心下さいませ。併しながら狼といふ奴は屋外の守護にはなりません、屋内へ這入れば少しも働きの出來ない奴ですから、どうぞ氣をつけて行つて下さい。貴女は途中に於て、龍雲を始め、ヤスダラ姫にキツト會ふでせう。北光の神が待つてゐたと言つて下さい」

黄金姫は目を丸くし、

「ナニ龍雲と仰有るのは、セイロン島に於て謀叛を企んだ妖僧では無いませぬか」

北光の神ニツコと笑ひ、

「左様で△る。如何に悪人なればとて改心した上は尊き神様の御子。今は修行の爲、月の國七千餘國を巡禮させてありますが、時々狼の眷族をさし遣はし、龍雲を守らせ、又龍雲より絶えず手紙を眷族に持たせて送つて來ます。實に狼と雖も、なづいたら重寶なものですよ。アハ、ハ、ハ、」

「丁度吾々母娘のやうなものですなア。私も蜈蚣姫といつた頃は、随分大神様の教に敵對ひ、黄金の玉を盗みなどして、悪の限りを盡して來ましたが、改心の結果、かやうな尊き宣傳使に採用されましたので、實に神様の御仁慈は、言葉に盡すことが出來ませぬ」

と聲まで曇らせてホロリと涙を落とし、さし俯むく。

「北光の神様、どうぞ清照も御守護をして下さいませや。キット御使命は果しますから。竹野姫様、宜しく御願ひ致します」

「何と凜々しい清照姫様の御姿、どうぞ男の難に會はないやうに氣をつけて下さいませ。貴女も一度御經驗が御有りなさるのですからなア」

清照姫は少しく頬を赤らめて差俯むくしほらしさ。北光の神は母娘の首途を祝
すべく、音吐朗々として宣傳歌を歌ひ始むる。

神の御稜威も高照の山奥深く築かれし

狼達の岩窟に教を開く宣傳使

北光彦や竹野姫 黄金姫や清照姫の

貴の命の首途を 祝して清き宣傳歌

謹み敬ひ宣べ立つる あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして イルナの都に立向ふ

秋の草野の色深き 黄金姫や清照姫の

貴の命の御使に 仁慈無限の大神の

大御力を授けまし 眷族共に守らせて

セーラン王の館へと 遣はし奉る勇ましき

皇大神の御言もて 天の目一つ神司

竹野の姫と諸共に

汝が命に打向ひ

イルナの都の曲神を

言向和す出陣を

神に代りて宣べ傳ふ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

魔神はいかに荒ぶとも

皇大神の守ります

三五教の神司

恐るることは更になし

悪逆無道の神司

右守司のカールチン

それに従ふ曲神は

いかに澤山あるとても

生言靈の神力に

言向和し三五の

教にまつるへ和すこと

火を睹るよりも明けし

さはさりながらバラモンの

大黒主は名にし負ふ

八岐大蛇の生宮と

下り果てたる靈なれば

いかに尊き神力も

容易に亡ぼす術もなし

心ひそめて時を待ち

彼等が自ら弱りはて

悔悟くわいごの念ねんの起おこるまで ひそかに事ことを計はかるべし

先まづ第一だいいちにセーランの 王わうをば救すくひ一族いちぞくを

助たすけてこれの岩窟いはやどに 深ふかくかくした其上そのうへで

大黒主おほくろぬしの軍勢ぐんせいを 生言靈いくことたまに悉ことごとく

言向和ことむけやはし、さもなくば 海うみの彼方あなたに追おひちらし

三五教あななひけつの神力しんりきを 時節じせつをまつて照てらすべし

時ときの力ちからは天地あめつちを 造つくり給たまひし大神おほかみも

左右さいうし給たまふ事ことならず この道理だうりを聞きき分わけて

慌あわてず騒さわがず悠々いういうと 時節じせつを待まつて曲神まががみを

言向ことむけ給たまへ惟神かむながら 神かみに代かはりて北光きたてるの

神かみの司つかさが宣のべ傳つたふ あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ』

竹野姫たけのひめは又また黄金姫わうごんひめ母娘おやこの首途かどでを祝しゆくし、宣傳歌せんでんかを歌うたふ。

鬼熊別が妻司と
現はれ給ひし蜈蚣姫

心の暗の戸押し開き
眞如の月の御光に

照らされ給ひ三五の
神の司と進みまし

名さへ目出度き黄金姫の
貴の命と言あげし

黄龍姫と現はれて
龍宮島に時めきし

小絲の姫も今は早
三五教の神司

清照姫となり給ふ
神の恵の幸はひて

曲は忽ち善となり
曇は晴れて大空の

青きが如くすくすくと
心勇ませ給ひつつ

神素盞鳴大神の
御言畏み秋の空

草鞋脚絆に身をかため
心も軽き蓑笠の

そのいでたちの勇ましさ
思へば思へば三五の

尊き神の御教に
魔司は忽ち善となり

鬼は佛となり變り
狼さへも斯くの如

いと従順じつじゆんになりをへぬ 黄金姫わうごんひめよ清照姫きよてるひめの

貴うづの命みことよ汝なれは今いま イルナの都みやこに到いたりなば

我情がじやう我慢がまんの雲くもを去さり 仁慈じんじ無限むげんの大神おほかみの

清きよき心こころに神かむならひ あくまで争あひそひ競きそふなく

無む抵抗いかうしゆぎ主義しゆぎを發はつ揮きして 四方よもにさやれる曲まが司かみを

善ぜんに導みちき救すくひませ 何なに程ほど知ち識しはさとくとも

意念いねんはいかに強つよくとも 禽獸きんじう蟲魚ちゆうぎよを助たすくるは

慈悲じひの心こころに及およぶまじ 慈悲じひ博愛はくあいを禽獸きんじうに

及およぼし救すくふ神心かみこころ 必かならず忘わすれ給たまふまじ

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら 神かみに祈いのりて竹野姫たけのひめ

汝なれが命みことの出陣しゆつちんに 際さいして忠告ちゆうこ仕かまつる

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら 守まもらせ給たまへ天津神あまつかみ

國津神くにつかみたち八百萬やほよるづ 母娘おやこ二人ふたりの成せい功こうを

指折ゆびをり數かずへ待まち暮くらす 竹野たけのの姫ひめの志こころざし

心に深く刻みつつ　とく出でませよ神司
成功祈り奉るせいこういの たてまつ」

と歌ひ了り、神殿の神酒を下げ來りて、母娘に戴かせ、首途を送る。
黄金姫は簡
單に三十一文字を以て答禮に代ふ。

北光の神の命や竹野姫

その宣言を固く守らむ。

世を救ふ心のたけの清ければ

世に恐るべき曲はあるらめ。

いざさらばこれより進み入那國

セーラン王を守り助けむ」

清照きよてる 二柱神ふたはしらかみの御言みことを畏かしこみて

母娘おやこは心勇こころいさみて行ゆかむ。

狼おほかみの御供みともの司かみに守まもられて

入那いるなの國くにに進すすむ嬉うれしさ。

北光きたてるの神かみの命みことよいざさらば

待またせ給たまへよ歸かへり來くる日ひを。

竹野姫たけのひめ神かみの命みことに物もの申まをす

汝なが背せの君きみをよまもく守まもりませ

竹野姫たけのひめは之これに答こたへて、

大神おほかみの御稜威みいづも空そらに高照たかてるの

イルナに進すすむ人ひとぞ尊たふとき。

北光きたてるの神かみの司つかさは生神いきがみよ

今日は岩窟に明日は入那に

黄金 『いと清き神の司の御教に

われは進みて都に上らむ。

いざさらば二柱ともまめやかに

神の大道に仕へ給はれ

かく歌ひ、別れを告げて再び身づくりろひをなし、黄金姫、清照姫は狼に送られ、急坂を勇み進んで下り、山口に出で、再び元來し道に引返し、照山峠を越えて入那の都に進むこととはなりぬ。

(大正一一・一一・一一 舊九・二三 松村眞澄録)

第一章 麓の邂逅（一一一五）

龍雲 高照山の岩窟に

狼どもに誘はれ

思はぬ人に巡り會ひ

思はぬ使命を受けながら

秋野を飾る黄金姫の

貴の命の宣傳使

心も清照姫命

母娘は勇み雀躍し

細き谷間を辿りつつ

秋風荒ぶ大野原

神の御歌を歌ひ合ひ

勇み進んで照山の

峠をさして来て見れば

道の傍の岩の上に

男女三人の人の影

何かヒソヒソ囁きつ

母娘の姿を打ちまもり

驚異の眼を光らせて

黄金姫に打向ひ

もしもし旅のお方様

何れへお出でなされます

私はイルナの都まで

歸り行く身の三人連れ

何卒お供を願ひます

つらつら眺め参らせば

貴女は尊き宣傳使

三五教の人ならむ

私も同じ三五の

道を奉ずる神の御子

心汚き龍雲の

おちぶれ果てた此姿

直日に見直し聞直し

お供に仕へさせ給へ

あゝ惟神々々

神の救ひにあづかりて

清き神世も北光の

目一つ神に助けられ

七千餘國の月の國

經巡り終へし修驗者

決して怪しき者ならず

お供に仕へさせ給へ

これにまします姫司は

イルナの都に隠れなき

左守の司の姉の御子

ヤスダラ姫の神司

一人の男はテルマンの

姫の國より従ひて

此處まで送り來りたる

忠誠無比の僕ぞや

あゝ惟神々々

神かみの恵めぐみの幸さちはひて　イルナの都みやこに起おこりゐる
騒さわぎを清きよく打うち鎮しづめ　セーラン王わうの身みの上うへを
救すくひまつらむと思おもへども　神しん力りき足たらぬ龍雲りううんや
ヤスダラ姫ひめが如何いかにして　此この大任たいにんを果はたし得えむ
三五教あななひけうの宣傳使せんでんし　吾等われらが微衷びちうを憐あはれみて
救すくはせ給たまへ惟神かむながら　神かみの御前みまへに眞心まごころを
捧ささげて祈いのり奉たてまつるに

と龍雲りううんは歌うたを以もつて黄金姫わうごんひめ一行いっかうに掛合かけあつて見みた。黄金姫わうごんひめは直ただちに歌うたを以もつてこれに答こたへ
た。

天あめと地つちとを造つくらしし　國治立くにはるたちの大おほ神かみや
豊國とよくにひめ姫まもの守まもります　三五教あななひけうの神司かむつかさ
妾わひはは黄金姫命わうごんひめみこと　一人ひとりの女をんなは吾娘わがむすめ

清照姫の宣傳使

高照山の岩窟に

狼等に伴はれ

登りて見ればこは如何に

三五教の神柱

北光神を始めとし

竹野の姫は悠然と

數多の狼使ひつつ

岩窟の主人となりすまし

禽獸蟲魚に至るまで

尊き神の御惠の

露を施し給ひつつ

鎮まりいます尊さよ

北光神の御言葉に

汝黄金姫命

必ず途中に龍雲が

ヤスダラ姫を伴ひて

イルナの都に進み入る

その途中に會ふならむ

汝は吾の言の葉を

ヤスダラ姫の一行に

完全に詳細に物語り

高照山の岩窟に

直様進み來るべく

諭せと厳しく宣べ給ふ

汝は正しく龍雲か

ヤスダラ姫の神司

テツキリそれと覺えたり

さあ今よりは道を變へ

狼群がる高照の

深山をさして進むべし

吾等母娘は逸早く

照山峠を乗り越えて

入那の都へ進み入り

セーラン王の一族を

救ひ助けて高照山の

狼岩窟に導きつ

御身を厚く守るべし

あゝ惟神々々

神の御言を蒙りし

黄金姫の言の葉を

夢々疑ふこと勿れ

人は正しき神の御子

水晶魂を與へられ

神の柱と敬はれ

尊き道の宣傳使と

神のまにまに任せられし

清き魂を持ちながら

嘘偽りを言ふべきや

早く座を起ち進みませ

北光神の御言もて

汝等三人に打向ひ

委曲に勧め奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ終れば、ヤスダラ姫はこれに答へて歌ふ。

あゝ有難し有難し
聲名高き三五の

教を傳ふる宣傳使
黄金姫にましますか

若き女の神司
音に名高き清照姫の

貴の命にいませしか
存ぜぬ事とは云ひながら

誠に御無禮仕り
謝罪の辭もありませぬ

只今貴女のお言葉に
妾一行三人は

イルナの都へ行かずして
一時も早く高照の

深山の奥の岩窟へ
進み行けよと宣り給ふ

北光神の御言もて
宣らせ給へる御親切

いつの世にかは忘れまじ
不運の重なるヤスダラ姫の

吾はかなしき神の御子
大慈大悲の御心に

救はせ給へ惟神
黄金姫や清照姫の

道の司の御前に 眞心こめて願ぎ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌つて感謝の意を表したり。黄金姫は聲も涼しく歌ひ始むる。

御空に月は清照姫 きらめく星の数の如

劫河の眞砂の数多き 青人草の艱めるを

救ひ助けて天國の 御園に導く宣傳使

三五教の大神の 御言畏み遙々と

月の御國を横斷し ハルナの都に立向ふ

尊き使命を身に帯びし 母娘二人の神司

イルナの都の刹帝利 セーラン王の御危難を

救はむものと北光の 神の御言を畏みて

イソイソ進む道すがら ヤスダラ姫の一行に

此場で巡り會うたるも 全く神の引合せ
 一時も早く吾母の 言葉に従ひ高照の
 山に進ませ給へかし 妾は後よりセーラン王の
 國主の命を守りつつ やがて再び巡り合ひ
 無事を祝することあらむ 魔神の荒ぶ荒野原
 躊躇ひ給ふ其中に 右守の司に仕へたる
 醜の捕手の來りなば 又もや一汗心にも
 あらぬ荒びをせにやならぬ 事なき中に一刻も
 早く進ませ給へかし 尊き神の御前に
 眞心誓ひて宣りまつる あゝ惟神々々
 御靈幸はひましませよ 』

と歌ひ終はれば、龍雲は二人の歌に答へて又歌ふ。

あゝ有難し有難し
尊き神の御教に

従ひまつる吾々は
三五教の神司

汝が命の宣り言を
如何でか否みまつらむや

仰せに従ひ今よりは
心の駒に鞭をうち

虎狼の吠え猛る
山路を分けていそいそと

高照山の岩窟に
吾等一行三人づれ

勇み進んで登るべし
黄金姫よ清照姫の

貴の命よ吾々が
行手を守り給ひつつ

喪なく事なく高照山の
岩窟に進ませ給へかし

如何なる枉津の現はれて
姫を悩ますことあるも

三五教にて鍛えたる
生言靈を打ち出して

寄せ来る敵を悉く
言向和し北光の

神のまします御舎に
送りて行かむ惟神

神の心に見直して
心を安くましませよ

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の御靈の幸はひて

おやこふたりかむづかさ 母娘二人の神司 イルナの都に上りまし

まがことごと 枉の身魂を悉く 生言靈に言向けて

わうみ セーラン王の身の上を 守らせ給へ大神の

みまへまじこころ 御前に清き眞心を 捧げて慎み願ぎまつる

かむながらかむながら 御靈幸はひましませよ」

リーダーは又歌ふ。

わうかむづかさ 黄金姫の神司 清照姫の宣傳使

ゆきやう 雪か花かと云ふ様な 容色も形貌も美はしき

きよみこと 清き心の汝が命 北光神の御宣言

われらくま 吾等三人に隈もなく 宣らせ給ひし尊さよ

われらなれ 吾等一行三人は 汝が命の御教を

力と頼み勇ましく
 高照山の岩窟に
 進みて神の御恵を
 蒙りまつりヤスダラ姫の
 貴の命の身の上を
 保護しまつらむ吾心
 假令天地は變るとも
 リーダーの僕のある限り
 ヤスダラ姫の身の上は
 必ず案じ給ふまじ
 二人の司よ、いざさらば
 吾はこれより兩人の
 お供に仕へまつりつつ
 高照山に向ふべし
 汝が命は潔く
 照山峠を踏み越えて
 イルナの都に至りまし
 嚴の言靈打鳴して
 王の身邊守りませ
 天地の神の御前に
 慎み敬ひ二柱
 神の司の成功を
 慎みかしこみ願ぎ奉る
 あゝ惟神々々
 御靈幸はひましまして
 再び汝の御前に
 リーダーの姿を現はして
 大成功を祝ふ日を

松、竹、梅の潔く 堅磐常磐に願ぎ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

ここに五人は各述懐を歌ひ、別れを惜しみながら三人は高照山へ、二人は照山峠を野嵐に吹かれながらエチエチと登り行く。

(大正一一・一一・一一 舊九・二三 北村隆光録)

第一二章 都入り(一一一六)

黄金姫、清照姫は、三人の一行を高照山に遣はし、肩の重荷を卸すやうな心持になつて、さしみに嶮しき急坂をエチエチと登り行く。漸くにして頂上に辿りついた。此處にはユーフテスと云ふ右守司の家老を勤めて居る不誠忠無比の男が、二三人の家の子を引きつれ、神の告によつて黄金姫母娘の來ることを知り、案内

と迎へを兼ねて登つて来た。ユーフテスは、二人の峠の頂上に佇み、四方の景色を眺め息をやすめて居るその側に、恭しく頭を下げながら進み寄り、

「一寸ものをお尋ね申しますが、私はイルナの都の右守司の館に家老職を勤めて居りますユーフテスと申すものでムいいますが、若しや貴女様は三五教の宣傳使黄金姫様、清照姫様の御一行では御座いませぬか。イルナの都はバラモン教の教を以て民を治むる國で御座いますれば、三五教の貴女様をお迎へ申すと申上げては、怪しく思召さるるで御座いませうが、決して汚き心で、お迎へに參つたのでは御座いませぬ。何卒お名乗り下さいませぬか」

黄金「ホー、其方はイルナの國の右守司の館に仕ふるユーフテス殿か、それは御苦勞。お察しの通り、私は黄金姫、清照姫の母娘で御座います。王様の御身邊は、どうで御座いますかな」

「ハイ、有難う、唯今の處では先づ御無事で御座いますが、何時大風一過、有名なるイルナ城も破壊するかも分らない危機に瀕して居ります。實にイルナの都は暗雲低迷、豪雨臻らむとして、先づ其窓を鎖すべき眞人が御座いませぬので、王

様は申すも更なり、忠義にはやる眞人等は夜も碌々に寝られず、心を痛めて居ります。右守司の放つた探偵は縦横無盡に横行闊歩し、大きな聲で物も碌に云へないといふ有様で御座います。何卒御推量下さいまして、貴女の神力によつてイルナの國の危難をお救ひ下さいませ」

「反間苦肉の策を弄し、大それた野望を遂げむとする悪人輩の巢窟なれば、うつかり高い聲で物を言ふ譯にも往きませぬ。此處は山の頂なれども、矢張悪神の靈は吾等一行を遠く巻いて居りますれば、込み入つた事は申されませぬ。何事も私の胸にあれば御安心なさいませ」

清照姫はしとやかに、

「貴方がユーフテスさまでムいましたか。御苦勞でしたなア、これから都まではまだ餘程の道程がありますか」

「ハイ、もはや十里足らずで御座りますれば、些しく急ぎますれば、今晚の四つ時までに到着出来るでせう。丁度夜中に御入城下さる方が安全でムいませう」

斯く話す處へ「オーイ オーイ」と坂の下から呼ばはりながら登り来る五人の

騎馬隊がある。三人は何事ならむと訝りながら、峠の傍の石に腰打ちかけ、くだらぬ世間話を態と交換して居た。ユーフテスは節面白く唄ひながら踊つて居る。

高い山から谷の底見れば 【かぼちや】や茄子の花盛り

とは云ふもののこりや嘘ぢや 今は紅葉の秋の末

冬の境となり果てて 木々の梢はバラバラと

散り敷く木の葉は雨のごと 高照山の紅葉も

衣を脱ぎて丸裸體 老木も若木もぶるぶると

慄ひ戦く哀れさよ 照山峠と云ふけれど

木の葉は雨に叩かれて 一つも残らず眞裸體

照山峠は忽ちに なきやま峠となりました

ドッコイドッコイドッコイシヨ

と唄つて居る。其處へ五人の騎馬隊が登つて来て三人を眼下に見下しながら、

「其方は何者なるか」

と大喝すると、ユーフテスは態と空呆惚けて手を耳にあてがひ首を傾け、

「ヘイ何と仰せられますか。此下り坂は酷いかとお尋ねですか。それはそれは隨

分きつい坂でムいますよ」

騎士「その方は察する所聾と見える。エ、仕方がない。それなる女に尋ねるが、

今此處へ妙齡の美人と一人の下男が通らなかつたか」

黄金姫は態と阿呆げた顔をして、

「ハイ、此峠の少し手前で何とも云へぬ美しい女が三人、男が一人に出會ひまし

たが、私を見るなり、あゝ汚い乞食だと罵りながら此坂を一目散に登つて往きま

した。何程落魄れた乞食だつて矢張同じ人間ですもの、そんなに輕蔑したものだ

やありませぬなア」

「ナニ女が三人、男が一人とは合點が行かぬ。確に女一人、男一人通つた筈だ。

嘘を申して居るのではないか」

「嘘と思ふなら勝手に思はつしやい。此婆の目には確に女が三人、男が一人だ。

併も素敵な別嬪だつた。一體お前は何處から何處に行かしゃるのだ。大變景氣のよい駒に乗つて、あのまあ強さうな事わいのう

「あのお母さま、今往つた綺麗な女の方は、ヤスだとかダラだとか云つていらつしやつたやうですな」

「何、ヤスと云つて居たか、そりや確にヤスダラ姫に相違あるまい。踪跡を暗ますために、何處かで乞食女でも雇つて來よつたのだなア。ヤア女共、よう云つて呉れた。サア皆の者、一鞭あてて下らうではないか、シヤール様に、これで申譯が立つと云ふものだ」

と下り坂を馬に跨つたまま進まうとする。ユーフテスは、

「あゝもしもし、こんな下り坂を馬に乗つて通らうものなら、それこそ忽ちですぞ。命の惜しくないものは乗つて往かつしやい」

「何これしきの急坂が苦になるか、騎馬の達人の顔揃ひだ。下り坂になつて馬を下りるやうで、どうして此使命が果されるか、サア往かう」

と云ひながら手綱を引き締め、ハイ ハイ ハイと矢聲をあびせながら下り往く。

「お母さま、神様は都合よくして下さいますなア、もう少しの事でヤスダラ姫様は彼等一行に捕へられなさる處で△いました。マアお仕合せのお方ですこと」

「ア、さうだなア、これだから神様の御神力は尊くて忘れられぬのだよ」

ユーフテス「ヤスダラ姫様にお會ひになりましたか、どうして姫様がこんな處へお出になつたのでせう。テルマン國のシヤールと云ふ富豪の家に嫁いで居られますのだから、お歸りになるなら澤山のお供がついて居なければならぬ筈、何か變事でも起つたのでは△りますまいか」

黄金「何れこれには譯のあることです。併し乍ら高照山の岩窟に御案内をして置きましたから、狼が守つて居ます故、御心配は要りませんまい」

「何と仰有います。人々の恐れて寄りつかない高照山の狼の巢窟にヤスダラ姫様を御案内なさるとは約り殺しにおやりなさつたのですか」

「オホ、々、苟くも人を助くる宣傳使の身として、そんな事があつて堪りますか。狼だつて誠をもつて向へば至極柔順なもの、私にも、かうして居るもの、一つ手を叩けば五十や百の狼はすぐ此處へ現はれて來ますからなア。オホ、々、」

ユーフテスは顔色をサツと變へ、足をワナワナさせながら、

「ナ、何と仰有います、貴女は狼をお使ひ遊ばすのですか」

「オホ、大層慄うて居りますな。私は狼婆と狼娘の一行だから、お前も此

世が厭になつて死にたいと思はしやつたら、ちつとも心配はない、狼に喰はして

上げる程に喜びなさいよ」

と態と作り聲をして憎さげに云つて見せる。

「オホ、お母さまとした事が、これ程臆病な人をつかまへて威嚇すものぢ

やありませぬよ、貴女も餘程腹が悪うなりましたなア」

「實は今通つた騎士共が此谷口で吾々三人の行路を要してキット待つて居るから、

其時手を打つて百匹許り狼を呼びあつめ追つ拂つてやる積りだ。其時このユーフ

テスさまが、腰でも抜かしては大變だから、今の中にビツクリの修業をさして居

るのだ。これこれユーフテス様、何がそれ程恐いのぢや、お前様は王様のために

は不惜身命の活動をするとか何時も云つて居るだらう。命の惜しくないものが何故

そんなに慄ふのだらう。不惜身命もあまり當にはなりませんぞや。口ではどんな

甘い事も云へますが、イザ鎌倉となると皆逃腰になるのだから困つたものだよ
君のため、世のために命を捨つるのなら捨て甲斐があります、狼などに、バリやられては、それこそ犬死、いや狼死ですからたまりませぬわ。同じ事なら君のため、世のため、人間の手にかかつて死ぬ方が何程幸福だか分りませぬかなア

私も人間だから、それなら御注文通り、一つ殺して見て上げませうかな。それならお前も得心だらう。オホ、

ア、ア、イルナの都の助け神さまかと思へば、何だ狼婆アさまだつたのか。エ、曲津の神に騙されたか、残念だ。もう此上は破れかぶれ、窮鼠却て猫を食むの譬の通り、此ユーフテスがいまはの際の死物狂ひの手竝を見て置けよ

と短剣をスラリと引き抜き黄金姫に向つて突いてかかる。忽ち後の叢よりオーン、オーンと狼の唸る聲しきりに聞え来る。ユーフテスは短刀をパタリと地に落とし、慄ひ戦き其場にバタリと倒れて了つた。

黄金わうごん 君きみのため道みちのためなら命いのちまで

捨すつると云いひし人ひとぞをかしき。

狼おほかみの嘯うそがく聲こゑに驚おどろきて

腰こしを抜ぬかせしやさ男をとこもあり。

口くちばかりめでたき事ことを云いひながら

まさかの時ときに肝きもをつぶしつ。

照山てるやまの峠たうげに會あひし二人ふたり連れを

狼おほかみづか使つかひと聞きき驚おどろくも。

ユーフテスの神かみの司つかさよ村肝むらきもの

心こころを強つよめ起おき上あがりませ

清照きよてる姫ひめは、

吾母わがはははユーフテス司つかさに打うち向むかひ

醜しこの言靈ことたま放はなちたまひぬ。

さらながらユーフテス司つかさ聞きし召めせ

汝なれが身魂みたまの御試みためしなれば。

この先さきに醜しこの司つかさがかくれ居ゐて

吾等われら三人みたりを捕とらへむと待まつも。

其時そのときに汝なれが命みことは驚おどろきて

迷まよはせまじと母ははの計はからひ。

必かならずも悪あしくな思おもひたまふまじ

汝なれが身魂みたま鍛きたえむと思おもへばこそ。

惟かむながら神かみに仕つかへし吾われなれば

いかでか人ひとの命いのちとるべき。

世よの人ひとを普あまねく救すくふ宣傳使せんでんし

汝なれに限りかぎて救すくはであるべき』

ユーフテスは二人の歌を聞いてやつと安心し、フナフナ腰にウンと力を入れ杖を力に立ち上り、

肝玉がどつかの國へ宿替し

今は藻抜の殻となりぬる。

腰抜かし肝玉とられユーフテスは

どうして道を歩み往かむか。

これ程に恐いお方と知つたなら

遙々迎ひに来るぢやなかつたに。

逃げようとあせれど脛腰立たぬ身の

詮術さへもなき涙かな

黄金姫はユーフテスの腰を二三回撫で擦り、天津祝詞を奏上し、天の數歌を二三回唱へ上げた。不思議やユーフテスの腰は俄に強くなり、足の慄ひもとまり、

今は神靈の感應によつて、百萬の敵も恐れざる程の勇猛心が臍下丹田からむらむらと湧いて来た。ユーフテスは初めて黄金姫の心を悟り、幾回となく頭を下げ兩手を合せ其親切を感謝し、元氣百倍し二人の後に従ひ、急坂を下りながら一足々々拍子を取り歌ひ出す。

右守の司のカールチン テーナの姫の喉元へ

甘く喰ひ込み一家老と 鰻登りに登つたる

カールチン司の家の子と 仕へまつりしユーフテス

朝な夕なに身を盡し 心を盡し主のため

勤むる折しも朝夕に 慕ひまつりしセーリス姫の

貴の命の來訪に 心は忽ち一變し

右守の司に表向き 忠實らしく仕へつつ

心はやつぱり裏表 セーリス姫の父上と

現はれ給ふ神司 左守の司のクーリンス

助けにやならぬと内々に 右守の司を伴つて

戀の犠牲と知りながら やつて来たのは「ウントコシヨ」

「ヤツトコドツコイ」恥かしい これこれ右守の司どの

うつかり油断をなさるなよ 此坂路を下るよに

どこに悪魔が潜むやら 何時クレリツと變るやら

人の心は分らない これを思へば世の中に

恐ろしものは女ぞや 女の魂一つにて

古今無雙の豪傑も 智者と聞えしユーフテスも

忽ち「ドツコイ」落城した ほんに恐ろし戀の道

とは云ふものの「ドツコイシヨ」 今となつては及ばない

改心するのが「ドツコイシヨ」 善いか悪いか「ウントコシヨ」

見當が取れなくなつて来た つらつら思ひ廻らせば

國の柱と現れませる セーラン王に刃向ふは

矢張り惡に違ひない さうすりや右守の神司

背いた處で「ドツコイシヨ」
バラモン神の神罰が

俺等に當る筈がない
さう考へりや安心だ

これこれもうし二人様
足許氣をつけなさいませ

照山峠は國中で
最も峻しい坂道だ

獅子さへ越さぬ難所ぞと
世に聞えたる「ドツコイシヨ」

行くに行かれぬ困り場所
道の案内知らずして

偉そに馬腹に鞭をうち
テルマン國よりやつて來た

五人の騎士は今頃は
馬諸共に千仞の

谷間に「ドツコイ」轉落し
頭を突き腕を折り

ウンウンうめいて居るだらう
思へば思へば氣の毒ぢや

バラモン教の神様よ
彼等に罪はありませぬ

此先吾等に「ドツコイシヨ」
敵對ひ來る其時は

助けてやつて下さるな
私が些つと困るから

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」
今行つた騎士の五人連れ

黄金姫のお言葉に

此山口に身をかくし

吾等を待つてゐると聞く 「ウントコドツコイ」 猪口才な

そのよな事を致したら 神力受けたユーフテス

生言靈を發射して 一人も残らず打ちきため

根底の國の旅立を 「ウントコドツコイ」 さしてやる

もしも敵對せぬならば 助けてやつて下しやんせ

梵天帝釋自在天 オツトドツコイ國治立の

神の命の御前に 慎み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ』

と歌ひながら母娘の後に従ひ、漸くにして照山峠を南に下りついた。五人の騎士は黄金姫の豫言の如く馬の頭を立て直し、やや廣き谷間に三人を待ち伏せ、弓を満月の如く絞り、矢を番へ、今や遅しと待つて居る。黄金姫は宣傳歌を歌ひながら、つかつかと騎士の傍近く進み寄つた刹那、忽ち聞ゆる狼群の唸り聲、如何は

しけむ五人の騎士は弓を満月の如く引き絞つたまま、身體強直しデクの棒の如くなつて居る。斯かる處へ、チームスやレーブ、カルの三人は駒に跨り、三頭の副馬を従へて蹄の音夏々と進み來る勇ましさ。黄金姫は、三人の引き連れ來りし駒に跨り、清照姫と共に五人轡を竝べ、勢込んでイルナの都のセーラン王が館をさして驅り往く。闇の帳はおろされ、入城には最も適當の刻限である。あゝ黄金姫一行の今後の活動は如何に開展するだらうか。

因に取り残されたユーフテスは黄金姫の囁きによつて五人の騎士に鎮魂を施し、元の如く身體自由を得せしめ、表面右守司の從臣なるを幸ひ、五人の騎士と共に右守の館をさして一目散に歸り行く。ユーフテスの今後の活動も亦一つの見物であらう。

(大正一一・一一・一一 舊九・二三 加藤明子録)

第三篇 北光神助

第一三章 夜の駒（一一一七）

イルナの都、セーラン王の館の奥の間には、王を始め黄金姫、清照姫、チームス、レーブ、カルの六人、上下の列を正し、對坐しながら、ひそびそ話が始まつてゐる。

王「黄金姫様、遠方の所夜中にも拘らず、よくお越し下さいました。これで私も安心致します。貴女は鬼熊別様の奥様蜈蚣姫様、小絲姫様でいますなア」
「ハイ、恥しながら運命の綱にひかれて、とうとう夫と別れ、神様の爲に三五教の宣傳使になりました。世の中は思ふ様にゆかないものでいます」
「左様でいますなア、私も夫婦の道に就いて、非常に悲惨な境遇に陥つて居ります。これでも何時か又神様の御恵に依つて、思ふ様に身魂の會うたもの同士添

ふ事が出来ませうかなア。貴女様は最早鬼熊別様と仲よく元の夫婦となつて、神界にお仕へ遊ばすことが出来ませう。私は到底望みがありますまい」

「親子夫婦が一緒に神界に仕へる位、結構な事はありませんが、私の夫は御存じの通り、バラモン教の柱石、私始め娘は三五教の宣傳使、何程神様は一つだと申しても、むつかしい仲でムいます」

「決して御心配なさいませぬ。鬼熊別様は、キット貴女のお説に御賛成遊ばすでムいませう。私の今日の身の上は實に言ふに言はれぬ境遇に陥つて居ります。許嫁のヤスタラ姫は奸臣の爲に卻けられ、心に合はぬ妻を押し付けられ、一日として楽しく暮した事はありません。其上奸者佞人跋扈し、私の身邊は實に危急存亡の場合に陥つて居ります。就いては貴女様をお迎へ申上げ、此危急を救うて頂きたいと存じまして、北光の神様の夢のお告げに依つて、數日前より貴女様の此方へお出ましになるのをばお捜し申して居りました。よくマア来て下さいました。今後は貴女のお指圖に従ひ身を處する考へですから、何分宜しく御願ひ致します」

「貴方は三五の教を信じますか」

「ハイ、別に信ずるといふ譯ではムいませぬが、大自在天様も世界の創造主、國治立尊様も矢張り世界の創造主、名は變れども元は同じ神様だと信じて居ります」

「國治立尊様は本當の此世の御先祖様、盤古神王や自在天様は人類の祖先天足彦、胞場姫の身魂から發生した大蛇や惡狐惡鬼の邪靈の憑依した神様で、言はば其祖先を人間に出して居る方ですから、非常な相違があります。神から現はれた神と、人から現はれた神とは、そこに區別がなければなりませんよ」

「あゝさうでムいますかなア。私は三五教の奉齋主神たる國治立大神様も、盤古神王様も、大自在天様も同じ神様で、名稱が違ふだけだと聞いて居ります。私も固くそれを信じて居りましたが、さう承はれば一つ考へねばなりません。チヨツト貴女様母娘に見て頂きたいものがムりますから、どうぞ私の籠り場所へお越し下さいませ。妻でも左守の司でも誰一人入れたことのない神聖な居間でムいます。チームスよ、レーブ、カルと共にここに暫く待つてゐてくれ」

チームスは、

「ハイ畏まりました」

とさし俯むく。王は母娘を伴なひ、籠りの室へ進み行く。行つて見れば、可なり
廣い室が二間竝んでゐる。そこには立派に齋壇が設けられ、いろいろの面白き骨
董品などが、陳列されてあつた。床の間の簾を王はクリクリと捲上げ、手を拍ち、
祝詞を奏上し始めた。母娘も同じく頭を下げ、小聲に祝詞を奏上し、終つて齋壇
をよくよく見れば、一幅の掛軸が床の間の正面にかけられ、神酒、御饌、御水等
がキチンと供へられてある。これは常に王が潔齋して神慮を伺ふ祕密室であつた。
掛物の神號をよく見れば、天一神王國治立尊……と正面に大字にて記し、其眞
下に教主神素盞鳴尊と記し、中央の兩側に盤古神王鹽長彦命、常世神王大國彦命
と王の直筆で記されてあつた。黄金姫母娘は此幅に目をとめ、何とも言へぬ爽快
さと驚きの念にうたれ、呆然として其神號を眺めてゐる。

『私の信仰は此通りでゝいます。お分りになりましたか』

『思ひもよらぬ御神徳を頂きました。これではイルナの城も大丈夫、御安心なさ
いませ。併し乍ら此世の御先祖様でも時世時節には對抗し難く、一度は常世彦、
常世姫一派の爲に、根底の國までお出でなされた位だから、決して油断は出来ま

せぬ。貴方の信仰が大黒主の方へでも分らうものなら大變だから、今暫くは發表せないが宜しいぞや」

「ハイ、左守の司にさへも此室は覗かせた事はありません。誰も知る者はないのですから、大丈夫でムいます」

「假令此室を覗かぬとも、貴方の信仰が斯うだとすば、何時とはなしに、貴方の聲音に現はれ、皮膚に現はれ、遂には「かん」付かれるものです。如何しても心の色は包む事は出来ませぬから」

「貴女様が此處へお越し下さつた以上は、餘り心配する事も要りません。一寸これを御覽下さいませ」

と次の間に二人を導く。見ればここにも一寸した床の間があつて、二幅の繪像が掲げられてあつた。黄金姫、清照姫はアツとばかり驚かざるを得なかつた。それは日頃心にかけてある夫鬼熊別の肖像と一幅は神素盞鳴尊の御肖像であつた。清照姫は思はず、

「あゝこれはお父様、大神様」

と言はうとするを、黄金姫は口に手を當て、

「コレコレ清照姫殿、何を仰有る。これはキット大黒主様と自在天様の繪姿だ。

そんな大きな聲を出すと、悪魔の耳に這入つては大變ですよ」

「父上によう似た御肖像でムいますなア。ホ、ホ、」

「私は今までバラモン神を信仰して此國を治めて居りましたが、或夜の夢に神素

のをおほかみさま、鬼熊別命様と二柱現はれ給ひ、いろいろ雑多の有難き教訓を垂れさ

せ下さいまして、それより神命に従ひ、私一人信仰を勵み、時の到るを待つて居

りました。私の夢に現はれたお姿を思ひ出して、自ら筆を執り、ソツとお給仕を

致して居ります。鬼熊別様は神界にては神素蓋鳴尊様のお脇立になつてゐられま

す。キット其肉體も三五のお道へお入り遊ばすでせう。只時間の問題のみが残つ

てゐるのだと感じて居ります」

黄金姫母娘は物をも言はず感に打たれ、嬉し涙にかきくれてゐる。セーラン王

は、

☐ 天地あめつちの神かみの恵めぐみを目まのあたり

拜をがみし今日けふぞ尊たふとかりけり。

素すさの盞をの鳴かみ神かみの尊みことに服まつろひて

教をしへを守まもる鬼熊おにくま別わの神かみ司みよ。

鬼熊おにくま別わ神かみの命みことは今いま暫しばし

ハルナみやこの都みやこに忍しのびますらむ。

時じ機き來くればやがて表おもてに現あらはれて

三あ五な教なの司つかさとなりまさむ。

あゝ嬉うれし黄金わうごん姫ひめや清照きよてる姫ひめ

神かみの司つかさに會あひし今宵こよひは☐

黄金わうごん ☐ 來きて見みれば思おもひもよらぬ王きみの居間ゐまに

わが背せの君きみの姿すがた拜をがみし。

バラモンの教をしへの御子みこと思おもひしに
摩訶不思議まかふしぎなる今宵こよひなりけり
□

清照きよてる 千早振ちはやぶる神かみの光ひかりの強つよければ

父ちちの命みことの心照こころてりつつ

吾父わがちちは最早もはやくにはるたちのかみの神かみの

教をしへの御子みことなりましにけむ。

セーランの王きみの命みことよ今いま暫しばし

時ときを待まちませ神かみのまにまに。

清照きよてる姫教ひめをしへの司つかさも今宵こよひこそ

積つもる思おもひの晴はれ渡わたりける
□

黄金わうごん 『北光きたてるの神かみの命みことのかくれませす

高照山たかてるやまにとく進すすみませ。

高照たかてるの山やまは世人よびとの恐おそろしく

噂うはさすれども貴うづの眞ま秀ほ良ら場ば。

百千々ももちぢの狼おほかみの群むれ従したがへて

北光きたてるの神かみは王きみを待まちつつ。

いざさらばテームス、レーブ、カル三人みたり

後あとに従したがへとく出いでませよ 『

王わう 『黄金姫神わうごんひめかみの御言みことに従したがひて

とく立出たちいでむ高照山たかてるやまへ。

吾わが行ゆきし後のちの館やかたは汝命ながみこと

暫しばし止とどまり守まもり給たまははれ 『

清照きよてる 大神おほがみの稜威いづつの光ひかりに照てらされて

道みちも隈くまなく安やすく行ゆきませ。

母おやと娘こが心こころを協あはせ身みを盡つくし

入いる那なの城しろを暫しばし守まもらむ

王わう 鬼熊おにくま別わけ神かみの命みことの賜たまひてし

生いく玉たま章づさを汝なれに奉まつらむ。

心こころして披ひらき見み給たまへ鬼熊おにくま別わけ

神かみの命みことの眞ま心こころの色いろを

と言いひながら、鬼熊おにくま別わけより王わうに遣つかはしたる密書みつしよを黄金わうごん姫ひめに恭うやうやしく手渡てわたした。

黄金わうごん

姫ひめは手て早はやく封ふうじ目めを切きり、押披おしひらいて讀よみ下くだせば、左さの文面ぶんめんであつた。

鬼熊おにくま別わけよりセーラン王わうに密書みつしよを送おくる。

一、これの天地は天一神王大國治立尊の造り給ひし神國にして、決して大國彦、鹽長彦の神等の創造せし天地にあらず。又大黒主はバラモン教の大棟梁として兵馬の權を握り、大教主の假面を被り居らるれども、天は何時迄も斯かる虚偽を許し給はず、必ずや本然の誠に立ち返り、三五教を信従する時あるべし。それに付いては神素盞鳴大神の御攝理に依り、吾妻子近々の中に王が館に訪問すべければ、一切萬事を打明け、國家の爲に最善の努力をなさるべし。ハルナの都は今や軍隊の大部分は遠征の途に上り、守り最も少なくなり居れり。然るに王に仕ふる右守より王を廢立せむとの願書、大黒主の許に來り、大黒主は數千の騎士を近々差向くる事となりをれば、イルナ城は實に風前の燈火なるを以て、貴王は吾妻子と共に善後策を講じ、一時何れへか避難さるべし。鬼熊別はハルナの都に止まつて、大黒主を悔ひ改めしめ、其身魂をして天國淨土に救はむと朝夕努めつつあり。吾妻子に面會の日を期し、一刻の猶豫もなく、安全地帯へ一時身をかくさるべく呉々も注意致します。あゝ惟神靈幸倍坐世^四と記されてあつた。黄金姫、清照姫は久しぶりに鬼熊別の肉筆の手紙を見て、夫

に直接會ひし如く、父に面會せし如く、心勇み、感涙を落しながら、
黄金「あゝ之にて何もかも分りました。北光の神様が一時も早く貴方を狼の岩窟
へ誘ひ來れとの御命令も、此手紙の文面にて氷解しました。あゝ、何と神様はど
こまでも注意周到なお方だなア」

清照「お父様に直接お目にかかった様な心持が致します。神様、有難うムいます
と兩手を合せ、神素盞鳴尊の聖像に向つて、感謝の詞を捧げた。

黄金「サアかうなる上は、一刻も早く高照山へ夜の明けない中にお越し遊ばせ。

申上げたき事は山々あれど、今はさういふ餘裕もムいませぬ。サア早く早く
とせき立つれば王は、

「左様ならば、萬事宜しく願ひます」

と先に立ち、チームス等が控へてゐる居間に姿を現はした。王は母娘と共に表の
居間に立現はれ、チームスに打ち向ひ、

「チームス、御苦労だが、早く駒の用意をしてくれ。これから高照山へレーブ、
カルを伴ひ、出發致すから」

「ハイ承知致しました。併し乍ら黄金姫様の御命令に依り、馬の用意はチャンと整へておきました。何時なりともお供を致しませう」
「あゝそれは有難い。それなら、黄金姫様、清照姫様、あとを宜しく御願ひ致します」

黄金 「君ゆきて如何にけながくなるとても

われは館を守りて待たむ。

うら安く進み出でませ高照の

山の岩窟に神は待たせり。

三五の教司の北光の神は

君のいでまし待たせ給はむ」

王 「いざさらば黄金姫や清照姫

神の命よ惜しく別れむ

と歌ひながら、慌しく表に出で、裏門口より駒引き出し、暗の道を辿りて、高照山の岩窟指して一行四人は雲を霞と驅り行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 松村眞澄録)

第一四章 慈訓(一一一八)

狼守る高照山の岩窟には主客五人膝を交へて何事か話に耽つてゐる。北光の神は宣傳使の傍鍛冶の名人なれば、數多の精巧なる機械を閑暇ある毎に製造し、鑿、槌、鶴嘴、鋏等を造つて岩窟を穿ち、今や八咫の大廣間は幾つとなく穿たれ、難攻不落の金城鐵壁となつたのである。それに數百千の狼は北光の神の恩威に服し、恰も飼犬の如くよく其命を守り、且つ人語を解する様になつてゐた。岩窟の一

には天の目一つの神を上座に、其右側には竹野姫、少し下がってヤスダラ姫、龍雲、リーダーの順に湯をすすりながら神話に耽る。

龍雲「北光の神様、私も悪逆無道の悪魔に憑依され、サガレン王に對し不臣の罪を重ね、已に靈魂は根底の國へ投げ込まれる所で御座りましたが、貴神の御親切なる御教訓によつて、貪瞋癡の夢も覺め、漸く眞人間にして頂きました。一時勢に乗じ、サガレン王の後を襲うて權利を揮うた時の苦しさに比ぶれば、今日の氣樂さ樂しさは、天地の相違で御座ります。體主靈從の欲望にかられ、知らず知らずに身魂を地獄に落してゐるものは、決して龍雲ばかりでは御座りません。何とかして其迷ひを醒ませ、身魂を安樂にさせてやりたいもので御座りますワ」

北光「其方は月の國を巡回して來たのだから、最早天下の人情はよく分つただらう。随分世の中は憐れむべきものが多いだらうな」

「ハイ、仰せの通り何處の國へ参りましたも宗教争ひや名利の欲に搦まれて、互に鎬を削る慘状は、まるで地獄餓鬼畜生道其儘の出現で御座ります。丁度以前のセイロン島に於ける龍雲の雛形は到る所に散見せられます。併し乍ら不思議な事

には三五教の少しでも息のかかった地方は、極めて人心平穩、寡欲恬淡にして、上下相親しみ、小天國が築かれてゐるのを目撃致しまして、最も愉快に感じた事も御座ります。

其方が七千餘ヶ國を巡つた中、比較的治まり難い處は何處々々だと思ひましたか。

「ハイ、随分澤山で一夕申上げる譯には参りませぬ。併し乍ら第一にカルマタ國、第二にイルナの國などは今や大騷亂の勃發せむとする間際になつてゐる様で御座ります。カルマタ國は東北に地教山を控へ、地教山には三五教の神柱が誠の道を守つて附近の人民を教養して居られる。そこへウラル教の常暗彦が現はれて本據を構へ、間隙あれば地教山を併呑せむと企んでゐる。此頃は又ウラル教の勢ひがあまり盛なと云うて、ハルナの都の大黒主が、大足別將軍に數多の軍隊を引率せしめ攻め來るとの飛報頻りに來り、人心恟々たる有様で御座ります。次にはイルナの國のセーラン王に對する嫉視反目に月に加はり、正義派と不正義派とが斷えず暗闘をつづけ、今にも右守の司は大黒主の威勢を頼みイルナの王を放逐し、

みづか
自らとつて代らむとの計畫中だとの城下の人々のとりどりの噂、何時イルナの都
は戦塵の巷と變るやも知れぬとの事で御座ります。何とかして此慘状を未發に防
ぎたいと存じ、龍雲も都下を徘徊致して宣傳歌を歌ひ廻りました所、右守の力
ルチンが部下に壓迫され、己に生命までとられむとせし所、不思議にも何處とも
なく狼の群、白晝に現はれ來り、咆哮怒號して敵を追散らし、煙の如く姿を隠し
ました。その機を窺ひ一目散に都を逃げ出し、照山峠を越えてスタスタ歸り來る
途中、蓮川の邊に於てヤスダラ姫様主従に出會ひ、お二人様の危難を救ひ、後に
なり前になり、見えつ隠れつ照山峠の麓まで送つて來ました所、三五教の黄金姫
様母娘に出會ひ、一時も早く北光彦の神様の御命令だから高照山へ參れとお言
葉、取るものも取りあへず姫様のお供をして此處迄參つたもので御座ります。實
に危険至極の世の中となつて參りました
成る程、それは御苦勞。此館は猛獸の眷族數多守り居れば、天下第一の安全地
帯だ。ヤスダラ姫殿も御安心なされませ
ハイ有難う御座ります。女の道を踏み外した妾をお咎めもなくお助け下さいま

して何とも恐れ多くて申上げやうも御座りませぬ。何卒宜しく今後の御教養を、偏にお願ひ申します」

「随分ヤスダラ姫様、貴女も悪人共の欲望の犠牲となつて苦しみましたな。身魂の合はぬ夫を持たされ、嘸日々不愉快をお感じになつたでせう。御心中お察し申します」

と情ある言葉に、ヤスダラ姫はヤツと安心し、嬉し涙を袖に拭ひながら、
「思ひもよらぬ御親切な御言葉、有難う御座ります。何を隠しませう、妾はイルナの都の左守クーリンスの長女と生れ、セーラン王様の許嫁で御座りました所が、ハルナの都の大黒主様に諂ひ諛ふ右守カールチンの爲めに遮られ、種々と難癖をつけられた擧句、テルマン國の毘舍が妻とせられ、今日まで面白からぬ月日を送つて來ました。今貴神のお言葉の通り身魂が合はないのか存じませぬが、夫のシヤールに對して少しも愛の念が起らず、夫も亦妾に對して至極冷淡、路傍相會ふ人の如く、夫婦としての暖味は夢にも味はつた事は御座りませぬ。妻として夫人に對して愛を捧げるが道なれども、如何したものが其心が湧いて來ませぬ。勿體な

い事ながら、明けても暮れても親の許嫁の夫セーラン王様の事が目にちらつき、お聲が耳に響き、王様の事のみ夢現に戀ひ慕ひ心に罪を重ねて居りました。所へ右守の妻テーナ姫が夫の館に右守の使者として現はれ來り、妾に對し無理難題を吹きかけ、夫のシャルを威喝して遂に獄舎を造り妾を投げ込み、非常な虐待を致すので御座ります。妾は最早運命つきたりと覺悟を極め、涙にくるる折しも、雨風烈しき夜半、これなる忠僕リーダーが獄舎を打破り、妾を背負ひ暗に紛れて此處まで漸う連れて來てくれました。之も全く神様のお蔭と龍雲殿の御保護で御座ります。最早此世に望みは御座りませぬが、せめて一度父のクーリンスや妹のセーリス姫に面會したう御座ります。又成る事ならば一目なりとも王様のお姿を拜みたく存じます。それさへ出來れば最早死んでも怨みは御座りませぬ」と身の上話にホロリと涙を落し差俯むく。

「それでスツカリ事情は分りました。やがて親兄妹は申すに及ばず、セーラン王様に會はせませう。さうして屹度身魂同士の夫婦だから肉體の上でも夫婦となつて、イルナの都の花と謳はれ遊ばす様に守つてあげませう。此手筈は已に此方に

於て神示の下に行はれつつありますから御安心なさいませ」

「左様な有難い事になりませうかな。そんな事が出来ますならば、妾を初め親兄妹はどれほど喜ぶか知れませぬ。王様も嘸御満足を遊ばすで御座りませう」

竹野「ヤスダラ姫様、貴女もこれから神様のために餘程御苦勞を遊ばさねばなりませぬぞや。妾も随分若い時は兩親に別れ、淋しい月日を送りましたが、風の便

りに父の命は高砂島に在しますと聞き、姉妹三人が色々と艱難苦勞を致しまして、珍の都を立ち出でてエデンの川邊へ進み行く折しも、悪者共に取巻かれ、困りき

つて居る所へ、月照彦様の御化身照彦と云ふ館の僕が追つ掛け來り危難を救ひ呉れられました。それより父の在します珍の都へ、主従四人訪ねて參り、ヤレ嬉し

やと思うたのも束の間、木花姫命様の化身なる珍山彦の神に導かれ戀ひしき父の都を後に、テルの國にて照彦に別れ、それより船に乗つてアタルの港へ上陸し、

ヒル、カルの國々を姉妹三人離れ離れに宣傳を致し、ウラル教の魔神鷹依別の目付に追ひ捲られ、情ある春山彦の館に隠され漸く危難を免れ、黄泉比良坂の戦ひ

に参加致しましたが、随分種々の神様のお試しに會ひました。それより又アジャ

に渡り所々方々と宣傳に廻るうち、神素盞鳴大神様のお媒酌によつてコーカス山に於て北光の神様と結婚式を挙げましたが、それから長い間夫婦同居した事もなく、お道の爲め活動をつづけ、此頃漸く夫婦が一緒に斯うして御用を勤める様になりしました。最早夫も年が寄り、妾もこんな婆になつて了ひました。オホ、と涙をかくして笑ひに紛らす。

ヤスダラ姫は竹野姫の話に感じ、且つ自分の苦勞の足らぬのを恥かしく顔赤らめてオゾオゾしながら、

「左様でムりましたか、人間と云ふものは中々容易な事で一生を送る事は出来ませぬな。妾等は貴女の事を思へばお話になりませぬ。少しの忍耐もなく夫の牢獄を脱け出し、ノメノメと親兄妹や思ふ夫を慕うて歸つて来た心のきたなさ、恥かしさ、實に汗顔の至りでムります」

「ヤスダラ姫様、御心配なさいませぬ。貴女はこれから神界のため御活動遊ばすのだ。人の一生は重荷を負うて険しい山坂を登るやうなものです。何時険呑な目に遭ふやら、倒れるやら分りませぬ。そこを神様の御神力で助けられ、波風荒き

世の中を安々と渡るのですよ。さうして自分の身を守りながら神様の貴の御子たる天下の萬民に誠の道を教へ諭して、天國に救ひ、靈肉ともに安心立命を與へるのが神より選ばれたる貴女等の任務だから、如何なる艱難辛苦に遭ふとも決して落膽したり怨んだりしてはなりません。何事も此世の中は人間の自由には木の葉一枚だつてなるものではない。みんな神の御心のまにまに操縦されて居るのだから、如何なる事が出来ようとも惟神に任し、人間は人間としての最善の努力を捧ぐれば宜いのです。此龍雲さまだつて始めは随分蟲のよい考へを起し得意の時代もあつたが、忽ち夢は覺めて千仞の谷間へ身を落した様に見すばらしい乞食とまでなり果て、此處に翻然として天地の誠を覺り、諸國行脚をなし、今は完全な神司となり、御神力を身に備ふるやうにおなりなされたのですから、人は如何しても苦勞を致さねば誠の神柱にはなる事は出来ませぬ。此北光の神が都矣刈の太刀を鍛ふるにも、鐵や鋼を烈火の中へ投げ入れ、金床の上に置いて、金槌を以て幾度となく鍊り鍛へ叩き伸し、遂には光芒陸離たる名刀と鍛へる様なもので、人間も神様の鍛鍊を経なくては駄目です。一つでも多く叩かれた劍は切れ味もよく

句も美はしき様なもので、人間も十分に叩かれ苦しめられ、水火の中を潜つて來ねば駄目です。これから此北光の神が貴女の戀ふるセーラン王に面會させますが、決して安心をしてはなりませんぞ。吾々夫婦の如く互に手配りをして誠の道に盡さねばなりません。いつ迄も若い身を以て天下擾亂の此場合、夫婦が安樂に情味を樂しむと云ふ事は出来ませぬ。生者必滅會者定離、別離の苦しみは人間は愚か、萬物に至るまで免れ難き所、此點を十分に御承知を願つておかねばなりません。やがてセーラン王は二三の忠誠なる僕に守られ、此處にお出でになります。『ハイ、有難うムります。何から何まで御親切の御教訓、屹度肝に銘じて忘却致しませぬ。否何事も神様の仰せを遵奉致しまして、天晴れ神柱と鍛へて頂く覺悟でムります』

竹野「ヤスダラ姫貴の命の言の葉を

聞くにつけても涙ぐまるる。

勇ましき汝が御言を聞きしより

竹野の姫の胸も輝く

ヤスダラ 有難し北光神や竹野姫

御言のままに道に仕へむ。

セーラン王貴の命の今此處に

來ますと聞きて胸轟きぬ。

相見の後の心に比ぶれば

今の吾こそ樂しかるらむ

北光 北光神の住家訪ねて。

北光神の住家訪ねて。

惟神神の御手に導かれ

妹背いもせの山やまの谷間たにまを行ゆきませせ」

龍雲りゅうん「打仰うちあふぎ空そら行ゆく雲くもを眺ながむれば

人ひとの行ゆく末すゑ思おもひやられつ。

高照たかてるの山やまに棲すまへる狼おほかみも

夫婦めをとの道みちは忘わすれざるらむ。

妻つまとなり夫をとことなるも天地あめつちの

神かみの結むすびし縁えにしなるらむ」

リーダー「はるばるとテルマン國こくを立出たちいでて

姫ひめを守まもりつ今いま此處ここにあり。

テルマンのシャールの館やかたを出いでし時とき

行末如何にと思ひなやみしよ。

かくばかり尊き神に會ひし上は

世に恐るべきものあらじとぞ思ふ。

惟神の御言を畏みて

世人の爲めに身をや盡さむ

斯く歌ひ終る時しも、俄に聞ゆる蹄の音カツカツと岩窟内まで響き来る。

北光「ヤア、あの足音はセーラン王の一行ならむ。龍雲殿、お出迎へ頼み入る」

ヤスダラ「えッ！」

龍雲「畏まりました」

と身を起し岩窟の入口指して一目散にかけり行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 北村隆光録)

第一五章 難問題（一一一九）

セーラン王は、チームス、レーブ、カルの三人を従へ蹄の音も勇ましく、漸くにして北光の神の岩窟の館に着いた。龍雲は岩窟の口まで出で迎へ、

「貴方はセーラン王様でムいますか、お待ち受け致して居りました。一寸暫くお待ち下さいませ、主人に申上げて來ますから」

「何分宜しく頼み入る、吾々は黄金姫、清照姫様の指揮に従ひ、暗夜を幸ひ、イルナの城より忍んで参つたものでムる。どうぞ北光彦の神様に宜敷くお取りなしを願ひます」

「ハイ承知致しました。暫くお待ちを願ひます」

「と其儘踵をかへし奥深く進み入り、北光の神の前に手を支へ、

「正しくセーラン王様のお出で御座いました。どちらへお通し申しませうか」

「ヤスダラ姫の顔色は嬉しさと恥かしさと驚きとにサツと變つた。北光の神は欣然として、

「只今御面會致すから、第三號室に御案内申して置け。さうしてお湯でも差上げて、暫くお待ちを願つて置いて呉れ。吾は是より神殿に参り、神様にお禮を申上げて来る。サア竹野姫、ヤスダラ姫殿、奥へ参りませう」
と先に立ち神前の間に進み行く。龍雲は表へさしてセーラン王を迎ふべく驅け出す。リーダーは後に兩手を組んで獨り言、

「何と怪つ體な事があるものだなア。狼の山へ怖々やつて来て見れば、澤山の狼は犬のやうに柔順しい。そこへ北光の神様のやうな、一つ目のお爺さまと、花を欺くやうな奥様、妙なコントラストだ。ヤスダラ姫様のお供をして此處へやつて来たと思へば、セーラン王様がお出でなさるとは何とした不思議の事だらう。定めし姫様も王様のお顔を御覽になつたら、ビックリと喜びとで妙な顔をなさるだらう……（淨瑠璃口調）生者必滅會者定離、浮世の常とは云ひながら、親と親との許嫁、怪しき雲に隔てられ、國と都に引き分れ、朝な夕なに君の御身の上、案じ暮して居りました。今日は如何なる吉日ぞ。焦れ焦れた其人に、所もあらうに狼の住む高照山の岩窟でお目に懸らうとは、神ならぬ身の知るよしもなく、泣

いてばかり居りました。思へば思へば有難や、尊き神の引き合せ、天の岩戸も開けたやうな、私や心になりました。嬉しいわいな、なつかしいわいな……と人目も恥ぢず縋りつき、互に手に手を取り交し、泣き叫ぶこそ可憐らしき。チヤン、チヤン、チヤン……と云ふ場合だ。俺も一度こんなローマンスを味はつて見たいものだ。青春の血に燃ゆる壯者と美人、どんなに嬉しからうぞ。互に焦れ慕うた男と女が思はぬ處で遇ふのも、これが嬉しうなうて何とせうぞいのう……アハ、ハ、ハ、ハ、目出度い目出度い、お目出度い。北光の神様も苦勞人丈あつて、中々粹が利いて居るわい。こんな事の分つた宣傳使にお仕へするのなら、俺だつてどんな苦勞だつて厭ひはしない。岩より固い千代の固めを、千引の岩の岩窟の中で、北光の神様の目ぢやないが、確り「カタメ」と云ふ洒落だな、ウフ、ハ、ハ、ハ、斯かる所へセーラン王一行を三號室に導き置き、北光の神に報告すべく走つて来た龍雲は、リーダーの唯一人面白さうに笑うて居るのを見て、

「おいリーダー、何を笑つて居るのだ。お客さまが見えたのだよ。此館は御夫婦二人きりでお手が足らぬのだから、早くお客さまのお湯でも汲んでお世話をしな

いか、氣の利かぬ男だなア

「私だつて今来たばかりだし、お客さまぢやありませんか。客の分際として、そんな勝手な事が出来ますか。北光の神様のお許しさへあれば、お湯も汲みませう、どんな御用も致します」

「エ、何と氣の利かぬ男だなア」

「餘り氣が利いたり融通が利くと、【シロ】の島の神地の都で失敗なさつたやうな事が出来ますからなア。まあチツクリと落着きなさい。大鳥は翼を急がぬ」と云ひまして、度量の大きいものは、さう小さい事に【コセ】つきませぬからなア。エへ、へ、へ」

「大男總身に智慧が廻り兼ねとか云つて、胴柄ばかり大きくつて、間に合はぬ男だなア。お前のやうなものは仁王さまにでもなつて門の入口に【シヤチコ】張つて居るのが適當だ」

「モシ龍雲さま、貴方に誠があるなら、不言實行ですよ。師匠を杖にするな、人を力にするな、とは三五教の教理だと、道々お説教をなさいましたなア。私はよ

く覺えて居りますよ」

「エ、仕方がない、それなら是から不言實行だ」

と第三號室に向つて走り行かうとするのを、リーダーは裾をグツと握り、

「モシモシ龍雲さま、不言實行だと今仰有つたが、それがもはや不言實行の原則

を破つて居られるではムいませぬか」

「エ、八釜しい、俺のは特別製の准不言實行だ」

と云ひながら袖振りきつてセーラン王の室に走り出で、恭しく兩手を支へて、

「セーラン王様、折角のお越し「えらう」お待たせ申しまして不都合でムいまし

た。併し乍ら、私もたつた今初めて参つたもの、まだ席も温かくなならない位でム

います。と云つても最早二三日は暮れましたが、此處の召使と云ふ譯でもなし、

貴方に一足お先に参つた珍客でムいますから、どうぞ悪しからず見直し聞直し下

さいませ」

「イヤ有難う、北光の神様はまだお越しになりませぬか」

「今お見えになるでせう。暫くお待ちを願ひます」

王わう 高たか照てるの嶮けしき山やまを登のぼり來きて

岩いは窟やの中なかに身みをやすめぬる。

北きた光てるの神かみの命みことに會あはむとて

神かみの隨まにまに々たつ訪たつね來こしはや

龍りゅう雲うん 今いましばし待またせたまはれ神かむづ司かさ

やがては此こ處こに北きた光てるの神かみ。

生いく身み魂たま清きよく直すくなる竹たけ野の姫ひめ

妻つまの命みことも共ともにいませり。

汝なが命みこと慕したひたまひし姫ひめ神がみに

會あはせたまはむ時ときは迫せまれり。

ヤスダラ姫ひめ貴うづの命みことは君きみを慕したひ

朝あさな夕ゆふなに祈いのりたまへる

王「摩訶不思議ヤスダラ姫が如何にして

これの岩窟に潛み居るにや」

龍雲「何事も神のまにまに人の身は

まもられて行く夢の世なるよ」

かく語り合ふ所へ、北光の神は衣服を着替へ威儀を正して入り來り、王に向ひ、
「私は北光彦でム。能くまア此岩窟に入らせられました。黄金姫、清照姫殿は
機嫌よくして居られますかなア」

「初めてお目にかかりました。貴方は三五教にて御名も高き北光の神様、一目其
お姿を拜しまして、誠の生神様にお目にかかつたやうな心に力づきました。何卒
今後の御教導をお願い致します。御存じの通りイルナの城は危急存亡の場合でム
りますれば、黄金姫様の御指圖に従ひ、卑怯未練とは承知しながら神命を奉じて

微行致して参りました」

とやや涙ぐみける。

「アハ、ハ、ハ、決して御心配遊ばすな。何事も神様の御經綸に任すより道はありませぬ。これから吾々は神策を施しますから、氣を落着けてゆつくりとなさつたがよろしからう。此處は御存じの通り狼の巢窟、如何なる英雄豪傑も、此岩窟ばかりは窺ふ事は出来ませぬ。御安心なさいませ。併し乍ら、貴方に一つお尋ねして置かなければならぬ事があります。それは餘の儀ではムらぬ、貴方にはサマリー姫と云ふお妃があるでせう、其妃は今後どうなさるお積りですか」

王は此言葉にハタとつまり、如何答へむと心を悩ませ、默然として暫しが間さし俯むいて居る。

「一旦妻と定つたサマリー姫を何處迄も連れて、共々に苦勞をなさるお考へでせうなア。萬一貴方の戀ひ慕ふ立派な女が此處に現はれたとすれば、貴方は自分の意志に従つて其女を妻に致しますか。但し氣に入らぬサマリー姫をどこ迄も愛して行きますか。それを聞かして頂きたい。北光の神にも少し考へがムるから」

王は如何は答へむかと、【とつおいつ】思案に暮れながら、漸くにして、

「ハイ何事も惟神に任せよう。心の曇つた吾々、どうしてよいか判断がつきませぬ。どうぞ貴方のお考へを承はりたう御座います」

と甘く言葉をそらし、北光の神に其解決をおつつけてしまった。

「オツホ、隅にもおけぬ王様だなア、かう北光が申せば御返答にお困りだらうと思つたが、反對にこちらへ大問題をおつかぶせられ、北光彦も聊か迷惑を致しました」

「何も彼も御存じの貴方の前で包み隠すも無駄でムいます。又私も心にもなき事を申し上げたくはありません。お叱りかは存じませぬが、實はサマリー姫はどう考へても厭で厭で仕方がありません。何かの策略があつて、右守の司が私の許嫁を追ひ出し、娘を無理に押しつけたのでムいますから、要するに愛のなき縁談でムいます。かかる虚偽的愛の夫婦は却て神様に對し濟まないやうな氣も致します。又一方より考へて見れば、今日の處サマリー姫は心の底から私に對して愛慕の念を起して居るやうでムいます。それ故に日夜心を痛め、どうしたらよいかと迷う

て居る次第でムいます。サマリー姫一人のためにイルナの城の興亡に關する問題
ですから、私も決し兼ねて居ります」

「何と氣の弱いお方だなア。なぜ男らしく、初めにポンと斷りを云はなかつたの
ですか。貴方はセーラン王の位地に戀々として、心にもなき結婚を承諾したので
せう。貴方には親の許した許嫁があつた筈、なぜ先約を履行なさらなかつたか。
それから第一間違つて居る。兩親の許した許嫁を無視して途中から變更するとい
ふ事は第一孝の道に缺けて居る。假令如何なる事情があらうとも父王様の命令を
遵守し、一身を賭してなぜ争はなかつたのですか」

「そのお言葉を聞いて今更の如く自分の薄志弱行を悔みます。私も何とかして天
則違反が知らねどもヤスダラ姫と夫婦となる事を得ば、たとへ王位を捨てても悔
ゆる處はムいませぬ」

「ウフ、フ、フ、とうとう本音を吹きましたな。それが偽りのなき貴方の眞心だ。
併しながら、其ヤスダラ姫様が、夫に一回なりとも交はりを結んで居られたなら
どうなされますか。それでも貴方は喜んで夫婦になるお考へですか。もしヤスダ

ラ姫ひめに對たいし貞節ていせつを守りまも、一回いつくわいの交まじはりもして居ゐなかつたとすれば兔とも角かく、どうでもかまはぬ、添そひさへすればよいと云いふお考かんがへなれば、貴方あなたはもはや人間にんげんではない、戀こひの奴隸どれいと云いふものですよ」

「ハイ、仰あふせの如ごとくヤスタラ姫ひめにして左様さやうな事ことがありとすれば私わたしは斷念だんねん致いたします。併しかし彼かれに限かぎつて左様さやうな事ことはあるまいと思おもひます」

「今いま貴方あなたに會あはせたいものがある。驚おどろかないやうにして下ください」

「それはヤスタラ姫ひめでムこまいますか。何なんとはなしにそのやうな氣分きぶんが浮うかんで參まゐりました」

「アハ、ハ、ハ、矢張やっばり蛇じゃの道みちは蛇へびだなア」

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 加藤明子録)

北光の神は竹野姫、龍雲、ティムス、リーダー等を引きつれ、氣を利かして一
間に引上げて了つた。後にセーラン王、ヤスダラ姫は暫し沈黙の幕をつづけてみ
た。ヤスダラ姫は心臓の鼓動を金剛力を出して鎮靜しながら、顔にパツと紅葉を
散らし、覺束な口調にて、

「セーラン王様、お久しうムいました。御壯健なお顔を拜し嬉しう存じます」
と纒に言つたきり、恥しさうに俯むいて顔をかくす。セーラン王は目をしばたた
きながら、

「貴女も随分辛い思ひをしたでせうなア。私もテルマンの國の空を眺めて、渡り
行く雁に思ひを送つたことは幾度か知れませぬ。私の眞心は貴女の精靈に通じた
でせうなア」

「ハイ、一夜さも王様の御夢を見ないことはありません。今日ここで貴方にお目
にかかるのは夢の様にムいます。夢を兩人が見て居るのではありますまいか。夢
なら夢で、どこまでも醒めない様にあつて欲しいものですワ」

「決して夢ではありません。現実でせう、併し乍ら二人の間は夢より果敢ない

ものでムいました。今北光の神様からいろいろと御理解を承はり、今後どうしたらよからうかと思案にくれてゐる所です」

「假令天律を破つてもかまはぬぢやありませんか。一分間でも自分の本能を満足させることが出来れば、死んでも朽ちても構ひませぬ。二人が根の國底の國へおとされようとも、貴方と手を引き合つてゆくならば、構はぬぢやありませんか」とマサカの時になれば、大膽な女である。ヤスダラ姫は最早神の教も何も忘れず、捨て鉢氣味になつて、王の決心を煽動したり促したりしてゐる。

「成程、貴女の心としてはさう思はれるのも尤もです。私だつて貴女を思ふ心は決して劣りませぬ。併し乍ら、そこを耐へ忍ぶのが人間の務めだ。月に村雲花に嵐、思ふやうにゆかぬは浮世の常、如何なりゆくも神様の御攝理、かうして半時の間でも、一生會はれないと思つてゐた相思の男女が會つて、心のたけを語り合ふのも、神様の深きお情、私はこれで最早一生會ふことが出来なくても、決して神様を恨んだり、世を歎いたりは致しませんまい」

「貴方の戀は實に淡泊なものですなア。それで貴方は最早満足なされましたか。」

エ、情ない、そんな御心とは夢にも知らず、何とかして貴方に巡り會ひ、海山の話を互に打明け、凡ゆる艱難や妨害に堪へ、假令虎狼の吼え猛る深山の奥でも、夫婦となつて戀の本望を遂げねばおかぬと、矢竹心に勵まされ、劍呑な荒野原をわたり、イルナの都に逃げ歸る途中、神様の御引合せにてここに助けられたので、ムいます。どうぞそんな氣の弱いことを仰有らずに金剛不壞的の大度胸を出して、兩人が目的の貫徹を計つて下さいませ。貴方にはサマリー姫様といふ最愛の奥様がお控へ遊ばしてゐるので、無理もムいますまい。イヤ妾も迷うて居りました。最早貴方の心は昔日の心ではムいますまい。誠にすまないことを申上げました。どうぞサマリー姫様と幾久しく偕老同穴をお契りなさいませ。妾は幽界とやらへ參つて、御夫婦のお身の上を守りませう」

と言ひ放ち、ワツとばかりに王の膝に泣き崩れる。王はハタと當惑し、今の泣聲がもしや北光の神様のお耳に入つては居ないであらうかと、ツと立つて隔ての戸を押し開き、あたりに人のあるか、なきかを查べむとするを、ヤスダラ姫は王の吾を見捨てて逃げ出し給ふならむと早合點し、力に任せて王の手をグツと後へ引

た。王は不意に姫に手をひかれた途端に、夕チ夕チと二足三足後しざりし、姫の膝に躓き、パタリと其場に倒れ、岩壁に頭を打ち、ウンと一聲、人事不省に陥つて了つた。ヤスタラ姫は此態を見るより、

「あゝ如何しよう 如何しよう」

と狂氣の如く室内を駆け巡り、王の頭に手を當て、

「モシ、王様、許して下さいませ。決して貴方をこかさうと思つたのぢやありません

せぬ。怪我でムいます。貴方ばかり決して殺しは致しませぬ。妾もキツトお後を

慕ひます」

と言ひながら、スラリと懐劍の鞘を拂ひ、つくづくと打眺め、

「果敢なきは夢の浮世と知りながら

かかるなげきは思はざりけり。

戀慕ふ君に會ひしと思ふ間も

泣く泣く此世の別れとなるか。

悲かなしさは小ちひさき胸むねに充みちあふれ

泣なく涙なみださへ出いでぬ吾われなり。

ゆるしませせーラン王わうの神司かむつかき

やがてはわれも御供みともに仕つかへむ。

北光きたてるの神かみの命みことよヤスダラ姫ひめの

心卑しんひしとさげすみ給たまふな

と云いひながら、アワヤ吾喉わがのどにつき立てむとするを、此時このとき戸外こがに立たつて様子やうすを伺うかがひ
ぬたるリーダーは慌あわただしく飛とび込み来きたり、矢庭やはに姫ひめの懐劍くわいけんを奪うばひ取り、聲こゑを勵はげまし、
「ヤスダラ姫ひめ殿どの、狂氣きやうき召めされたか、かかる神聖しんせいなる靈場れいぢやうに於おいて、無理心むりしんぢう中ちゆうとは何なん
のこと、天則てんそく違反ゐはんの大罪だいざいとなる事ことをお辨わきまへなさらぬか。そんな御心おこころとは知しらず、
貴女あなたの御身おんみを保護ほごし、テルマン國こくを命いのちカラガラ逃にげ出し、猛獸まうじうの猛たけび狂くるふ荒野あらの原はらを
やうやう越こえて此處こゝ迄までお供ともをしながら、勿體もつたいなや王様わうさまを殺ころし、貴女あなたも亦またここで御ご
自害がいをなさるとは何なんと云いふ情なさけないお心こころでムいますか。八岐やまたの大蛇をろちか金毛きんまう九尾きうびの惡あく

狐に憑依され、そんな悪心をお出しなされたのでせう。モウかうなる上は此リーダーが承知致しませぬ。王様の仇を討たねばおきませぬ」

と聲を震はせ、叱りつける様に言ふ。王は「ウンウン」と呻きながら、頭をかかへて起上り、

「あゝヤスダラ姫、そこに居たか、何を泣いてゐる。ヤア汝は何者だ、凶器を以て姫を脅迫せむとするか。不届き至極な癡者、許しは致さぬぞ。そこ動くな」

と聲を尖らせ睨めつけければ、リーダーは王の蘇生の嬉しさと誤解の恐ろしさに、狼狽へながら、

「メ、滅相な、ここ迄お供して来た姫様を何しに殺しませう。そんな誤解をして貰つちや、此リーダーの立場がムいませぬ。姫様が狂氣遊ばして貴方様を殺し、自分も自害なさる覺悟だと思ひ飛込んで、たつた今姫様の短刀を奪ひ、お意見を申上げてゐた所でムいます」

「王様、嬉しや氣がつかれましたか、此リーダーは決して悪人ではムいませぬ。どうぞ許してやつて下さいませ」

「あゝさうであつたか、眞まことにすまなかつた。リーダーとやら全く誤解ごかいだから許ゆるしてくれ」

「ハイ有難ありがたうムいます、お分わかりになればこんな結構けつこうなことはムいませぬ」

「こんな騒さわぎは北光きたてるの神様かみさまに知しれたら大變たいへんだが、もしやお分わかりになつては居ゐなからうかなア」

「へーへー、スツカリと分わかつて居をります。北光きたてるの神様かみさまも竹野姫たけのひめさまも龍雲りゅううんさまも、次の間つぎで貴方あなた等がた二人ふたりのお話はなしを耳みみをすましてお聞ききになつてゐる……とは申まをしませぬ……だらうと考かんがへます」

「立聞たちききは不道徳ふだうとくの極きはみだ。あれ位くらゐの神人しんじんがどうしてそんなことを遊あそばすものか。ヤスダラ姫ひめ、安心あんしんをしたがよからうよ」

「北光きたてるの神様かみさまは天眼通てんがんつうりきを得えたる生神様いきがみさま、何程遠なにほどとほく隔へだたつて居をりましても、手てに取とる如ごとくに御覽ごらんになつて居をります。又また吾々われわれの言げんも得意とくいの天耳通てんじつうで一言ひとことも洩もらさず、お聞ききになつてをるでせう。あゝ恥はづかしいことになつて來きました」

「北光きたてるの神様かみさまの天耳通てんじつう、天眼通てんがんつうが分わかつてゐるのなら、なぜ其方そなたはあの様やうな大膽だいたんな

ことを言つたのだ」

「妾が言はなくても、北光の神様は心のドン底まで見すかしてゐられますから、言つても云はいでも同じことですワ」

「恥しいことだなア。イルナの國王も北光の神様の前へ出ては象に對する鼠のやうなものだ。いかにもこんなことでは、あの小さい國でさへも治まりさうなことがない。國王だと云つても僅かに五萬や六萬の人間の頭だから小さいものだ。北光の神様は諸王に超越し、天地の意志を代表なさる生神様だから大したものだ。モウ此上は恥も外聞もいつたものでない、何事も北光の神様の御指圖に任さうではないか」

「ハイ、さう致しませう、併し乍ら吾々二人を都合よく添はして下さるでせうか」
「又そんな事を言つてはいけませぬ。リーダーが聞いてゐるぢやありませんか」
「王様、此リーダーは血もあれば涙もあり、情も知つて居る圓満具足な下僕でいます。ヤスタラ姫様の事ならどんな事でも厭ひませぬ。何なと仰有いませ、只一言だつて御兩人の秘密を洩らすやうな野呂馬ではムいませぬ。シヤールの主人

に背き、姫様の御意志に賛成して、命がけの仕事をやつて来た位でムいますから、大丈夫です。なア姫様、貴女は私の心をよく御存じでムいませう」

「ハア、能く分つてゐる。北光の神様の、お前は一つ都合を伺つて来てくれないか、之から御面會がしたいから……」

「ハイ承知致しました」

とニタリと笑ひ、此間を立出で、二三間ばかり行つた所で、一寸立ち止まり、

「何と甘くおまき遊ばしますワイ。久しぶりにお二人が對面遊ばし、餘り仲がよ

すぎて死ぬの走るの暇をくれのと、戀仲にはありがちの癡話喧嘩を、面白半分

やつてムつた眞最中に、俺が氣が利かないものだから、本當の喧嘩だと思つて飛

込んだのが間違ひだ。甘く俺をまいて、意茶つきをやらうといふのだなア。ヨシ

合點だ。そんなことの氣の利かぬリーダーぢやない。そんな頭の悪い呑込みの悪

い粗製濫造の頭腦とは違ひますワイ。イヒ、さぞ別れて久しき二人の逢瀬、

泣いっ口説いっ、抱いたり、跳ねたり、つめつたり、叩いたり、思ふ存分久し

りでイチヤつかして上げようかい。早く北光の神様に御都合伺つて来いなんて、

甘い辭令で遠ざけようといふ賢明な行方だ。コリヤあわてて正直に行くとか却つて御迷惑になるかも知れぬ、三足往つては二足戻り、二足往つては三足戻り、オツト、そんな事して居ては、何時迄も同じ所に居らねばなるまい。併し乍ら、そこが粹といふものだ。さぞ楽しい嬉しいことだらうなア。俺も何だか嬉しうなつて來た。ウツフ、ウツフ、と隧道に停立して、獨り囁いてゐる。ヤスダラ姫は氣が咎めたか、リーダーが立聞して居つては恥しいと氣をまはし、戸をガラリとあけて外を覗けば、リーダーは二三間離れた所に停立して、頻りに首を縦にふり、横にふり、舌を出したり、眉毛を撫でたりやつてゐる。ヤスダラ姫は細い聲で、
「コレコレ、リーダー、何をしてゐるのだい。早くお使ひに行つて來て下さらぬか。困るぢやありませんか、王様がお待兼ぢやのに」
「ハイ、承知致しました。急いては事を仕損ずる。急かねば事が間に合はぬ。あちら立てればこちらが立たぬ。兩方立てれば身が立たぬといふ、誠と情との締木にかかり、稍思案にくれにけり……といふ爲體でムいます。本當に急いで行つて

もいいのですか、姫様、御迷惑になりは致しませぬか。正直も結構ですが、餘り融通の利かぬ正直は却て迷惑をするものですからなア」

「コレ、リーダー、そんな御親切はやめて下さい。お前等の下司の戀とは行方が違ひますぞや。阿呆らしい、仕方のない男だなア」

「ヘン仰有いますワイ。下司の戀だと……【コヒ】が聞いて呆れますワイ。戀所か腰まで鮎々になつてゐるくせに、戀に上下の隔てなしといふぢやないか。上司の戀も下司の戀もあつたものか、戀はヤツパリ戀だ。リーダーはヤツパリ、リーダーだ」

「コレコレ、早う行つて来て下さらぬか、何をブツブツ言つて居るのだい」

「ハイ、何分岩窟の中で水が切れて居るものですから、鯉も鮎も泳ぎにくうて早速游泳が出来ませぬワイ。戀の海に游泳術の上手な貴女ならば知らぬこと、何だか妙な怪體な氣になつて、私の腰迄が……ドツ【コイ】……シヨのドツコイシヨ、フナフナになつて、思ふ様に歩かせぬがなア」

「エ、勝手にしなさい、モウ宜しい、大方法界悋氣でもしてゐるのであらう」

とピシヤツと岩戸を閉めて了つた。

「アハ、、、、、今頃は色の黒き尉どのと白き姥どのが、日は照るとも、曇るとも、鳴アるは瀧の水瀧の水、たアきを上りゆく戀のみち、戀に上下の隔てなし、法界悋氣をするぢやないが、お前と私と二人の喜びは、ほうかいへはやらじ、おんはカタカタ、エンはカタカタと三番叟の最中だらう。エへ、、、、イヒ、、、、ウフ、、、、」

と妙に腰をブカつかせながら、北光の神の居間をさして、チヨコチヨコ走りに進み行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 松村眞澄録)

第四篇

神出鬼没

第一七章 宵企み〔一一二一〕

イルナの都の右守の館にはカールチン、テーナ姫、ユーフテスの三人が、何事か首を鳩めて話し合つて居る。

カールチン「ユーフテス、テルマン國のシャールの妻ヤスダラ姫は、まだ行方が分らないか、エーン」

ユーフテス「ハイ、未だハツキり分りませぬ。セーリス姫をして様子を窺はしめし所、テーナ姫様がテルマン國へお出になり、毘舎のシャールをしてヤスダラ姫様を監禁せしめられた後、十日ほどした所で暴風雨の暗夜を窺ひ、姫様に仕へてゐた僕のリーダーと云ふ男が牢獄を叩き破り、何處ともなく逃げ失せたと云ふ事です。大方姫様と其僕との間に何か深い關係があつたのではなからうかとの噂も聞きました。セーリス姫様も大變に姉の不始末を悔んで居られます。昨夜旦那様の御命令によつて照山峠の頂まで参りました處、テルマン國よりシャールの家の者共馬に跨り、五人連にてやつて参り「ヤスダラ姫、リーダーに會はなかつたか」

と尋ねました。が併し、ヒヨツとしたらセーラン王の廻し者ではないかと空惚けて取り合はなかつた所、五人の騎士は照山峠を北へ北へと下つて行きます。私はセーリス姫の意見を聞き、屹度ヤスダラ姫は、左守の司の父の館へ歸るものと存じまして、よくよく調べて見ましたが女らしいものは一人も來ませず、五人の騎士に追ひつき、共々に馬に乗つて都に歸り、騎士を一夜さ宿泊させ、心當りを捜索せよと命じ返しまして御座ります」

折角遠國からやつて來た者を、吾に相談もなく「ぼつ」返すとはチツと僭越ぢやないか。なぜ一目會はしてくれなかつたのか、エーン」

それは濟まない事で御座りますが、併し私は左守に知れてはならないと氣を

【いら】ち、態とおつ返したので御座ります。屹度ヤスダラ姫は照山峠を越えて歸つて來るに間違は御座りませぬ。愚圖々々して左守の部下等にヤスダラ姫を捕られようものなら大變で御座りますからな。左守に於てもヤスダラ姫の此方へ歸つて來ると云ふ事は略承知をしてゐるさうですから、決して油斷はしてなりませぬ。又昨夜參つた五人の騎士はヤスダラ姫のスタイルをよく知つてゐる者ばかり

ですから、丁度都合が好いと存じまして照山峠の麓まで差出しまして御座ります」

「それは眞にいい考へだつた。併し乍ら、お前の戀女セーリス姫はヤスダラ姫の妹だから滅多な事はあるまいな。ウツカリした事は云はれないぞや」

「何を仰有います。同じ姉妹でも心は黒白の違ひ、セーリス姫は決して姉の鼻肩をしたり、親の鼻肩をして自分の戀を犠牲にするやうな悪人では御座りませぬ。極めて私のためには大善人で御座りますから」

「大黒主神様の御命令により旦那様が刹帝利の位に上られ、セーラン王を退隱させて安樂に暮させよとの思召し、それも全く吾娘のサマリー姫が妃になつてゐる餘德によつて、セーラン王様の身が安全なのだ。サマリー姫も王様に對しては非常に戀慕してゐるやうだから、如何しても末永く添はしてやらねばなるまい。そこへヤスダラ姫が歸つて來ようものなら、又もや王の心が變りサマリー姫は戀に破れた結果どんな無分別な事をするか分らず、實に氣の揉める事だよ。一事も早くヤスダラの入城を遮り、之を捉へて人の知らぬ所に監禁し、王との接近を妨げねばなりませんぞや。ユーフテス、合點かな」

「ハイ、萬事萬端私の胸に御座ります。御安心なさいませ」

かかる所へ息せき切つて驅込んだのはマンモスである。

テーナ「ヤア、そなたはマンモス、城内の様子は如何だつた」

「ハイ、王様は俄の御病氣でお引籠りと云ふこと、一切面會を禁じられてゐますから、詳しい事は存じませぬ。併し夜前何でも女が二人ばかり、男が二三人大奥へ忍び込んだと云ふことを聞きました」

テーナ姫は首をかしげて、

「はてな、王様の御病氣、そして二人の女に三人の男、大方ヤスタラ姫が参つたのではあるまいかな」

カールチン「おい、ユーフテス、其方の考へは如何だ」

「ハイ、セーリス姫に聞きましたら、俄に王様が御不快なので、バラモン教の修驗者を二三人ばかり、お招きになつたと云ふことで御座ります。別に大したものぢや御座りませぬ」

テーナ姫は、

「ア、それだと云つて警戒厳しき城下を、誰の目にもあまり觸れないやうにやつて來ると云ふのが怪しいぢやないか。ユーフテス、そなたは一應城内の様子を調べて來ては呉れまいかな」

「ハイ、畏まりました。左様ならば之から一足、何知らぬ顔して登城致し、内部の様子を考へて來ませう。マンモス、其方も來て下さるまいかな」

「いや、私は少しく右守様に申上げたきことあれば、何卒御苦勞ながら貴方お一人お出でを願ひます。さうして變つた事があれば、直様お知らせ下さいませ。右

守様のお供をして、直様登城致しますから」

「然らば旦那様、一應様子を考へて参ります」

と云ひながら一生懸命に足を早めてイルナ城の王が館へ進み行く。

ユーフテスの姿が隠れるのを見すまし、マンモスは聲を潜めて、

「旦那様、貴方はユーフテスを何處までも御信用なさいますか。私が斯様なことを申上げますのは、何か野心があつて彼を陥穽する様に思召すかも知れませぬが、如何も此頃の彼の舉動、怪しき點が澤山御座ります。御兩人様、どうもお考へ遊ば

天眼通も開けて居るでせう。よもや裏返り者を信用してお使ひ遊ばす筈もありませぬから、私も少しばかり安心して居ますが、何だかチツトばかり氣にかかつてなりませぬ。第一、昨日迄ピチピチして居られたセーラン王様が急病ぢやと云つたり、或は修験者が夜中に招かれてお館へ参るなどとは、如何しても合點の行かぬ節が御座ります。ここは篤と調べなさらねばなりませんまい」

カールチン「それなら其方は是から登城してユーフテスに内證で様子を調べて来てくれ」

「ヤア有難う、待つてゐました……そのお言葉を待つて居ました」

とマンモスは、いそいそとして館を立出で城内さして進み行く。

イルナの城内セーリス姫の居間を慌しく訪うたのは例のユーフテスであつた。ユーフテスは四邊をキヨロキヨロ見廻しながら人影なきに安心の胸を撫で下し、足音を忍ばせながら姫の居間に進み入り、耳許に口を寄せて、

「姫様、御安心なさいませ。ハルナの國から大黒主の援軍が澤山に來る所で御座りました。近國に一騒動が起つたと云ふので軍隊の派遣が暫時遅れる事になり

ました。此分ならば一ヶ月やそこらは大丈夫です。併しながら右守は大變に力を落して居ります。それに又ヤスダラ姫様がテルマン國を遁走遊ばしたので、やがて都へお歸りになるだらう、さうなれば大變だと非常に氣を揉んでゐますが、そこも私がうまくチヨロまかして置きましたから之も御安心なさいませ。併し乍ら王様の急病と云ひ、女の修驗者が入りこんだと云ふ事は何かの祕密が潜んで居るに違ひないから、一寸調べて來いとカールチンが申しましたので様子を調べると申してやつて來たのです。何と云つて返答をしたら宜しいでせうかな」

「何と面白い事になつて來ましたな。一月ばかり軍隊が攻め寄せて來るのが遅れるとならば、其間に、どんな準備も出來ます。これから一つ黄金姫様、清照姫様に御相談申上げ、何とか考へをつけます」

と云ひながらユーフテスを伴ひ黄金姫、清照姫の居間に進み行く。

セーリス姫は襖の外より細き聲にて、

「私はセーリスで御座ります。黄金姫様、清照姫様、お邪魔に參りましたが差支はムりませぬか」

黄金姫は、

「いえいえ、チツとも差支は御座りませぬ。サア何卒お這入り下さいませ。今朝からお目にかからないので、如何かとお案じ申して居りました」と座蒲團を手づから二枚敷いて、

「サアお坐りなさいませ」

とすすめる。セーリス姫は、

「御免下さいませ」

と云ひながら黄金姫と向ひ合せに座を占め、

「時に黄金姫様、面白い事になりました。大黒主の軍隊が攻めて来るのは近國に騒擾が起つたため一月ほど遅れると云ふ確報が御座りました。さうして此ユーフテスは右守の股肱の重臣でムりますが、妾と割りなき戀に落ち、其爲め今は妾の申す事ならば、どんな事でも聞いて下さる善人で御座りますから御安心下さいませ。何をお話し下さつても大丈夫ですから」

黄金「オホ、セーリス姫様、随分貴女もお轉婆ですな。やあ、ユーフテス

様とやら、天下第一の色男さま、オホ、この黄金姫も感心致しました」

とポンと背中を二つ三つ叩いた。ユーフテスは得意になり鼻をピコつかせながら、

「ハイ、カールチンは私の主人ではムいますれど、神様のお道に反した悪ばかりを企む奴でムりますから、已むを得ず誠の方について居るのでムります。別にセーリス姫様の容色に心魂を盪かして主人に背き反対をする様な野呂馬ではムりませぬ。只正義のため至誠をささげて活動を續けて居るのでムります」

とうまく心の生地を隠さうとつとめてゐる。

城内一般に姉のヤスタラ姫が逃げ歸つて、城内に潜んで居るとの噂が立ちましたので、右守のカールチン夫婦が氣を揉み、サマリー姫の迷惑になると云つて非常に騒いで居ります。又ヤスタラ姫が歸つて来たならば、屹度王様に智慧をつけて左守と共に何をするか知れない。さうすれば折角の企みも水泡に歸すると云つて騒いでゐるさうですから、一つ清照姫様にお世話になつて、姉のヤスタラ姫と化けて貰つては如何でせう。うまいお芝居が出来てせう。軍隊が攻めて来るには一ヶ月も間があるのですから、右守をうまく引き寄せて膏をとり、誠の道へ改

心をさせたら面白からうと存じまして、實は御相談に参りました」

「オホ、随分貴女も悪戯が好きですな。こんな上下騒がしい時に、そんな氣樂な事をよく思ひついたものですな。いや感心々々、綽々として餘裕の存する其態度、それでなくては大事は遂げられますまい。清照姫、お前暫くヤスタラ姫様に早變りして見たら如何だらうな」

「ホ、至極妙案ですな。妾はなりません。一つ辣腕を揮うて右守の肝玉を抜いてやりませう」

「早速の御承知、有難うムいます。これこれユーフテスさま、早く右守の館へ歸つてヤスタラ姫様がお歸りだと報告して下さい。面白い事が出来ますから」

「それでもヤスタラ姫様は長面、清照姫様は少し圓顔ぢやムいませぬか。右守に賈ものだと看破される様な事はムりますまいかな」

「何御心配は要りますものか。女は化物と申しまして作り次第で如何にも化けられますよ。これから一つ化粧でもして化けてやりませう。明日早朝右守を連れてお出で下さいませ。妾の腕前を一つ見せて上げますから、オホ、」

「面白からう」

と黄金姫はうなづく。セーリス姫は得意氣に、

「オホ、、、」

と笑ふ。ユーフテスは、

「エへ、、、此奴あ、チツトばかり面白くなつておいでたわい」

（大正一一・一一・一二 舊九・二四 北村隆光録）

第一八章 替へ玉（一一・一二）

イルナ城の奥の間には黄金姫、清照姫、セーリス姫の三人が首を鳩めて姦しく喋々囁々と論戦を戦はして居る。

セーリス「あのまア、清照姫様のお美しい事、ヤスダラ姫様そつくりですわ。よ
うまアお顔も御覽になつたことがないのに、それ程似るやうに造れましたねえ」

「照山峠の麓でお目にかかったのですよ。其時のお顔を記憶に止めて居て作つたのですから、寫眞に取つたやうなものですわ。何事も新しい女の覇張る世の中ですから、清照姫もどうやら新しいヤスダラ姫様になつて仕舞ひました。オホ、、、、、」

「併し、新しい世の中が建設されるとか、されたとか、三五教では仰有るぢやムいませぬか」

黄金姫はしたり顔にて答ふ。

「新しき天と新しき地とが今度は三五教の神力によつて現はれるのですよ。今迄の天と今迄の地は既に過ぎ去つた今日です。是から聖城なる新しきエルサレムが地に下り、國治立尊が降り給うて天下萬民も亦新しく生き返らせ給ふ時代に近づいたのです。エルサレムの城は四方になつて居て長さと幅と同一です。木花姫命様が天教山より出雲姫命を遣はし給うて、竿を以てエルサレムの城を測量させられた所が一萬二千フアールングあるといふことです。城の長さも廣さも高さも皆相等しく、其石垣は百四十四キューピットあつて、碧玉にて石垣を築き、其城は

清らかな玻璃の如き純金で造り、城の石垣の礎は各様々の寶石で飾られてあります。十二の門は十二の眞珠で造られ、透き徹る様な黄金造りの建物ばかりで目も眩ゆきばかりであります」

セーリス姫は驚いて、

「新しい天や新しい地が現はれるとはソリヤ大變な事ぢやありませんか。地異天變も爰に到つて極まれりと謂ふべしですな」

「新しい天地とは新しい教會のことで、要するに埴安彦、埴安姫の神様が三五敎の道場をお開き遊ばしたことを指して謂ふのですワ」

「天より下り来るエルサレム城といふことは全體何をいふのでせうか」

「救世主神埴安彦の神の示し給ふ所の天地の誠、三五敎の敎説のことであります」

「その長さ廣さ高さ相等しくして各一萬二千フアーロングがあると仰有つたのは、如何なる意味でムいますか」

「三五敎の敎説中の眞と善と美とを合一して言つたのです。又城の石垣といふのは此敎を守護し宣傳する神司のことです。百四十四キューピットあるとは三五敎

の眞と善と美の三相を悉く擧げて稱讚したもので、宣傳使たるものの純良なる性相を言つたのです。又眞珠より成つた十二の門とは能道の眞を言つたのです。寶石より成れる石垣の礎といふのも彼の説教を聞いて立つ所の諸々の知識を云ふのであります。城を造れる清く透れる玻璃に似たる黄金とは至仁至愛の徳を指して言つたのです。教説と其眞と善と美は愛の力に由つて倍々透明となるものですか
らなア」

「さうすると「天地が逆様になるぞよ」といふ三五教の御神諭も矢張右の式で解釋すれば宜いのですかなア」

「三五教の宣傳使や幹部の中には今でも天と地とが現實的に顛覆するやうに思つて居る人々もあり、御經綸の靈地に眞珠の十二の門が現實的に建つ様に思つて居る人々があるのだから、それで困るのですよ。セーリス姫様も矢張さう思つて居られませうなア」

「へいへい、最も現實に立派な宮が建つたり、お城が築造されるものだ、思つて居ましたワ」

「現實的にソナ立派な宮を建てようものなら、忽ちウラルやバラモンから睨まれて叩き潰されて了ひますぞや。オホ、、、」

「オホ、、、」

「本當に神様の教といふものは六ヶ敷いものやうな易いものですなア。何故コソナ事が肝腎の幹部の連中さまに解らなかつたのでせうかなア、お母さま」

「是も時世時節だから仕方がありませんわ、アーアー」

「かうして、清照姫様のヤスタラ姫は出来上りましたが、右守はもう來さうなものですなア。ユーフテスも何を愚圖々々して居るのでせうか」

「斯く話す折しも廊下に聞ゆる足音、黄金姫はツと立つて王の籠りし室に身を隠し、中より錠を下して了つた。清照姫、セーリス姫は煙草盆を前に置きスパと煙を吐いて居る。」

「そこへユーフテスの案内で足音高くやつて來たのは、カールチン、マンモスの兩人である。清照姫は、ヤスタラ姫の聲を一度聞き覺えて居るのを幸ひ、作り聲をして、」

「オ、其方は右守の司カールチン殿、先づ御無事で重疊々々、ヤスダラ姫も其方の壯健の姿を見て安心致したぞや」

カールチンは周章てて、

「イヤ、姫様のお歸りと承はり早速お伺ひに参るところでムいしましたが、あまり突然の事で信ずる譯にもゆかず、ユーフテスをして實否を伺はせました處、正しく姫様のお歸りと聞き、取るものも取敢へず伺ひました。先づ御壯健で何よりお目出度うムいます」

と氣乗らぬ聲で嫌さうな挨拶をして居る。

「コレ右守殿、其方の言葉には極めて冷淡の色が現はれて居ますぞや。御叮嚀にテーナ姫を遙々とテルマン國まで使者にお立て下さいまして、罪もない妾をシャールに牢獄を作らして投げ込んで下さった御親切は決して忘れはしませぬぞや。弱い女と見えても左守の血統を享けた刹帝利の女、如何なる鐵牢でも、この細腕で一つ押せば、何の雜作もありません。鼻糞で的をはったやうな牢獄に繋がれて苦しんで居るやうな女だったら、さつぱり駄目ですよ」

「これは異なることを承はります。テーナ姫は、二三ヶ月の間、館の門を潜つたことはありませぬ。そりや何かの間違ひか、但は何者かの計畫で厭テーナ姫が貴女を苦しめるべく参つたのでせう。左様なことを仰せらるるからは、キット貴女も此右守がテーナと腹を合せ、善からぬ事を企んで居ると思はれるでせう。これはこれは近頃大變な迷惑、どうぞ神直日に見直し聞直し、疑を晴らして下さいませ」

「あの白々しい右守殿の言葉、妾はテーナ殿の顔をよく見知つて居るから、疑が晴らしたくば此處へテーナ殿を連れて來なさい」

「ハイ、何時でも連れて参るのが本意で御座いますが、昨夜より急病が起り大變苦しんで居るから、本復次第お目に懸らせませう」

「妾は其方に對し厚くお禮を申上げねばならぬ事がある。右守殿、決してお忘れではありますまいなア」

「これは又、合點の行かぬお言葉、貴女様にお禮を云うて頂くやうな事は致した覚えは無いませぬがなア」

「オホ、右守殿も年が寄つたと見えて健忘症になられましたなア。妾は親

と親おやとの許嫁いひなづけでセーラン王様わうさまと夫婦ふうふと定きまつて居ゐたのを、其方そなたは御親切ごしんせつにも妾わらはをテ
ルマン國こくの毘舍びしゃの館やかたへ無理むりに追おひやり、吾娘わがむすめサマリー様さまを王わうの妃きさきに押おしつけなさ
いましたでせう。其時そのときの妾わらはの嬉うれしさ、否腹いやはら立たしさ、これがどうして寝ねても醒さめ
ても忘わすれられませうぞいなア」
と甲聲かんごゑを張はり上げあげて呶鳴どなりつけた。

「貴女あなたは、一切いっさいの經緯いきさつを御存ごぞんじないから、左様さやうな御立腹ごりつぷくをなさいますが、これに
は深い様子やうすのあることことでムごいます。セーラン王様わうさまや左守さもりの司かみクーリンスはおほくろぬし
の神様かみさまに内々ないない反對はんたいなされ、鬼熊おにくま別様わけさまの御鼻ごひいき肩かたばかり遊あそばすと云いふことがハルナの
都みやこに知しれ渡わたり、この右守うもりに對たいして嚴きびしい御質ごしつもん問もん、お家いえの一大事いちだいじを思おもひ、イルナの
國くにを救すくふべく、また王様わうさまを安全あんぜんに守まもるべく、貴女あなたにはお氣きの毒どくながら、あゝいふ
手段しゆだんを取とつたのです。さうして吾娘わがむすめサマリー姫ひめを妃きさきに差さし上げたのも、大黒主様おほくろぬしさま
に安心あんしんさせる爲ための安全辨あんぜんべん、何卒どうぞこの右守うもりの胸中きようちゆうを御推察ごすゐさつあらむ事ことを希望きぼう致します
「あゝさうだつたかなア。右守うもり司つかさの六韜りくたう三略さんりやくの兵法へいはふをし知らず、貴方そなたを今迄いままで恨うらん
で居ゐたのは誠まことにもつて恥はづかしい、女をんなの身みの淺薄あさはかさ、それでは妾わらはも是これから再ふたび此處ここ

を立ち出で、サマリー姫様のお邪魔をしないやうに致しますから、御安心なさいませ」

「貴女はこれからテルマン國のシャールの館へ歸つて下さいませか。さう願へれば大變結構でムいますか」

「そりや眞平御免蒙りませう。又してもギス籠の中へ投込まれますと、叩き潰して出て來ねばなりませんア、ホ、ホ、ホ、」

「キット此右守が保護致しまして左様な不心得な事は、シャールに嚴命して致させませぬから、どうぞお歸り遊ばして下さい。さうして貴女は王様にお會ひになりましたか」

「折角お目にかからうと思ひ、遙々虎口を遁れ、【ここ】迄やつて來ました所、拍子の悪い時には悪いものです。王様は俄の大病でお引き籠り遊ばし、何人にも面會せないとのこと、妾の心もちつとは推量して下さいませ、右守殿」と態と泣聲を出して芝居をして見せた。

カールチンは威丈高になり、

「王様が御面會せぬと仰有るのに、貴女は御命令に背き、たつて會はうと遊ばすのか、何と云ふ不届きな御心でゐる。今日は右守の司、王様に代つてヤスダラ姫を放逐致すから、サ早くお立ち召され」

「セーラン王の許嫁の誠の妻ヤスダラ姫、今日より汝右守に對して退職を命ずる。エ、汚らはしい、一刻も早く退城召され」

「これはしたり、ヤスダラ姫は狂氣召されたなア。狂人をお館へ置くは危険千萬、火の用心の程も案ぜらるる。イヤ、マンモス、ユーフテス、速にヤスダラ姫を捕縛して座敷牢にぶち込み御静養をさせ奉れ。彼様な事が外部に洩れては王様の御信用に關する一大事だから」

「アイヤ、ヤスダラ姫が命令する。ユーフテス、マンモス、セーリス姫、速にカールチンを高手小手に縛め牢獄に投入せよ。主に向つて無禮千萬の行り方、容赦はならぬぞ。セーラン王に代り固く申しつくる」

マンモスは途方に暮れながら、

「オイ、ユーフテス、どちらを聞いたらよいのだらうかなア」

セーリス姫は、

「オホ、、、。一層の事どちらも牢獄に投げ込んだらどうでせう。喧嘩兩成敗と

云ふから、まさか片手落ちの處置も取れますまい」

「マンモス、ユーフテス、主人カールチンの命令を聞かぬか」

「ハイハイ、聞かぬ譯ではムいませぬ、一寸暫くお待ち下さいませ。マンモスは

俄に便所へ行きたくなりましたから」

「ユーフテス、早く捕縛せぬか」

「ハイ、捕縛致しませう、併し一つ考へさして下さいませ。セーリス姫様に篤と

相談を致しますから」

「オホ、、、このヤスダラ姫に指一本でも觸れるなら觸へて御覽、面白い活劇

が演ぜられ、手足首胸所を異にし、小兒のお玩具箱の人形のやうになりますよ。

それでも構はねば何人に限らず手向ひして御覽」

右守の司は眼を瞋らし、清照姫を睨めつけて居る。マンモスはブルブルと

地震の孫宜しく慄へて居る。セーリス姫、ユーフテスは平然として沈黙を續けて

ゐる。其處へスタスタ駆つて來たのはサマリー姫である。

「ヤアお前はサマリー姫、こんな處へ來るものでない、控へて居なさい。何故家に居ないのか、誰人に聞いてやつて來たのだ」

「父上、そんな氣樂なことが云うて居れますか。王様は御大病、妻の私として、どうして知らぬ顔がして居られませう」

「其方は此間から夫婦喧譁をおつ始め、未だ其和解も出來て居ないのだから、話のつく迄早く吾館へ歸つて待つて居るがよからうぞよ」

「ヤア珍らしや其方はサマリー姫殿、妾は其方の爲に許嫁の夫に添ふ事も出來ず、テルマンの國に追ひやられたヤスダラ姫でムいますぞ。日頃の恨を晴らすは今此時、よい處へ出てムつた。サア覺悟なされ」

と襷十字に綾取つて見せた。サマリー姫は打ち驚き、カールチンの腰に喰ひつき、ぶるぶる慄へながら、

「もしもお父様、どうしませう、助けて下さいませな」

「ウン今に待て、ヤスダラ姫をふん縛つて、其方の邪魔を除いてやるから」

と云ひつつ、懐中より呼子の笛を取り出し、ヒユウヒユウと吹き立つれば、忽ち十數人の捕手、バラバラバラと此場に現はれ來り、清照姫に向つて武者振りつくを、清照姫は兩手を擴げ四股を踏みしめながら、

「イヤ面白し面白し、ヤスダラ姫が武勇の現はし時、木端武者共、一人も残らず懲してくれむ。サア來い來れ」

と身構へする。美人の雄々しき權幕に捕手は茫然として手出しもせず遠卷に巻いて居る。次の間より戸を隔ててセーラン王の聲、

「アイヤ右守の司、吾はセーラン王なるぞ。サマリー姫靜かにせよ。ヤスダラ姫に向つて手向ひ致せば、最早吾は許さぬぞよ。サマリー姫、吾言を用ひずば唯今限り夫婦の縁を切る。それでもよいか」

と唖鳴つたのは、云ふまでもなく、隣室に隠れて居た黄金姫の作り聲である。カールチンは王の聲としては少し年が寄つて居るやうである。併し病氣のため體が弱り聲が慄うて居るのであらうと心にきめて了ひ、俄に言葉を柔げて、

「御病氣中をお氣を揉ましまして誠に濟みませぬ。何卒お許しを願ひます」

「王様、どうぞ許して下さいませ」

とサマリー姫は泣きすする。

「王様、妾はテルマン國から貴方を慕ひ申し遙々参りました許嫁の妻、ヤスダラ姫でムいます。何卒サマリー姫との縁を切り、私を貴方の妻として下さいませ。さうしてどうぞ一度尊きお顔を拜まして下さいませ」

と態と涙を流しさし俯く。

次の間より又もや王の作り聲にて、

「バラモン教の大棟梁大黒主様は、一夫多妻主義だ。先の妻を逐出して第二の石生能姫を本妻に遊ばし、吾々に手本をお示し下さつた以上は何も憚る事はない。サマリー姫を元の如く本妻と致し、ヤスダラ姫は第二夫人として上女中の取締りに使うてやるから安心を致せ。右守の司も、これに違背はあるまいがなア」

「ハイ、理義明白なる御仰せ、決して違背は致しませぬ。サマリー姫をどこ迄も本妻として愛してやつて下さいますか」

次の間より王の聲、

「サマリー姫の心次第だ。次では右守の司の改心次第だ。最早餘も刹帝利の職に飽き果てたから、ここ一二ヶ月の間に吾位を汝に譲る程に、早くサマリー姫を連れ歸り、餘が本復を待つて改めて登城致すがよからう。又ヤスダラ姫も、サマリー姫に餘が面會するまでは面會は許さぬぞ。さう心得たらよからう。コンコンコン、あゝ苦しい、餘は咳に悩んで居るから、病氣本復する迄神殿に籠り御祈願を凝らすによつて、右守殿、餘が後を繼ぐ用意を萬事萬端館に歸つて整へたがよからうぞ」

右守は此言葉を聞いて雀躍しながら、
「ハイ何分宜敷くお願い申します。然らばサマリー姫を一先づ吾家に連れ歸り本復を待つて登城致させませう。何卒一日も早く御本復あらむ事をお願い申します。サア、サマリー姫、マンモス、是より館へ歸らう。ヤア者共、餘を館へ送つて參れ。ユーフテス、汝はセーリス姫と共に此處に止まり萬事に氣をつけ召され」と云ひ捨て意氣揚々と己が館をさしてドヤドヤと歸り往く。

其後へ黄金姫は戸を排して現はれ來り、清照姫、セーリス姫ユーフテスと顔を

見合せ、

「オホ、ウフ、エへ、アハ、」
と笑ひ倒ける。日は漸く西天に姿を没し、雙樹の枝に止つた九官鳥は大口を開けて、阿呆々と鳴き立てて居る。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 加藤明子録)

第十九章 當て飲み(一一一二三)

イルナ川の清流の一部をとり込んだ泉水の中に瀟洒たる茶室が建っている。これは右守の館で、今朝は早朝よりカールチン、テーナ姫、マンモス、サモア姫、ユーフテスの幹部連、願望成就の前祝として盛に酒酌み交し浩然の氣を養つてゐる。カールチンはテーナ姫、サモア姫に盛り潰され、王者氣取りになつて豪然と腹の中の泥を人もなげに吹き立て出した。

カールチンはまはらぬ舌を、顔を顰めて無理に使ひながら、

(酔泥口調) 「オイ婆アさま……ではない、昔の別嬪のテーナ姫、此方の智略は

偉いものだらう。まるで久延毘古神か思兼神の様な神智鬼策が臍下丹田から湧い

て来るのだから、エーン、此神は足は歩かねども天ヶ下の事は悉く知る神な

り、奇魂千憑彦の命の再来とは此方の事だ、エーン。今に入那の國、テルマン國

を併合して、大王國を建設し、テーナ姫でなくてテーナ妃と改名さしてやる。何

と婆アさま、嬉しいだらうなア。エーン」

「あまり悲しいこともムりませぬ。併し乍ら、さうなると私は却て悲しうなるか

も知れませぬ。一層今の身の上の方が夫婦睦じく暮せますから、何程結構だか分

りますまい。又大黒主の神様の眞似をして糟糠の妻を無残におつ放り出し、ヤス

ダラ姫の様な美人を後釜に据ゑられちゃ、まるつきり鳶に揚豆腐を浚はれた様な

ものですからなア。旦那様は性が悪いから案じられてなりませぬわ」

「そりや何を吐すのだ。いやしくもバラモン教の道を奉ずる善一筋の此方、そん

な没義道な事を致しては其方に濟まぬじやないか。いや其方ばかりぢやない、此

方の心も頓と濟まないから、滅多にそんな事はないから安心をしたが宜からうぞ、エーン。折角酒がうまく廻つた所へ、そんな取越苦勞を云つてくれると、サツパリ興が醒めて了ふぢやないか。エーン」

「それ聞いてチツトばかり安心を致しました。貴方に限つて、そんな事をなさる筈はありませぬわネー。初めて會つた時、あなたは何と仰有いました。よもや忘れては居られますまい」

「こりやこりや、何を云ふか。そんな事を喋るとユーフテスやマンモス、サモアが氣を揉んで嫉妬をやき居るから、昔のロマンスはここらで、うまく切りとしたり如何だ。エーン」

「若い時の蜜の様な戀を時々思ひ出すのも、あまり氣の悪いものじゃありません。人間の楽しみは若い時のロマンスを時々思ひ出す位愉快なものはありません。それを忘れちや人生の趣味も何もあつたものぢやありませんわ」

とテーナ姫も酒に酔ひ潰れた勢で、四邊構はず昔の戀を喋り立てようとする。

「何とまあ、旦那様、奥様も面白い時があつたのですな。一遍聞かして下さいま

せな。私もセーリス姫と云ふ戀しい女が出来て居るのでから、研究のために聞かして貰へば大變都合が宜しいがな。あゝあ、二夫婦に一人鰥か、セーリス姫も氣が利かないわい。ほんの一寸でいいから顔なつとつき出してくると、ユーフテスの肩身も廣くなるのだけれど、まだ公然の夫婦でないから仕方ない。先の樂しみとしようかな、エーン」

「こりやこりやユーフテス、エーンとは何ぢや。俺のお株を占領しやがつて、誰に斷つて其エーンを盗んだか、エーン」

「別に盗んだのぢやムいませぬ。あまり澤山に旦那様がエーンを落しなさるものですから、一寸私が拾つたのでムりますよ。一時も早くセーリス姫とエーンを結びたうムりますわい、エーン」

「オホ、ゝゝゝ、エーンエーンの掛合だなア。チツトはエーン慮したら如何だい。エーンと月日は待つがよいと云ふぢやありませんか。エーンはテーナ」

「何と云つても、戀の情火にこがされて、胸に焰がエーンエーンと燃え立ちますわい。貴方たちは、さうして夫婦仲よく笑つたり、意茶ついたりして居ながら、

まだ未婚者のユーフテスを氣の毒なとも、可愛相なとも思はず、「お前のエーン談等は吾不關エーン」と云ふやうな態度でゐらつしやいますから、つい私もエーン世主義になりかけは………しませぬわい」

「何は免もあれ、こんな目出度い事はないぢやありませんか。マンモスは一日も早く成功の日を見たいものでムリますなア」

「成功の日は已に見えてゐるぢやないか。現にセーラン王様が右守さまに位を譲つてやらうと仰有つたぢやないか。王者の言葉に決して二言はあるまい。これと云ふのもヤツパリ旦那様が器量の佳い賢明なお娘様をお持ちなさつたからだ。あゝあ、持つべきものは娘なりけりだ。ユーフテスも早くセーリス姫と結婚して美しい傾國の娘を生み、老後を楽しみたいものだわい、アーン」

「こりやこりやユーフテス、アーンなんて吐すとサツパリ貴様の縁談はアーンになつて了ふぞ、アーン」

ユーフテス「こりやマンモス、茶々を入れるのか、入れるなら入れて見い。俺にも了簡があるぞ」

「この國は茶々が名物だ。碾茶なつと煎茶なつと盛つてやらうか。チャチャヤー
トコセ、ママチートコセ、セーリス姫さまに、うまく「ちよるまか」されて、終
ひの果てには肱鐵砲、日頃の思ひも滅茶苦茶、蜥蜴の様な面をして、あんなシヤ
ンに秋波を送るなんて、チャンチャラをかしい。しまひの果てにやチャツチャ、
ムチャに此縁談は揉み潰されて了ふぞ。そんな事は此マンモスの天眼通でチャ
ンと分つて居るのだ、エーン」

サモア「オホ、今日(けふ)はまア、何とした面白い日(ひ)でせう」

「おい、貴様達、今日は右守の祝宴だから、何なつと喋つたが宜いが、もう一二月
ケ月すると俺は刹帝利様だから、こんな氣樂な事は出来ないぞ。其位の事は貴様
も辨へて居るだらうな、エーン」

「そりや辨へて居ますとも、このユーフテスは。併し貴方だつて、あまり良くない
事を考へてゐなさるのだから、何れどちらへなりと埒が付きませうかい、ア
ン」

「こりやこりや、善くない事とは何だ。チツと無禮ではないか、エーン」

「貴方は寡欲恬淡な、チツとも欲のないお方と云つたのですよ。凡て世の中は捉まへやうとすれば、捉へられぬものです。旦那様は萬事にかけて抜け目なく、よくない方だから王様の方から昨日の様にあんな結構なことを仰有るのでムリますわい。これを思へば時節は待たねばならぬものですな。(都々逸)「時世時節の力と云へど、よくないお方が王となる」あゝヨイトセ ヨイトセぢや。おいマンモス、貴様も一つ前祝に歌はぬかい。大蛇の子のやうにグイグイ飲んでばかり居やがつて、何の態だ。チとコケコーでも唄つたら如何だい、アーン」

マンモスは鹿爪らしく、
「飲む時には飲む、遊ぶ時には遊ぶ。然り而うして聊か以て唄ふべき時には唄ふのだ。俺も若い時や、千軍萬馬の中を往來して来た英雄豪傑……ではない、其英雄豪傑の……傳記を讀んで、チツとばかり感化力を養ふ……たと云ふチーチャーさまだからな、エーン。貴様の如き燕雀輩の敢て窺知する所に非ずだ。(詩吟)」
「月は中空に皎々として輝き渡り、マンモスは悠々として酒杯に浸る。月影映す杯洗の中、絶世の美人吾傍に在り」とは如何だ、うまいだらう。俺の詩歌は而も

特別誂へだからなア、エーン」

「貴様の【詩歌】はカイローカイローと紅葉林で四足の女房を呼ぶ先生の聲によく似て居るわ。オツとそのカイローで思ひ出した、俺も早くセー【チヤン】と偕老同穴の契を結びたいものだ。貴様のやうなシヤツチもない【詩歌】を呻ると氣分が悪うなつてくるわい。シカのシは【死人】の【死】だらうよ。もつと生命のある歌を歌つたら如何だい、アーン」

マンモスは咳一つしながら、

「詩歌の詩の字は言扁に寺と云ふ字を書くぢやないか。死人の納まる所は寺だよ。ユーフテス」ヘーン、うまいこと云ふ【寺】あ、墓々死いことをユーフテスぢやないか、マンモス奴」

かく管を巻く處へスタスタとやつて来た一人の男、一通の手紙を差出し、
「旦那様、ハルナの都から急ぎの使が此手紙を持って参りました」

と恭しく差出すを、カールチンは酔眼をカツと見開き、手紙を手早く受取り封を押切つて文面に目をそそぎ、

「エ、何、むつかしい文字が書いてあるぞ、何だかよく動く文面だなア。二筋にも三筋にも、素麵の行列のやうに文字が活躍してゐるわい。こりやヤツパリ大黒主様の御筆蹟と見える、活神様のお筆は違つたものだ。ようよう益々活動し出したぞ」

と目をちらつかせ手を震はせ、讀まうとすれども如何しても讀む事が出来ない。「おい、テナ姫、貴様一つ讀んで呉れないか。非常に墨痕淋漓として龍の走するが如き活きた文字だから何處かへ逃げさうだ、エーン」

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、どれ妾が讀んで見ませう」と手紙を受取り、

「エ、……此度汝の願により騎馬の軍卒二千騎派遣致すべき所、隣國のセイナに暴動起り、これを急々鎮定すべく、アルマンをして之を率ゐしめ征討に向はせられたらば、汝が請願に應じ難し。併し乍ら何時擾亂鎮定すとも量り難ければ、五百騎を急々汝が許に派遣すべければ、萬事萬端の用意あつて然るべし。右守の司力ー
ルチンへ、大黒主宣示……」

「よしよし、それで解つた。併しながら、隣國に騒動が起つて居るにも拘らず、五百騎を派遣下さるとは、よくもよくも吾々を信用して下さつたものだ、實に有難い、併しながら最早セーラン王の口から、あゝ言つたのだから、戦ひの必要もあるまい。併し何時惡智慧をかふ奴があつて變心されるかも知れない。其時の用意に五百騎の勇者があれば何事も都合よく行くと云ふもの、まア謹んでお受けをする事に致さうかなア。おい、ユーフテス、お前は太黒主様の使者に會つて宜しくお禮を申上げて呉れ。俺が直接にお目にかかるのが本意なれども、斯う氣樂さうに酔ひ潰れた處を使者に見られたら大變だ。太黒主様の信用を落してはならぬいからなア」

と稍酔ひも醒め、少しく眞面目になつて宣示した。

「委細承知致しました。使者に接見するのは、此ユーフテスを措いて、外に適當な人物は憚りながらムいますまい。左様なれば、特命全權公使として接見仕らう。いや吾々一人では全權公使の貫目が足らぬ。マンモス、お供を致せ、アーン」
「エー、馬鹿にしゃがるない。誰が貴様の下について行く奴があるかい。此マン

モスは、これから出世をせにやならぬ體だ。使者に顔を見られ……マンモスはユーフテスの下役ぢや……と思はれちや、將來のため大變な不利益だから、利害の打算上から見て、まア止めて置かうかい、エーン」

カールチンは、

「あゝ酔うた酔うた、こんなヨタンボで如何して使者に接見が出来ようか。大自在天大國彦命、守り給へ幸へ給へ、ゲーウツプ、ガラガラ、ガラガラ。餘り俄のお使で腹の蟲奴が清潔法を始めやがつて、飲んだ酒までが逆流しだした。あゝ苦しい事だ。苦しい中にも楽しみありだ。あゝあ、ユーフテス、うまく使者に會うたら内兜を見透かされぬ様にユーフテスとやるのだよ、エーン」

「旦那様、左様ならば今日は貴方の代理として使者に接見して参ります。宜しうムりますかな」

「よしよし、貴様に全權を委任するから、そこはうまくやつて来い」

「左様ならば、これより得意の外交的手腕を揮つて見せませう」

と云ひすててバタバタと表へ驅け出した。ユーフテスは他の四人の様に酔ひ潰れ

ては居なかつた。セーリス姫の注意によつてカールチン夫婦の凡ての行動を視察するのが第一の目的だつたからである。ユーフテスは表へ出で態とにヒヨロリヒヨロリと千鳥足になりながら、

(酔ひどれ口調) 『ハルナの國の大黒主の神様のお使はド、何處にケ、ケ、ケつかるのだ。特命………全權公使の………俺はユーフテスさまだぞ。早く此處へ………俺の前へ出て來ぬか、アーン』

門番のケールは此態を見て走り來り、

『もしもし、御家老様、ハルナの國のお使はあの手紙を渡したきり、これから力ルマタ國へお使に行くと言つて「一寸お待ち下され」と云ふのも聞かずに馬に鞭鞭ち一目散に歸つて了はれました。そんな足許で追掛けても駄目ですよ』

『ナ、何だ、サツパリ後の祭で持ちも卸しも出來なくなつた。併し乍ら、これも何かの神様の御都合だらう』

と云ひながらヒヨロリヒヨロリと足許危ふく奥を目掛けて歸り行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 北村隆光録)

第二〇章 誘惑〔一一二四〕

セーリス姫はイルナ城の吾居間に一弦琴を弾じて居た。

☐ 天と地とを造らしし 國治立大神は

百の神等々々の 誠の親にましまして

仁慈無限の神徳を 遍く下し給ふなり

イルナの城は日に月に 八岐大蛇や醜狐

曲鬼共の蔓りて 首陀の姓より生れたる

右守司のカールチン 鰻登りに登りつめ

驕り傲ぶり今ははや セーラン王の御位を

狼ひ居るこそうたてけれ イルナの城は風前の

今燈火となりし時 救ひの神の現れまして

傾く城を立直し セーラン王の身の上を

安く守らせたたまひつつ

魔神の頭上に鐵鎚を

下させ給ふ時は來ぬ

あゝ面白し面白し

ヤスダラ姫の妹と

生れあひたる吾こそは

イルナの城の太柱

非道の事とは知りながら

魔神に従ふユーフテス

言葉の先に操りつ

醜神共の企らみを

洩れなく落ちなく探らせつ

神の御爲君の爲

世人のために村肝の

心痛むる苦しさを

さはさりながら天地の

神は吾等の眞心を

清き御目に嚮はし

必ず許したまふべし

伴られたるユーフテス

彼が心の憐れさを

妾は知らぬにあらねども

大事の前の一小事

セーラン王の勅

背かむ由もないぢやくり

涙を呑みて荒男

操り來る苦しさを

あゝ惟神々々

神が表に現はれて

善神邪神を別けたまふ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞き直し

身の過ちは宣り直す

尊き神の御教

セーリス姫の心根を

憐れみ給ひて逸早く

セーラン王の身の上を

守らせたまへ惟神

此世を造りし大神の

御前に畏み願ぎまつる

御前に慎しみ願ぎまつる

と歌を終り、合掌して聲も靜に「國治立尊、守り給へ幸倍たまへ」と祈る折しも、足音忍ばせながら入り来るはユーフテスである。セーリス姫はユーフテスの慌しく入り來りしを見て、言葉急しく、

「ヤア其方はなつかしきユーフテス殿、何か變つた事がムいますかなア」

「ハイ、俄に申上げたき事があつて右守の前をつくるひ參りました。いよいよ大

黒主の神が五百騎の軍隊を派遣し、右守と力を合せ、セーラン王様を退隠させむとの計略が整ひました。何とか用意を致さねばなりませんまい」

「其軍隊は何時頃此處へ押し寄せて参りますか、分つて居りませうなア」

「あまり長くはありますまい。カルマタ國へ派遣された大足別の所へ参る使者が往きがけに大黒主様の信書を携へ、右守の館へ放り込んで参りました。右守もやや安心して、もはや軍隊の必要がないから、お断り申さうかと迄云つて居ました處へ、五百騎の應援軍を送るとの書面を頂き、俄に鼻息が荒くなつて参りました。それ故取るものも取りあへず貴女迄報告にやつて來ました」

セーリス姫は平然として些も騒がず微笑を浮かべながら、

「それは段々と面白くなつて來ましたなア。どちらになつても、私と貴方の結婚さへ都合よく出來れば好いぢやありませんか。オホ、、、」

「そりやさうですが、矢張セーラン王様が押し込まれなさつては貴女だつてあまり都合はよくありませんまい。従つて私だつて羽振りが利きませぬからなア」

「兔も角黄金姫様に一つ申上げて來ますから、貴方此處に待つて居て下さい」

とツと立つて黄金姫の居間に進み入り、ユーフテスが報告の顛末を殘らず物語つた。茲に黄金姫は清照姫、セーリス姫と三人鼎坐して、ひそひそ對抗策を打ち合す事となつた。

「思ひの外大黒主の軍勢、早く押し寄せ來るさうだが、何とかこれを阻止する考へはあるまいかなア。清照姫」

と云ひつつ清照姫の顔を覗き込む。清照姫は微笑しながら、

「お母さま、そりや何でもない事ですわ。私が其五百騎を喰ひ止めて見ませうか」

「それは誠に結構だが、其方一人でどうして喰ひ止める考へですか」

「兔も角右守を此處へ呼んで下さい。さうして私と右守と只二人、一室に入つて

密談を遂げ、うまく右守より喰ひ止めさせて見ませう」

黄金姫は肯きながら、

「ホ、ホ、清さま、お前の美貌と辨舌とを應用すれば何の事もありませんまい。

どうぞ確りやつて下さいや」

「三寸の舌鋒をもつて、五百の軍隊を一人も殘らず逐ひ散らすのも亦愉快でせう、

オホ、、、

セーリス姫は喜ばしげに、

「それならこれからユーフテスに命じ、右守を當城へ呼び寄せませうか」

清照「どうぞ早く、其手続きをして下さい」

「こんな時にはお轉婆娘も亦必要だ。清さまも随分こんな事には経験がつんで居るからなア。オホ、、、」

「お母さま、冷かして下さいませ。何ほ秋だと云つても餘りですわ」

「セーリス姫様、何卒早く頼みますよ」

セーリス姫は「アイ」と答へて此場を下り、吾居間に待たせて置いたユーフテスの耳に口を寄せ何事かを囁いた。ユーフテスは一切萬事呑み込み顔で、セーリス姫の居間を立ち出で表に出で、大地をどんだん威喝させながら、木々の梢を渡る木枯の風、遠慮會釋もなく笛を吹いて通る城の馬場を尻引からげ、矢を射る如く右守の館をさして韋駄天走りに進み行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 加藤明子録)

第二章 長舌（一一二五）

右守司のカールチンは唯一人奥の間に端坐して、やがて二カ月の末には日頃の願望成就し、刹帝利の地位に進むだらう、さうすれば城内の大改革を施さねばなるまい。先ず第一着手として何から始めようかなどと、猿猴が水の月を掴むやうな蟲のよい考へに耽つて居た。其處へユーフテスは慌しく入り来り、
「モシモシ旦那様、お喜びなされませ。イヒ、ヒ、ヒ、ヒ、お目出度う御座います。貴方は本當に偉い方ですなア、偉大の人格者ですよ。ヤスダラ姫様が此間貴方のお顔を一寸拜み遊ばしてから、俄に病氣になられましたらブラブラとして居られませ。何卒一遍見舞に往つてあげて下さいませな。ドクトル・オブ・メチチーネでもイルナの湯でも、どうしてもかうしても治癒しないと云ふ御病氣になられませ、朝から晩までウンウンと唸り通し、それはそれは氣の毒で目を開けて見ては居られませぬ。そこでセーリス姫様が、大變御心配遊ばして、其病源をお探り遊ばしたところ、ヤスダラ姫様は、エ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、と細い細い柳の葉の様な目をして「妾

の病は氣の病だ、ウ、モ、リ、と云つて俯むいて後は何も仰有いませぬ。そこで呑み込みのよいセーリス姫様が「ハ、アこれは右守さまに【ホ】の字と【レ】の字だな。これは到底旦那様のお顔を見せねば本復は出来まい」とちやんと心の中で裁判して、ヤスダラ姫様に向ひ言葉淑やかに「モシ姉上様、何か心に秘密があるのでせう。妹の私に云はれない事はありますまいから、仰有つて下さいませ。どんな事でも姉様の事なら御用を承はりませう」と驚か鈴蟲のやうな聲で尋ねられた處、ヤスダラ姫様はやうやう涙の顔を上げ「あゝ妹、よう親切に尋ねて下さつた。お前の心は嬉しいが、餘り恥かしくて口籠り何も云へませぬ。もう私は生きて此世に望みのない身の上だから、潔う死にます」と、【とつけ】もない事を仰有るのでセールス姫様は益々御心配なされ、いろいろと手を變へ品を替へ探つて見なされた處、姉計らむや妹計らむや、立派な奥様のある旦那様に戀慕してゐると云ふ事がハッキリと分りました。エへ、お目出度うございます。お浦山吹でゐますわい」

カールチンは忽ち目を細うし涎をくりながら、

「ウツフン、そんな事があつたら、それこそ天地が【ひつくり】返るぢやないか。若い者なら兔も角も、こんな年寄つた五十男にそんな事がありやうがないぢやないか。腹の悪い、そんなに人を煽てるものぢやないわ」

「イエイエ決して決して旦那様にそんな嘘を申上げて濟みますか。戀と云ふものは老若上下の區別はありませぬ。又女と云ふものは虚榮心の強いものでムいいますから、旦那様がやがて刹帝利におなり遊ばすのを聞いて益々戀が募つたものと見えます。併し乍ら、貴方様には立派な奥様がおありなさるのですから、そんな事を云うては濟まないと、セーリス姫様が懇々と説諭をなさつたさうですけれど、ヤスダラ姫様はどうしてもお聞き遊ばさず「此戀が叶はねば淵川に身を投げて死ぬから後の弔ひを頼むぞや」と、それはそれはエライ御決心、どうにもかうにも、手に合ひませぬ。どうぞ一度姫様の館へ、助けると思つて奥様へ内證で行つて上げて下さいませ。さうして貴方から篤くりと説諭して下さいましたら、戀の夢も醒めるでせう」

カールチンは目を細くしながら、

「何と困つた事が出来たものだ。どれどれそれなら是からヤスダラ姫に會ひ、篤くり道理を説き聞かし思ひ切らしてやらう」

「といそいそとして座を立つ。ユーフテスは後を向いて舌を出し、再び向き直つて顔を元の如くキチンと整理し、

「色男様、オツトドツコイ、大切な旦那様、左様ならばユーフテスがお供致しませう。萬々一情約締契が調ふやうな事がムいましたら、貴方は私の相婿のお兄様、なるべくお兄様と云はれるやうになつて貰ひたいものですな。エへ、へ、へ、へ、」

「ユーフテス、矢釜しいぞ、女房に悟られちや大變だからなア」

「奥様に氣兼ねさる處を見ると矢張ちつとは脈がありますなア。イヤお目出度う、お祝ひ申します」

「カールチンは押へ切れぬやうな嬉しさうな顔を晒しつつ、

「オイ、ユーフテス、しようもない事を云ふものでないぞ。エへ、へ、へ、へ、」

「と思はず知らず笑をこぼし城内指して進み行く。ユーフテスも後に従ひ、舌を出しながら跟いて行く。カールチンはフト走りながら後を見ると、ユーフテスが長

い舌を出して頤をシヤクつて走つて來るのが目についた。

「こりや、ユーフテス、何だ長い舌を出して人を馬鹿にするない」

「餘りお目出度いので、きつと結婚の時にはどつさり御馳走をして下さると思ひ、今から舌なめずりを【した】のでムいます。これは誠に失敬しま【した】、エ

へ、へ、へ、へ」

「こりや　こりやユーフテス、先へ往け、貴様が後から來ると何だか小忙しくつて仕方がないわい」

ユーフテスは、

「それなら旦那様、お先に御免蒙ります」

と云ふより早く先に立ち、もうかうなつちや後に目鼻はついて居ない、何程舌を出したつて見とがめらるる心配はないと、カ一杯長い舌を出し頤をしゃくりながら、とんとんとんと駆け出す途端、高い石につまづいてバタリと倒れる機に舌を噛み、ウンと其場に血を吐いて打ち倒れた。カールチンはヤスダラ姫の事のみに見つて、ユーフテスの舌を噛んで倒れて居るのに氣がつかず、其體に躓いて

三間ばかり前の方にドスンと打ち倒れ「アイタ、タ、タ」と膝頭を撫でながら、まだ気がつかず、

「ユーフテスの奴何だ、俺が倒れて居るのも知らずに、主人を後にして雲を霞と何處かへ行きやがった。何と脚の早い奴ぢやなア」

と呟きながら、とんとんと道端のイトドやキリギリスを驚かせて城内指して一目散に走り行く。

(大正一一・一一・一二 舊九・二四 加藤明子録)

~~~~~

靈界物語 第四一卷 舍身活躍 辰の巻

終り